

---

# IS ~ 転生者と『朱』の物語 ~

佐久紗府斉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS（転生者と『朱』の物語）

### 【Nコード】

N0300X

### 【作者名】

佐久紗府斉

### 【あらすじ】

まっすぐな生き方が神に評価され、チートを引っさげISの世界に！

両親の死後、無意識に心を閉ざしかけ、狂ったように「何かを守る」ために

奔走する少年の物語。別世界で凍てつく少年の心をときほぐす相手は果たして

現れるのか！？

勢いそのまま書いてるのでカオスになるかもです。

作者がガンダム好きなので  
パクリ装備（主にガンダム）が大量にあるので苦手な方はお引取り  
を・・・

読んだ後にはぜひ評価をお願いします！！

## 転生前っつーか死に際（前書き）

はじめまして、初投稿です。原作を読みながらになるので果てしなく遅いです。

初めてで何も分からないのでガンガン指摘ください！

拙い作品ですが暇な時はぜひ読んでみてやってください！！

## 転生前つっつか死に際

赤黒い液体が自分の腹からとめどなく溢れてくる、あ これもう駄目だわ、と

確信するまで時間はかからなかった。いきなり死に掛けていてる所だが俺の名前は

たかみねこうよう  
高峰紅鷹十六歳 小中学校と喧嘩三昧だったが友達につられて読んだ

ラノベ(ガンムseedとdestiny。アニメよりラノベで読むのは珍しいと友達に言われた)

今では広く浅くな半ヲタだ。十三歳の時に俺の両親は俺を強盗から庇って死んだ。

それから俺は何かを守ることを目標にした。そして今日、路地裏で絡まれていた女の子を

庇って久しぶりに全力で拳を振るった。結構群れていたが所詮いきがるだけの素人、

対してこっちは喧嘩大好き家族に鍛えられ(シバかれ)なんかもう父さんの自己流喧嘩術

をマスターしている。あつというまに勝負はついた。「ありがとうございましたっ!」

と女の子の礼と走り去っていく後ろ姿を見て「俺もやっとなんかを守

れるようになった」

と思い、一息ついて……（クソがああああ！！）……振り向きかけた刹那、

俺の腹から金属の先端が突き出していた。で この状況である。

「自惚れもいいとこだな……ハハ……」そう呟き、心の中で父さんと母さんに詫びつつ

俺は倒れ伏し、目を閉じた。

転生前っつーか死に際（後書き）

うん・・・眠い・・・なかなか（笑）な駄文ですね。まあぼちぼちやるんで

よろしくお願いします zzz・・・

やっただろ転生できる・・・神ッッッ!!!(前書き)

こんにちは 作者です。転生の話です。

本編は次からになる予定です。・・・長い・・・  
ではごーぞー



やっぱり転生できる・・・神ゴツッ!!

・・・ん・・・ん・・・

うつすらと開いた目を見開いてまどろんでいた意識を一気に覚醒させる。

は・・・! ? 何処ここ? 俺は・・・腹を刺されて・・・死んでないのか! ?

微かな希望を持って一息に体を起こす。 ってやっぱり死んでるだろこれ・・・

何でそう思ったかって? 自分の周りを見れば分かります、はい・・・。

今俺の周りにはただ真っ白な空間・・・だけでなくその中で無数の本棚もとい本が

台風が何かのように虚空に舞っている。

どうやら俺はその「目」の部分に寝ていたらしい。

「おおコイツ! コイツの生き様は! いい!」

なんか声が聞こえるぞ・・・振り向いてみるとそこには・・・ってゴツッ!

筋骨隆々の大おっさん(?)がなにやら目を輝かせて一冊の本を読んでいる。

「おお、起きたか。」と言われたのでここは無難に「どちらさま?」と聞く。

「え?神だけど?」・・・なにいつ!!と驚いてはいるが内心見当はついていた。

俺だつて半ヲタ、SSくらい読めますよ。これは俺の死因がコイツの手違いで

「お詫びに転生・・・」と来るパターンDA　じゃー行くとしたらあゝ・・・

「をい　戻つて来い」　呼ばれてトリップ状態から戻る俺。

「さて突然だがお前は死んだ」知ってますよ。「同じく突然だが転生させてやるっ」

待つてました。俺が死んだのがあなたの手違いだったんですよ  
ね」

「んな訳あるか」・・・「じゃなんで俺はここにいるんですか」

「簡単に言つとだな・・・」ゴクリ・・・

「感動したからだッ!!」・・・は?

「何に」「お前の生き様にだ!」・・・ほおゝ、なるほどねえ。

確かに俺は両親の死後、何かを守りたくて必死だった。

がむしゃらに何かを守ろうとした。そんな約三年間の生き様が神様に評価されたのかもしれない。「……これをDVDにして……売りつけ……がっぽ」

……まてや。

「金目当てじゃなーか！」だいたいお前金いらんだろーが。

「う……うるせえ！転生できんだからいーだろーが！」なんか逆切れされた……

「で？何処行く？やっぱガンダムか、でもガンダムはターン 以外認めん。」

「なにゆえ！？」二回目のツッコミをかます。

「ほかにもあるぞ……エヴァ、マクロス、アクエリオン……ISなんてどーだ？」

お いいねー ISは一巻しか読んでないがお気に入りに入りラノベの一つだ。

「じゃあISがいい」「チートつけ」「つけるツツツ！」

「なにその食いつきこわい」「……軽く引かれたがまあよし。やっ  
たぜい

「何個まで?」「俺の許す限りいくらでも」まじか!!

「じゃあまず俺をスーパーコーディネイターにしてくれ!あと機体にトランザム付けてくれあとは・・・あとは・・・ガクツ・・・(うなだれる俺)」

「なんでもやっていいよ」と言われると思っていたより思いつかない・・・。

「まあいい、後は俺がガンダムシリーズとかから付けといてやる」

おっさん・・・恩にきるぜ・・・「なんせいい金ヅ・・・その代わりに、転生後も撮らせ・・・いや見させてもらっぞ」・・・「本音ダダ漏れだコンチクショー!!」

隠す気あるんだろーか・・・「まあできる限り付けとくからあゝどチートにするからあゝ」

「媚びるな気持ち悪い」「うるせー!蚊に転生させるぞ?」「止めてください。」

・・・なんだよチート付きの蚊って・・・メツチャ速いとか?

「まあいいISの世界を楽しんでこい、少しは自分に正直に生きればどーだ・・・」

最後の方はよく聞き取れなかった、「分かった。でもほんとにどチートで頼むよ」

「おう、ぶつちゃ俺もかなりのオタクである自信がある、抜かり無しだ。」

・・・そうだったんか・・・まあいや。

「では、送るぞ。」「おう!！」

そして俺の視界が白く輝く・・・と思いきや神が近づいてきて「オラァ!」掛け声とともに

俺の頭を広辞苑級の本でフルパワーで殴り飛ばした。

(あんのクソオヤジがああああ!!) (心の中で叫び終え、俺は意識を手放した。

「ふう・・・」神は倒れて光に包まれる少年を見てため息をついた。

「さて・・・どうなるか・・・楽しみにしているぞ・・・」  
そして・・・

「俺の小遣いのためにも頑張ってくれ(キリッ)」

・・・なんとというかいろいろぶち壊しな一言だった・・・。

しかしその後の「お前のような真っ直ぐなやつは転生後ぐらいは楽  
しませてやらんとな、

お前はただ死ぬだけじゃもったいなさ過ぎる・・・」と誰も聞くも

のがない空間で

呟いた神の顔はとても神らしい慈愛に満ち溢れた顔だった・・・。

やっとたゝ転生できる・・・神ゴツッ！！（後書き）

やっと転生できたようですね。えかったえかった^^  
ここからまた相当遅くなります。テスト週間来ますので・・・  
でわでわ

**本編第1話 やっぱり落下から始まる俺の転生(直)後(前書き)**

はい 作者です・・・やっとな本編・・・かとおもいきや  
まだ正式には入学していません。

たぶんこれからストーリー進行はぐぐぐの遅遅になると  
思われますのでどうか長い目で、生暖かい目(？)で  
見守ってやってください^^



本編第1話 やっぱり落下から始まる俺の転生(直)後

紅鷹は薄い意識、まどろみにも近い状況の中にいた。

「あゝなんかいい感じだわこれ」なんだか体が軽くて宙に浮いているようだ。

・・・なんかずつとここに居ていい感じもするわあ・・・

「聞こえてるか」 ハッ！そーいえば！「なにさらしてくれとんじやあアああ!!！」

うつ・・・急に殴られた頭が痛くなってきた、おもいつきりやりやg  
「おお〜い」

かぶせんなやコラア!!」「聞けつっの・・・」「まあいい、聞いてみよう。

何処からか神の声が聞こえる、

「いいか今からお前はISの世界に落ちる。チートもがっぽりつけたからせいぜい  
楽しみたまえよ。」 「分かった」・・・ん？ちょ、落ちるておま・・・

「何で落とすんだよッ!!！」 「転生の王道は落下でしょ〜よお(笑)」

「(笑)うな!」「ええ〜・・・勘弁だぞ・・・」

「いやスマンしかしたな、異世界に転生させる時は出てくる現場を見られちゃ

いけないんだ、そこは分かってくれ。それにもうISはお前の腕輪にしといたから

起動させれば無傷ですむさ……うん！きつとそうさ。」

いやな予感しかしませんが……しかしそんなルールがあったとは知らなんだ。

ふと自分の腕輪を見るとなるほどまったく色のない鉄の腕輪がついている。

……どっちかっていうと手錠だよこれ……(汗)

「それじゃ送るわあ、じゃ〜ね〜。」「えっこのISでなんて言う名……」

ISの名前を聞き終える前に俺の視界は真っ青になった。……綺麗な空だ……

「うっ、わあああああ……！！！！」俺は。(こんな顔で真っ直ぐに

地面に向け落下していった。

「はっ！あ、IS！アイエスおおおおぼぼぼおおおおお！！！！」

ぐっ……息がしづらい！！」ISの名前知らねばだあ……あ……あああ！！！！」

とそうこうしているうちに地面が近づいてきた。つて学園の敷地じやねーか！

下には決して少なくない数の生徒が居る。「うわああどけええー  
ー！ー！」

必死に叫ぶとやっと気づいたのか女生徒たちが口々に叫びながら蜘蛛の子を

散らすように俺の着弾地点(?)から距離をとる。うわもつやべえ！

(来いッ俺のIS!!) もう死ぬ気で念ずると腕輪が光り、俺の体を包み……

「ドガアアアアアアアアあんー！」「ガアアアン」「  
アアン」「……ン」

……すげえ響きましたよ……。なんとか起動が間に合ったようで俺は無傷で済んだ。

もうもうと立ち込める土ぼこりで何も見えない。「え!?!え??.  
なに!?!」と

周りで凄い数のざわめきが聞こえる。どうやら人だかりができてい  
るようだ。

その中に「ええい！静かにしろ小娘共！」凜とした女性の声も聞こ  
える。

ああ、この声は千冬さんかな?.. そんなことを漠然と考えつつ  
俺はとりあえず

この土ぼこりが治まるのを待つことにした。

く千冬サイドく

「ドガアアアアアアアアあん！！」

「な！？何だ今の大きな音は！？」尋常ではない音を聞いた私は校舎から飛び出した。

そこに広がっていたのは・・・「な・・・なんだこれは！！」

思わず絶句してしまふ。ここIS学園の敷地にかなりの大きさのクレーターができていた。

一喝して小娘共を黙らせ、目を凝らして土ぼこりの中を凝視する。

あれは・・・

「ISだと？」思わず声を出してしまった。そうクレーターの中心部には一機のISが

横たわっていた。しかも、しかもだ。「お、男！？」一人が大声を上げた。

そう・・・横たわっていたのはISを着用した、「男」だったのだ・・・。

そのISがゆっくりと起き上がる。周りの群衆が一步後ずさる中、私はそのISに拳銃を突きつけ、怒鳴った。「動くな！！」

・・・展開中のISを前にして拳銃などまったく意味を成さない。それでも私は

精一杯の敵意と殺気を込めて言う。「こっちへ来て貰おう」

するとその男はISを腕輪の状態に戻し素直にこちらについて来た。敵ではないようだ。私の全身を安堵が駆け巡り、力を抜いて男を中へと案内した。

く紅鷹サイドく

やっと土ぼこりが晴れて見えるようになってきた……ってうわ！俺の着弾地点にはクレーターができておりそのふちにこれでもかという位の女子の顔があった。何この光景ちょっとこわい。

俺が若干引いていると、あ、千冬さんがこっちに拳銃を向けている「動くな!!」

抵抗なんてしねえよ……「こっちに来て貰おう」と言われおれはISを腕輪状態に戻し、おとなしくついていく姿勢を見せた。

すると千冬さんも少しは安心してくれたらしい。軽く手招きをし、ついて来いと  
言わんばかりに歩き出した。拳銃も下げている。ここで俺が襲い掛かったら  
どうするつもりなんだろうか。

まあそんなことをする気は毛頭ないので言われるがまま千冬さんの後についていった。

本編第1話 やっぱり落下から始まる俺の転生(直)後(後書き)

はい、遅いですね・・・まあそれなりに長い期間をかけて  
展開させようと思っておりますっ。

あんま期待せず「お、更新されてる〜」ぐらいの感じで  
見てやってください。      でわでわ〜^O^)

## 主人公紹介（改）（前書き）

ども^^^

主人公の特徴を詳しくやってなかったので

詳しく紅鷹のことを紹介したいと思います。

ではどぞぞ

## 主人公紹介（改）

～主人公設定～

名前：高峰紅鷹たかみねこうよう

年齢：十五歳

誕生日：二月二十三日（両親が死んでから一度も祝ったことがないため）

（本人が忘れかけている。）

容姿：身長約百六十七センチ位、体重約五十五キロ位、中肉中背で腕には結構

筋肉がついている。

肌は日本人が言うところの「肌色」、髪は純粹な漆黒で耳にかかる位の

ショートヘア。

つやのあるよい髪質だが少しくせつ毛（プラス本人が手入れに気を使ってない）ので

かなりボサ気味で左側頭部にアホ毛あり。

目の色は透き通るような無垢の茶色で意志が強そうな瞳、

美少年とはいえないが少くし野性味が見え隠れしていて、顔は普通よりはかなり

かっこいい部類に入る。（実際中学時代は結構もてていた方）



切れると目つきが僅かに鋭くなる。

性格：普段は普通だがひよんな所で子供っぽさが出る時がある。

また普段は人に対して優しい。しかし実はかなりの熱血漢でたまに人の心を打つセリフを言う。

また「死ぬ」などという言葉を経々しく口にする奴が大嫌いである。

生い立ち：少年期はほとんど不自由無く両親の愛を一身に受けて育ってきたが、

十三歳の時に両親は四人の強盗から自分を庇い父母共に死亡。

その後、親戚の料理屋に引き取られるが経営が苦しくなり両親の家で一人で暮らすことを余儀なくされる。

家族は全員喧嘩取っ組み合い上等な人達で父にいたっては紅鷹に

自己流の喧嘩術を教えるほど、今ではもうすっかり習得している。

両親の死後、自分の無力感を責め、悔やみ、ひたすらに何かを「守る」

ことを目指してきた。そしてある日、路地裏で絡まれていた少女を

庇い、そのときに腹を刺されて死亡、神にその生き様を

認められて

ISの世界に転生、その際に「スーパーコーディネイター」にして

貰っている。ちなみに転生後も年齢、容姿は変わっていない。

ちなみに本人は全く気づいてなかったが両親の死後、心を閉ざしかけ、

その防衛機制として「守る」ことに執着し始めた、というのが真実である。

しかし行動や態度にはほとんど出さない。いつも本当の自分を隠し、親しい人にも実は仮面で接している。

その他の特徴：恋愛ごとに疎く、かなりの鈍感。喧嘩ばかりしてきたので勉強も大嫌い。

やり、  
かなりの大食いで 親戚の料理屋で手伝いをかなり

けの  
その後も一人暮らしだった為に料理の腕はプロ顔負けの  
領域まで達している、得意料理は魚料理。食に関し

ては  
ひたすらにおいしく食べられるようにかなりの情熱を持って  
とりかかっている。

父の自己流喧嘩術をマスターしており、生身の戦闘はかなり得意。

好きで、

自然や生き物をこよなく愛し、サバイバル生活も大

信がある」

自分のことを「無人島についても天寿を全うする自

と言うほどでありその腕はもはや神レベル。

料理が上手くなったのもこれが原因の一つ。

も無理して

生い立ちからも分かるとおり自分辛いことがあって

背負い込んでしまう。

主人公紹介（改）（後書き）

はい・・・どうも思っていたより長くなりました。

でもなんとか書ききれました・・・疲れた・・・orz

どうでしたか？感想どんどんおねがいしますっ。

第2話 〽尋問と入学〽・・・やっとかっ！ (前書き)

ども、作者です。今回は終わりのほうでやっとかっと教室に入ります。ISのチートなバトルシーンにはまだまだですね。

とはいえこっから少しずつ話を進めるのを

早めたいなーとは思ってます。

・・・ほんとですよ？

あ、あと主人公紹介を編集しましたのでそちらもぜひどうぞ。

編集部分は少しだけですが大事なこと(？)が書き加えられております。

・・・余談ですがISのssを調べていたらこのssとそっくりなタイトルのssがあっけなく入りへこみました(。(

では本編をどうぞ

## 第2話 尋問と入学……やっとかっ！

「ふむ、ではお前も一夏と同じくISを操作できるのか。」  
「はい。」

今俺は学園の一室で千冬さんと二人きりの尋問を受けている。

何処から来たのか、どの研究所に所属しているのかなどもうかれこれ三時間が過ぎていく。しかしまさか異世界から転生してきたとは口が裂けても言えない。

結局生返事やあいまいな答えを言ってなんとか誤魔化していたのだが、あまりにもしつこかったので敵意が無いことを主張しつつそこはかとなく脅しをかけてがんばっている内にようやくなんとか信じてくれたらしい。

こんなとき、スーパーコーディネーターの頭は凄く便利だ。なんせ相手を丸め込む言い方が次々に頭に浮かんでくるんだからな。

「いや、ほんとに俺は何処にも属してませんし何もする気はありま

せんからね？

だいたいISを起動させたのはさっきが初めてですからね。」

ちなみに意外かもしれないが俺は目上の人にはきちん敬語を使う。幼少期から家族全員に叩き込まれた。一人っ子だったし。

「怪しすぎるがまあよかつ。・・・お前からは何の敵対感情も感じない

からな。」・・・すごいなこの人、読心術でも使えるんだろうか。でも読心術って便利だよな〜いいな〜・・・

「何だその目は」「イエ別二・・・」「よし、この人の前では何も考えないようにしよう、よしそうしよう。

「さて、これからの事だがお前はここIS学園に強制入学と監視だ。」  
「本望です

「分かった。でも監視つつても四六時中付きまとわれるんじゃないんでしょ？」「  
ストーリーじゃあるまいしな。

「その心配はないさ、あくまで入学させて教師の下にいるだけだ。」

ならいいや。

「ところでおまえのISはどんな型なんだ？」千冬さんが聞いてくる。その顔に

少し、ほんの少し好奇の色が浮かんでいる。

「俺にもわかりません。」なんせ展開したの超短時間だったしね。

「……そのうち見せてもらうぞ。」あ、少し残念そうな顔になった。

「分かりました。でも二つ聞いてほしい願いがあります。」「なんだ？」

「ここで俺を監視すると言つのなら俺のことは学園の外には絶対に漏らさないで

下さい。絶対ですよ？後はこの学園にはもう一人男子がいると聞きました。

そいつと同じクラスに入れてください。男友達がいなくときついです……。」

「……後者の願いは造作も無いことだが前者は無理だ。」なんでよ？



「ハア・・・これを見る・・・。千冬さんが呆れながらテレビの電源を入れた。」

「なんじゃこりゃ!？」　もつどの局を見ても画面には

「世界でISを操れる男性、二人目現る!？」そんなニュースが流れている。

「たぶん学園から政府に報告したとき情報が漏れたのだろう・・・この速さは恐ろしいな。」まったくであります・・・。

余談だがこの時すでに俺のことはもう全世界に流れ、知れ渡っていた。  
情報化社会ってこわいね・・・。

「政府もかなり混乱していた様子だったぞ。何せいきなりのことだからな。」

『高峰紅鷹は非常にイレギュラーな存在でほぼ全てが謎のため学園で保護し、  
他国の干渉を一切拒否するように。』とのことだ。」

それは要するに『あいつ珍しいから逃がすな、他に渡ったらめんどいから。』

ってことだ。 むむ・・・自分で言ってる嫌になってきた。

しかし結局尋問はそのくらいで終わることとなった。 まあ貴重な一例だから

学園に置いておきたい、と言つのもあるんだろう。 ビバ 都合主義

こうして俺は何やかんやありながらも無事(?) IS学園入学を果たすのだった。

しばらくは一巻の内容だから分かるけどその後もまた楽しみ・・・

～教室にて～

うん・・・確かにこれは辛いものがあるな・・・

尋問が終わったのがもう十時ごろだったので俺は途中から授業に入ることになった。

(敷地に落下したのが朝七時ぐらいだ。)

ほとんど転校生のようなものである。 だが！俺には人前で緊張しないと言つ

長所があるっ！！（例外あり）

「さて皆さんっ！今日は入学初日にしてビッグニュースです！！」  
中から山田真耶やまだまや先生の声が聞こえる。実際にあってみると  
なるほど年よりかなり若く、もとい幼く見えた、アレは本当に先生  
なのか？？

「もう知っているかもしれませんが、この学園にISを操れる男の  
子が  
もう一人やってきましたあゝ！！」

「ワアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

ちよっ！！なに！？爆発のような歓声が聞こえるぞ！？

「織村先生の話によるとその男の子は突然ISと一緒に空から落ち  
てきたそうです」

・・・事実なので反論の余地がない・・・

「しかも！！かなりのイケ面さんでえゝすう！！！！」

「きゃアアアアあああああああああゝあゝあゝ」

すげーよ！！もはや最後のほうデスポイス混じってたぞ！？こわいわ！！

つゝか先生のせいでハードル急上昇だよ！？

「・・・はい、ではどうぞ」

するとあらふしぎ、水を打ったように教室内が完全に静まり返った。

・・・これは完全に「例外」だぞ・・・どーする・・・

心臓はさっきの余裕はどこへやら、早鐘どころか目覚まし時計のベル状態だ。

しかし俺も男だッ！！ 意を決して教室のドアを開け、まっすぐ前を向いて

教室内に入った。・・・シン・・・ん？・・・一瞬の刹那が過ぎ、

そして・・・

・・・ハッ！！！！頭の中でピキーンと何か音が鳴り、身の危険を感じた俺は  
とっさに耳をふさぐ。この間わずか0・5秒、またしてもスーパー  
コーデイネーター  
であるわが身に感謝感激雨あられ、ひょう雹。

その後はよく聞き取れなかった。ただ爆発のようだったことは覚えている。

そして手を耳から離すと「ちよつと野性つぱくてかつこいい〜。」  
「イケ面だあ〜」などと次々に騒ぐ声が聞こえる。お褒めいただき  
光栄です・・・

そんなこんなで入学はしたもののしばらくはストレスがたまりつぱ  
なしの生活に  
なりそうだった・・・

まあ面白そうだからいいや。俺面白いこと好きだし。

いい人生になりそうだ・・・そう、少なくとも、

ここ最近の生活よりは・・・。



第2話　～尋問と入学～・・・やっとかっ！　（後書き）

はい、まだ教室に入ったばかりです・・・

読んでいただいている皆様方はもうお気づきかと思いますが  
この小説の話の速度は多少変わりこそすれ、だいたいこの  
スロ～ペ～スです。（笑）まあ途中で多少大雑把にいくかもしれま  
せんが

初投稿で下手なのでせめて丁寧にやっときたいのです。

さて最後になんとか主人公がシリアスなセリフを言っています。  
まあこの言葉の意味が明らかになるのはかなりあとになるやも  
しれませんが・・・ヒントは「心を閉ざしかけた原因」です。

ではまた～

第3話へ始まった日常とめんどくさい人出沒・・・(前書き)

ども。今回かなり長引きました。

やっとセシリアさんにようやく決闘を申し込まれます・・・

ではござい。



第3話〜始まった日常とめんどくさい人出沒・・・

「ええ〜つと、高峰紅鷹です。好きなのは生き物全般で特技は料理と喧嘩、

嫌いなのは勉強と簡単に死ねとか殺すとか言う奴です。これからよろしく

お願いします。」・・・はあ・・・何とか言えたぞ、おっしゃ。

言い忘れていたが制服は一夏と同じのを大至急用意して貰った。

しかし女子というのは何でこんなに騒がしいんだろう・・・

今も「動物好きの特技は料理だつて〜カワイイ〜」とか

「ねえ織村君とどっちがかっこいいと思う〜えつとねわたしはあ〜」などと

とにかくうるさい・・・まあ例外もいるようだが・・・ああ、あの不機嫌そうな女子が  
筈さんですか。

で・・・ああ、あそこのあいつが一夏か・・・はあ〜やっぱ一人じゃないって  
いいなあ。

お、あっちも安心してやがる。ふう、いい友達ができそうだ。

前世では友達はいたにはいたんだが俺にびびっている奴が  
暴走族とかのろくでもない奴らばかりだった。

とーぜん力を振りかざすようなやつらには反吐が出るのでしつこい  
奴らは  
逆にボコしてやった。

「あ、そろそろ高峰君も席に着いてくださーい。」 「あ、はい。」

俺の席はなぜか一夏の隣だった。千冬さんあざッス！！

「よろしく、紅鷹って呼んでくれ。」 「ああ、俺のことは一夏っ  
て呼んでくれ」

「おう！」 やった これでもう怖くない。

「えっと、じゃあ高峰君の教科書も渡しておきますね。」 そういって  
山田先生が俺の机の上に電話帳×7をよろけながらもなんとか置い  
た。

「・・・なんじゃこりやつ!!」先生!これは電話帳じゃないんですか!?

くすくすと笑い声が聞こえる・・・よし!勉強は操縦関係以外捨てる!!

お前今スーパーコーディネーターだろーが!と言う声が聞こえてきそうだが

俺は基本興味がわいたことしかやらないんだ

楽しく生きるのが一番なんだなあ。 By たかを。

「あはは・・・一応それが参考書と教科書になります。」  
えええ〜。あと「なります」って言い方おかしいよね。教科書に成るんなら今はなんなんだろう?

「はあ・・・まいつか・・・勉強なんてどっちみちちゃんね〜しな!」

こっそりと呟く。「ビュッ、グキッ!」  
「ごぶっ!!」「何を言ってる馬鹿者。」

俺の側頭部に出席簿がクリーンヒットする。なんつー威力だよ……  
つてか今「グキツ」つつつたぞ！どっかが逝つてないといいんだが・  
・

そして授業は俺の意識の外で着々と進んでいた。話は全く聞いてな  
かったが

ISの操縦系統らへんについてはスーパーコーディネーターの能力  
で完全に暗記した。

なんだか「情報」が直接頭に染み渡ってくるみたいですごく効率が  
いい。

「さてここままで質問はありませんかあ？織村君も高峰君もしつか  
り質問してください。」

「えっと……じゃあ……はい」一夏が手をあげる。「なんでしょ  
う？」

どこか誇らしげな山田先生。

「ほとんど全部分かりません。」……やっぱな……

女子たちがずっこけるのが音で分かった。「ぜ、全部ですか・・・」  
山田先生も心なしかめがねがずり落ちて見える。・・・よし！俺も正直に言っとこう！

「はい」「な、なんですか高峰君？」

「ほとんどじゃなく完全に分かりません。」

「ズコーン」、と効果音まで聞こえてきそうだった。これにはさすがの千冬さんも

呆れているな。山田先生にいたっては完全にフリーズしている。

一夏が驚いたようにこっちを見てきたのでこっちも最高の笑顔返してやる。

「ニカツ」withグーサイン・・・ハッ！同じところをねらって何か飛んでくる。

「フッ！ー！」とつさに振り向き、その物体の端っこをくわえて受け止める。

一夏を含め全員が「おお〜」と言った声を漏らす。へっ！どうだ！ハンカチでくわえた部分をふいて返すと意外そうな顔をして受け取ってくれた。喧嘩で鍛えた（とスーパーコーディネーター）の反射神経は並ではないのだ、ふふん。

〜授業終了後〜

「紅鷹」食堂行こーぜ」「おう。ちょっと待ってくれ。」「一夏は箒と二人で話した後、食堂に行こうと誘ってくれた。・・・いいやつだなあ。・・・もう俺たち二人はすっかり打ち解けていた。箒にも自己紹介しておこう。

「よろしく。紅鷹って呼んでくれ。」「ああ、よろしく頼む。」「

周りの女子の箒を見つめる羨望の眼差しにはもう鬼気迫るものがあった・・・。

俺たちは談笑しながら食堂に入り、三人でモーゼの海割りを体験した。・・・不覚にも俺はちよつと感動してしまった・・・

今は一夏と俺、筈で飯を食っている最中なのだが、大量の女子の視線が痛い……

「しばらくストレスが溜まりそうだな……」ああ……」「……」

「それにしても千冬姉の一撃を受け止めるとはすごいな。」

「たしかにあれば常人にできる反応速度ではないぞ。紅鷹は何か武道でも

やっていたのか？」 「特技は喧嘩って言ったろ？うちの家族はみんな……母さんまでも

喧嘩上等主義だよ……とくに父さんにいたっては俺に自己流の喧嘩術を俺に

叩き込む位だからな……」「……」「そ、それはすごいな……」「……」

「だろ？……」

見れば周りの女子が若干引いている……

（まあ俺がスーパーコーディネーターだからってのも大きいんだけどな。）

そう思いつつ蕎麦をすする俺のテーブルには既にざる蕎麦のざるが四つ積んである。

「お前・・・よく食うな・・・」一夏が呆れた目で俺を見てくる。

「俺は燃費悪いんだよ。運動はするしな。」

ちなみに学費、その他のお金は政府から下りるそつだ。国民の血税で蕎麦を  
すするつてのもなかなか複雑な心境だ・・・

俺達の周りにはまだ女子がたかっていたが「なにをやっているか。もう午後の授業が

始まる。さつさと教室に戻れ。」あ、千冬さんだ。

「やはりお前らか・・・高峰・・・それは食いすぎだろう。」  
「ですよね」テへ

「まあいい。さつさと教室に戻れ。」「わかりました。」  
「分かったよ千冬ね・・・」『バツツ!!』織村先生と呼べ。「はい・・・」

千冬さんが出て行った後、俺達は急いで教室に向かった・・・

午後の小休憩

「「いや、実に分からなかった!」」はい。それはもうすがすがしいほどに



「一夏は相変わらず馬鹿だな。」 篤さん言いますね……」  
失礼な……」

「わ、分からないのなら私が放課後教えてやるつか？ / / /  
お？ 篤にアタックチャ〜ンス！！」

「おおサンキューー！ 紅鷹も一緒に教えてもらおうぜ」 おいほんと  
に馬鹿だなお前は……」

「わりい俺ちよつと放課後はアリーナでIS動かしてみるわ。」

「えっ！！！！お前って専用機持ちだったのか！？」「ほづ。」「ま  
あな。」

「「「「じゃ、じゃあ私が教えてあげよつか！！？」「「「うわあ  
！！！」

「いや遠慮しとく、自分でどこまでやれるか試してみたい。」

「「「「そう……」「」「」 明らかにがっかりすんなよ。」

あ、そういえば。「箒!」と俺は箒を呼んで「なんだ?」とよつてくる箒に  
ささやいた。(頑張れよ)一夏にいいとこ見せてしつかり魅せとか  
ない?)

「なっ／＼なにをいう!私は別に・・・／＼／＼」

「バレバレなんだよ・・・ま、俺は応援するから頑張れや。」

「だ、だからわたしは~~~~~!!!／＼／＼」・・・観念しろ。

「

「す・・・すまない・・・／＼／＼」WWWいってことよ  
WWW  
おもしれーな?。

箒が顔を真っ赤にしていた時、

「ちよつと、よろしくて?」

うわでたよ。・・・名前は、えつと・・・一巻読んだの昔過ぎて覚えてない・・・

そこに立っていたのは金髪で透き通ったブルーの瞳の・・・誰だっけ？

「だれだ？・・・」一夏が言うので俺は教えてあげることにした。

「一夏、そんなことも知らないのかこの人は・・・かの有名な・・・」

「ふふん、少しは私のことを知っている男性もいるようですわね。」

胸を張る・・・だれだっけ・・・

「（株）・・・+0さんに決まってるだろ。」

「ブフツッ!!」と一夏と篝を含めたクラス全員が、吹いた。

「セシリア!!イギリスの代表候補生セシリア・オルコットですわ!!」

・・・ああ!思い出したよ!そういうえばそんな名前だったよ!!!!でも面白いのでちょっとからかってみよう。

「代表候補生って何?」「わあ・・・みごとにハモった。

「あ、貴方！代表候補生も知らないんですの！？・・・まあいいでしょう。」

このわたくしが直々に伝授して差し上げますわ、感謝なさい！」  
頭に血管マークを浮かべながらもどこか得意げに

「で？代表候補生って？」一夏が尋ねている。俺は知ってるけどね。

「国家代表IS操縦者の、その候補生として『選出されるエリートのことですわ』」

・・・うぐぐぐぐぐぐ！！！」途中から俺が裏声を被せたせいでセシリアの血管マークが  
絶賛増殖中だ。

「お、お前知ってたのか！？」「そんなぐらいは知つとるわ。」

「あ！貴方はわたくしを馬鹿にしていますの！？」「うるさい耳に響くだろーが。」

「ちよつとからかったただけだ。」「ぐぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ！！」いかに  
も悔しそつだ。

「へー、エリートなのか。」「と言つ一夏の言葉で立ち直つたセシリアは

また得意げに言ってくる。

「そ、そうですね！わたくしは優秀なのですからあなた方のような人間にも優しくして

さしあげますわよ？感謝なさい？」これのどこに優しさがあるんだ。

「ISのことで分からない事があればまあ・・・泣いて頼まれれば教えてやらんこともなくつてよ。なんせわたくし、入試で唯一教官を倒した

エリート中のエリートですから。」

「あれ？教官なら俺も倒したぞ？」一夏が言う。「は・・・・・・・・・・？」

セシリアはショックで目を見開いてフリーズしている。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」「女子では、だろ。」俺が言い放つ。

ピシッ・・・・・・・・

あ・・・・・・・・やな音・・・・・・・・

「っ、つまりわたくしだけではないと？」「そーなんじゃない？」

また俺が言う。

「えーと、落ち着けよ……」

「こ、これが落ち着いていられ……」 『キーンコーンカーンコーン』

いい所でチャイムが鳴る。ほ、やっと終わったか。

「ま……また来ますわ!!逃げないことね!よくって!?!」

セシリアは捨て台詞を残して席に戻っていった。

「……一夏とはいいいコンビになれそうだよ……」「ああ……」

お互いに顔を合わせて苦笑いする。いやあ……いい友達ができたよ

今回の授業は千冬さんが教壇に立っている。

「それでは今回は実践で使用する各種装備の特性について説明する。

・・・

ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

思い出したように千冬さんが言った。

ああそうか。それがあつたな・・・

一夏は不思議そうな表情をしている。そのままの意味だよ・・・

「はいっ、織村君を推薦します。」「私は高峰君がいいと思います。」

「織村君がいいと・・・」「高峰君・・・」「織村・・・」「高峰・・・」

「・・・」

うわこれ決まらんぞ・・・「黙れ。」「おお、さすが千冬さん、いや

織村先生とここ

からは呼ぼう。

「まあ私が推薦するとしたら高峰だな」・・・「なにゆえ!？」「なにゆえ!？」

「簡単なことだ。織村はもうどの程度の実力なのか分かっているが

高峰は

実力が完全な未知数だから見てみたいというのが理由だ」

「そういうことですか。」なるほどねえ・・・俺もそれは知りたいけど、

「な、納得がいきませんわ!!」

ほらでたよ・・・

「そのような選出は認められませんわ!! 実力から言ってわたくしがクラス代表になるのは必然です!! だいたいわたくしがこのような島国にまで来たのは  
ISの修練のためであってサーカスのために来たのでは毛頭ありませんわ!」

(カチン・・・) あ、これは一夏切れたな。

「全く、どこまであなた方は礼儀知らずなのですか!  
親の顔が見てみたいですよ!」

カチン・・・

「イギリスだって対してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何



年覇者だよ。」

「人の親を馬鹿にするんじゃないやねえ！お前の親の顔が見てみたいわ！」

「あ、あ、貴方たち！どこまで馬鹿にすれば気がすむんですの！？」

・・・決闘ですわ！！」

「おう、いいぜ。」 「上等だ。」

「ふふ。ちょうどいいですね。イギリス代表候補生の实力を見せ付けるいい機会ですわね」

「俺と一夏はハンデもつけてやろう。おれらは初期設定の機体でやってやんよ。」

クラスが驚愕と爆笑で満たされた。

「おい！俺もかよ！『どーせ一次移行はまにあわねーよ。』 た、確かに・・・」

「なっ！・・・吠え面かいても知りませんわよ！！」

「高峰君それ本気で言ってるの？男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

それは代表候補生を舐めすぎだよ」

「だからって媚びる必要がどこにあるんだ。とうにもならないときでも俺は

絶対に何とかしてみせる。」

そう、俺はずっとそうやって生きてきたのだから・・・

「さて話はいったな。勝負は一週間後の月曜。三人はしっかり鍛えておくように。」

「りょくかいです。」「はい・・・」

こうして俺達はめんどくさいセシリアさんと決闘することになった。一夏は面倒くさがっていたが俺は・・・

「やっべ・・・チョク楽しみ」

こんな感じだった・・・。

第3話〜始まった日常とめんどくさい人出沒・・・（後書き）

結構だらだらと書いてしまいました・・・orz

次はようやく主人公の機体が明らかに！（たぶん初期設定だけど・  
・）

ここからはトランザムなどよりガンダムのパクリ装備が出ますので

嫌な方はお引き取りください・・・

しっかり説明は書きますので・・・

どうしてもやってみたかつたんです！！

あ、それとまだ正直文の書き方でかなり迷っています。

なので視点や書き方がころころ変わってしまう  
かもしれませんが、ご了承ください・・・  
でわまた〜。

#### 第4話〜IS起動！……やっべー！バレルー！〜（前書き）

ども、

原作がだんだん壊れ始めました……時間軸などは完全に粉 砕してます。……箒は紅鷹に対してはフレンドリーです。

あ、紅鷹に箒フラグは立ちません。あくまで友達です。紅鷹の心を解きほぐす女性はもう決めてあります！お楽しみに！

長くなりました。では本文をどうぞ。

#### 第4話〜IS起動！！！・・・やっべー！バレルー！〜

〜放課後〜

「鍛え・・・放課後・・・稽古つけ・・・！！」「遠くで箸の声と戸惑ったような

一夏の声が聞こえる。「なぜに稽古？」そんなことを呟きつつ俺は第三アリーナを目指す。

「とりあえず期待のデータ収集をさせろ」と言う千ふ・・・もとい織村先生に期待のスペック

を見せることを条件にアリーナの使用許可を貰った。まあデータはいつか見せないといけなからいいけど。

「そういえばこの世界の原作ブレイクはOKなんだろうーか。」「ここですぐで今更的な疑問が頭をよぎる。まあ神様も「自由に生きろ」的な発言してたからいいんだろ。

「というか神様は今も俺のことを見て（撮って）いるんだろうか。おこわ・・・」

そうこうしてるうちにアリーナに着く。手早くISスーツに着替える。「よし。」と顔を一回たたいて気を引き締める。すると・・・

「きゃああああああああ！」ぬを！！ 観客席は半数以上が目を輝かせた女子たちで埋まっていた。・・・さて落ち着こう。状況を確認しよう。

ひたすらただっ広いグラウンドの中央に俺一人たっている。

客席には大量の女子。

割れるような歓声が響いている。

(うわあああ！！なんじゃこの状況はあああ！！！)

しばし呆然としていた俺に管制塔から織村先生からアナウンス。

「ほらさっさとISを展開しろ。」この状況で！？・・・ええい！  
ままよー！

(おれのIS、来おい！！) 強く念じる。すると俺の周りが光り、

約二秒後には俺の体はISにつつまれていた。はあ、なんか結構気持ちいい・・・

「わあ！なにあのIS！！あんなの見たことない！！」

俺のISは（今は）もうすべての箇所が「鉄色」としか言いようのない灰色だった。

・・・まあまだ初期設定の機体だからな。きっとファースト・シフト一次移行後は  
すげーかっこいい機体になるんだかねー！！

さて形状は・・・うわ・・・まだいたるところがくがくした形だ。

全体的には「seed」の「セイバーガンダム」のようなシルエットだが俺の予想と違って

フル・スキン全身装甲タイプではなく、手足と背中と胸周りとそのまま背中に装甲があり、装甲はセイバーガンダムそっくり。俺がこのガンダムが大好きだったことを

神様は知ってたんだろつか。ただ大きく違う所は変形がなく（あっても怖いけど）

右手には流線型で両端が尖っていて、さらには盾全体がまるで鏡のように、「いやこれは鏡だ」な盾を装備している。でもこのシルエットはものっそい気に入った。

ちなみに左右の腰にはビームサーベル的な物の柄、腰の後ろには小ぶりの

ビームライフル的な銃が装備されている。

動力ブースターは・・・おお、背中に一機。先のとがったふじつぽいや、なんだったか・・・GNドライブだったか・・・にそっくり



というかそれだ。自分でもパクリ要素満載だな・・・と苦笑いしつつ  
「さて、翼は・・・!?」

翼はどんな形が見ようとして俺は固まってしまった。

翼が・・・「なかった」

うわあマジか。「まあ十分かつこいいけど。」といい、満足して  
いた。

ちなみに、IS展開時に兵装やその他のスペックは全て頭の中に「  
入っていた」。

「名前は『明けの彗星』<sup>デブヤーミリオン・コメント</sup>か・・・某大佐みたいだ・・・ふんふん、う  
ん？GNドライブの見た目のくせに出力はそうでもないな（汗）・・・  
兵装は・・・『汎用型ビームガン』、『ビームソード・バジユラ』、  
だけか・・・  
呼び出し（コール）しきのは無いんだな（涙）・・・お、この盾堅い  
なこの強度なら  
ミサイルでも傷はつかないだろうな。」

あとついでに（ビームソードとかビームガンと違ってなんか言い方  
違うだろー!）

そう、ここが唯一の不満だった。・・・そうこうしていると管制塔が騒がしくなってきた。どうしたんだろつか・・・？まいいや 試運転してみよ。

く千冬（管制塔）サイトく

「こ、これは！？」山田先生の驚きに満ちた声が響く。私自身驚きを隠せない。それもそうだ。  
高峰のISには全く見覚えが無かったし、メインの大画面にはこんな状態だったからだ。

「名称『明けの彗星』  
ユーザーミリオン・コメント

操縦者、『高峰紅鷹』

世代『認識できません』 出力『認識できません』

兵装『認識できません』

どういうことだ！？私だけでなく誰もが開いた口がふさがらない状況だ。

スペックはおろか、どこで生産されたのか、や世代すらも分からないい。

このメインコンピュータにはこの世界のISの情報が全機ぶんある

のに、だ。

とすればいえることは一つだけ。

「篠ノ之博士の設計に基づいた機体ではない……と言ったことですか？」

「おそらくそうだ。」そして468機めのIS……

「政府に報告し、『絶対にするな!!』分かりました！」そうなのだ。政府から

他国にこの情報が流れればあっという間にこの学園の外国人生徒の半数はスパイになるだろう。

「ここにいる者たちに緘口令をしく絶対に誰にも話すな!!」「はい!!」「

外では高峰が射撃訓練をしている。あのISはおそらく初期状態だがあのスピードなら専用機とも互角に渡り合えるだろう。そしてなにより……

「た、高峰君の能力も尋常ではないですね……」山田先生が呟く。

そう。高峰の射撃能力が半端ではない。勉強をしないのはこっち方面に  
頭脳を完全に偏らせているからだろうか。

今度は高峰が盾を投擲、その盾にビームを当て・・・

「わあ！！高峰君、今度は盾に反射させて的の中心を射抜きました  
！！！」

これは私でも到底真似できない。「化け物か・・・あいつは・・・」  
誰かが呟く。

(ふむ、高峰が話す気になったら根掘り葉掘り聞くことになりそう  
だ。)  
あいつは尋問でも具体的なことに関して絶対に口を割らんかったか  
らな。

「はあ・・・」溜息が出る。これから面倒なことになるぞ・・・

（紅鷹サイド）

「うん。いい動きをするな、予想以上だ。」動いてみると結構機動  
性が高く、  
よく動く。それに・・・バーミリオンから確かな鼓動を感じる。

ちなみにGNドライブはなぜか粒子を出さなかった。  
(ったく、これじゃ普通の動力装置だぞ・・・)

「これからよろしくな、バーミリオン。」思わず口に出す。気体が  
呼応したのが

分かった。そこからは一気に動きやすくなった。まるで「一人と一  
機」じゃなくて

「二人」で動いている感じだ。初期設定とはいえ、これだけ動けれ  
ば上出来だ。

にしても・・・

「俺自身の性能も凄いな・・・」そう、すごいのだ。

かなりの距離を置いて射撃訓練の的が現れる。スーパーコーディネ  
ーターの体と頭は

瞬時に認知、反応を行う。銃から緑の閃光が閃いたときにはもう的  
の中心を

打ち抜いている。二回、三回と同じ事を繰り返し、飽きたので最後  
の的の

右下に盾を投擲、その盾を撃ち抜く！盾はビームを反射し、見事に  
また的の中心に吸い込まれた。訓練が終わり、満点のスコアボード  
が出てくる。

「ふう、上出来上出来。」バーミリオンもなにやら嬉しそうにして  
る・・・気がする。

俺のことは見に来た女子たちが見れば完全に固まっている。その中の二人が一夏と箒

だと気づき、声をかけてみるが呆然としているのかフリーズしたまままだ。

「もう帰ろう、バーミリオン。」バーミリオンを腕輪に戻し、着替えて

アリーナの外に出る。すると・・・

「ドカアアアン！！」「てゆわ！！」 つい変な声が出た。爆発かと思いきや

今更な女子たちの歓声だった。・・・うるせ・・・

アリーナを出ると一夏と箒が追いかけてきた。「おい」手を振る。

二人は俺に追いつき、せえせえ息をしながら開口一番

「お前は何者なんだ！！」「」と言ってきた。うん、見事なハモリだ。

「紅鷹と申しますが・・・」「そーじゃねえよ！！（ない！！）」「」

「さっきのはなんなんだよ、すごすぎるだろ!!」「まったくだ！お前はどこから降ってきたんだ!」「うっ・・・篝が地味に痛いところを突いてくる。」

「わりい、俺とこのバーミリオンはちょっとばかり訳ありなんだ。」

「「訳?」「・・・お前ら仲いいな・・・」「すまん。これ以上は言えん。本当だつ!」

「追求しないでほしい!」「分かった。お前にもいろいろあるんだな。でもほんとに」

「お前の射撃はすごかったぞ。」「ありがとさん、俺は勉強の分の頭もこつちに回してんだよ。」「ハハ・・・と三人で談笑していると「高峰、ちょっと来い。」

「・・・わお・・・」「はい。」「なんだろ・・・」

「突然だがお前のISは篠ノ之 束の理論に基づいてない機体だな。」「はい。」

素直に答えると織村先生はちょっと驚きつつ、「お前とその『バーミリオン』は」

「どこから来た?」と聞いてきた。「すみません。答えられません。」

「答える。」「いや・・・『答える』・・・」「はあ・・・」

「簡単に言つと俺達は『別の世界から来た。』んです。」「なに？」

「今言つたとおりです、もう言いません。」「待て、それはどうい  
う……」

「先生が今思っていることで大体あつてると思います。後このこと  
は誰にも

言わないでくださいね？言つ時は俺が信賴の置ける人に言いますか  
ら。」

「……わ、分かつた……」ほっ、何とか分かつてくれた。

転生のことちよつと喋つたけどまあいいや……先生なら誰にも喋  
らねーだろしな。

しかし……俺はこの時、「べ、別の世界から来た？……」

二人にこの話をこつそり聞かれていたことに全く気づかなかつた……

「もうそろそろあの高飛車女と対戦……実戦はやつたことねえか  
ら楽しみ

頼むぞバーミリオン。』……』」声にはならないがバーミリオン  
の聲が

「分かる」。ふふっ、結構コイツとも打ち解けられたな。よかつた  
よかつた





**第4話〜IS起動！……やっべー！バレルー！〜（後書き）**

どうでした？転生の件はここから一部の人達にバレていきます。

しかし紅鷹の生い立ちと心の底はまだまだ出てこないと思います。

次はおそらくVSセシリアさんとその他にもろもろだと思います。

ではまた〜

第5話〜一次移行（どチート）と「護る」二人〜（前書き）

ども、佐久紗ツス。

やっとセシリアさんとの決着と一時移行です。

ほとんどガンダムからなので知らない人にはイメージしにくいと思います。申し訳ない・・・

ではござ。

第5話 一次移行（どチート）と「護る」二人

～一週間後～

「うん・・・よし！今日もいい朝だ！」

さて、あのめんどくさい人とバトルのは・・・あ・・・今日だ

さて、今日も頑張りますっ！俺は急いで食堂に向かう。あ、一夏と  
筈だ。

ん？なにやら真剣に話し込んでるな・・・雰囲気重いぞ？・・・

「おはよう。」「」「うわっ！」「・・・なんでそんなに驚いてるん  
だ？」

「お、おはよう。」「ん？なんかぎこちないな・・・」「どうしたん  
だよ？」

「「なんでもないっ！」「・・・そうか・・・」「そ、それよりセシ  
リアとの対決

は今日だよな。」「そうだな、そっちのできはどうだ？」

「それがまだ届いてねーんだよ・・・」じゃあお前ら何してたんだよ・・・

「ふふん、一夏は剣の腕がだいぶ鈍っていたからな。私がみっちり稽古を付けてやったのだ。」嬉しそうにはなす箒。俺はそんな箒に対して素直に思ったことを言ってみる。

「よかったな。一夏と二人きりで過ごせ」「い、言っなー!」「あがああああ!」

俺のセリフを聞き終える前に箒が俺の顔面にアイアンクローをかましていた。

「いだだだだ!!!ちょ、もう勘弁して!!もう言わないから!!」「ふん!!」少し顔を赤らめる箒。まったく。一夏も少しは気づいてやれよ・・・

「嬉しかったか?」

「そんなわけ無いだろう!」「じゃあ嫌だったのか?」なっ!そ、そういうわけでも・・・」

「ん、お前ら何の話してんだよ」「一夏が言う。「察してやれよ!」!」「思わず突っ込んでしまっ。隣で箒が小さくうなずいた。「何を?」。「もういい・・・」

コイツには何を言っても聞かないことが分かった。「はあ・・・」  
二人してため息を吐く。「箒も大変だな・・・頑張れ・・・」  
「紅鷹・  
・ありがとう・・・」

「ところでさつきは何の話をしてたんだよ？」「えっと、それ  
は・・・その・・・」  
ん・・・箒まで言いよどむとは、ほんとに何だったんだ？「なんで  
もない、  
ほんとになんでもないんだ！」「そうかい・・・」  
「ちょっと悲しく  
なっちゃったよ・・・」

さつて・・・「そろそろいこーぜ。授業始まつちまつぞ？」「あ、  
ああ・・・」  
なんだよ二人して・・・

こうして俺達は奇妙な違和感を残し、食堂を後にした。

教室に着き、ドアを開ける。すると・・・

「ねえ高峰君！！昨日のあれなに！！凄すぎだよ！！」  
・・・あ・・・

「あれなんてIS？見たこと無かったよ」「ん、名前は短くして  
『バーミリオン』」

って呼んでる。「きゃ〜カッ」  
「ど、どうも・・・」

一瞬で女子に囲まれた。もういちいち説明するのがめんどくさ過ぎる。

「キーンコーン……」お、チャイムが鳴った。よかった。

急いで席に着くと、ちょうど織村先生が入ってくる所だった。

「全員席に着け。SHRを始める。……以上で今日のSHRを終わる。」

ああ、今日はクラス代表を決めるのだったな。三人はしっかり鍛えておいたのか？

「ああ。」「もちろんですわ！！まあ代表候補生の私にかかればそこのお二人などひとひねりですわ！！」セシリアが声を張り上げる。

「おいセシリア……紅鷹はマジで強いぞ。怒らすのもほどほどにとけ」

一夏がセシリアに忠告している。グッジョブだ一夏。

見ればクラスのほとんどがうなずいている。でもなんだか正直照れる。

「いや、過大評価だって・・・」とりあえず言っておく。恥ずかしいしな・・・

「そうでしょうとも！過大評価もいいところですわ！」なんかセシリアさんが言ってます。

「お、お前・・・紅葉の練習見てないのか？・・・」「なぜ私がわざわざ時間を割いてまで見に行かなければならないのです！ふん、どっちにしろ、私の勝ちは揺るぎませんもの。」

はあ・・・まいいや。決着は今日だしな。言わせておこう。さうで、授業が始まりますっ・・・「あれ・・・今更ながら些細な疑問が・・・」

「織村先生！」「なんだ？」とりあえず聞いてみる。

「セシリアはこのルールだと二連で戦うことになるんですよね。これはまずいんじゃない？」

「ふむ・・・ではこうしよう。最初にセシリアと二人のうちの一人が戦い、

勝ったほうが残った方と戦うと言うふうにする。」「わかりました。

」



なんかセシリアがわめいていたがこの際意識の外に追いやっておく。

「キーンコーン・・・」お、授業が始まるな・・・つつつても俺は操縦系統以外  
やらないけど

こうして初の模擬戦を楽しみしながら俺は授業を聞き流した（笑）

～放課後、アリーナにて～

「お、織村君！織村君の専用機が届きました！」山田先生の声が響く。

「どっちからいく？」俺が尋ねる。「紅鷹から行けよ。」「分かった。」  
「頑張れよ。」「そうだ、負けるんじゃないぞ。」「おう、ありがとうな。」

俺達は三人で拳をぶつけ合い、俺はそこからアリーナに出る。

そしてISを起動させる。「頼むぜ、バーミリオン。」「……………  
（おう、いくぜ！…）」

俺とバーミリオンはもうほとんど一心同体だった。初期化も終わっているだろうし、

ファースト・シフト  
一次移行も、もうすぐできるだろう。

俺はゲートから飛び立った。そして俺はそのまま飛び上がり、指定の位置に向かう。

「なっ！翼の無いISですって!?!」セシリアがなんか驚いている。

「最後のチャンスをあげますわ。今すぐ謝れば許してあげないことも無くつてよ。」

「お前がな。後悔すんな!」

「ではここで、お別れですわね!」

「警告！敵IS射撃体勢に移行、トリガー装填、・・・  
『分かってるって、いくぞバーミリオン!』・・・(了解。)  
「あれ？今確かに  
意思の疎通ができたぞ?つとお!」

飛んできたビームをバツク転の要領で難なく交わす。「なっ！かわしたですって!?!」

セシリアが驚いている。「おいおい、こんなことで驚いてんのかあ?」

「っ！まだまだですわ!」連続して撃ってくるが俺はそれらを難なくよける。

(銃口を見れば一発でよけられるってーの!!)「さて、そろそろ反撃といきますか!」

向かってくるビームを全て避け、距離を詰めつつビームガンを連射する。

その針の穴を通すような射撃はゆっくりと、しかし着実にセシリアのシールドエネルギー残量を抉り取っていく。

「くっ!でしたら!」そういつてセシリアは「ブルー・ティアーズ」のビットを俺の周りに展開してくるが、「はっ!スーパーコーディネーターなめんな!」

一気にバーニアをふかし、ビットに近づくと、腰の「バジユラ」を

二本とも

一気に抜き、「ふっ！」と舞うように、・・・例えるなら

「seed destiny」の「ストライクフリーダム」のように回転しながらそのビットを切り刻む。

「なんですって!!」「おーおー、だいぶびびってるな？」

観客席から感嘆の声や騒ぐ声が聞こえるがもう俺はそれらを意識の外に追い出している。

「よし！一気に決めるぞ！」決して特別速くは無いがそれでも次々とビットを

切り刻み、セシリアに肉薄するが・・・「かかりましたわね!」「なに!？」

そうだった!・・・忘れていた!こいつには「ミサイル兵器」もあつたんだつた!!

急いで距離をとるが放たれたミサイルは一気に距離を詰めてくる。

「くっそお!!バーミリオン!!答えてくれ!!!」「そう叫ぶ。すると機体が光を放ち、

俺ごと「粒子化」した。

「は？・・・」セシリアや一夏達を含めた全員が困惑した。

俺のいた所にはただ翠の粒子が浮かんでいるだけだ。

目標を失ったミサイルは俺のいたところを通り抜け、アリーナを覆うバリアにぶつかって爆発した。

「ここは！？・・・」そして俺はなぜだか粒子の世界(?)にいた。すると上から

声が聞こえる。『安心しろ、最適化フィッティングが完了した。』

これから一次移行に入る。『ああ、お前・・・バーミリオンか・・・』

『そうだ、ここからよろしく頼むぞ。』「おう、こっちこそな!」  
相棒『!-!』

そして、俺の意識は浮上していく・・・

その時、だれもが驚愕した。粒子からまるで巻き戻すかのように紅鷹とバーミリオン

が現れたからだ。しかも、バーミリオンの形が明らかに違う。

「ほう、一時移行を終えたか。」千冬は静かに呟いた。

そこにいたのは深い、バーミリオン深い朱色に包まれた機体だった。

ベースは漆器のような深い朱色、赤ともオレンジともかけ離れた色で所々に白く輝くラインが入っていた。手足と胸部、翼の色は微妙に異なっており、手足と翼がまだ明るめの朱色に対し、胸部は少し黒にも見えた形は体の装甲の原型は変わっていない、だが、明らかにでこぼこが無くなり、表面は滑らかになっている。そして……

「つ、翼が生えてる……（ホロリ）」そう、翼が生えていた。

（ハハ……これじゃまるで俺セイバーガンダムみたいだ……）

翼も見事に一对の羽と一对の巨大なビーム砲があり、もろに「セイバー」だった。

まあ色を見れば似ても似つかないし、他に違う所と言えば、両翼が繋がってない所や両翼に一機ずつ付いているGNドライブ、

ライン、  
同じく翼のビーム砲と同じく付いている円錐状で透明な物体。  
その他もろもろあった。

「おお・・・GNドライブもちゃんとGNドライブになったか・・・」  
意味の分からない発言だがじっさいにみるとよくわかるだろう。

三機のGNドライブには翠のラインが入り、同じく翠の粒子を大量に噴出していた。

「スペックは・・・なんじゃこの上がりようは!!・・・さ、さすが・・・これはどチートだぜ・・・」  
GNドライブがきちんと稼動（x3）なので動力、シールドエネルギーが  
急激に上昇していた。

「兵装の変更と追加、汎用型ビームガンから『ビームライフル・ルプス』に  
強化。ビームソード・バジユラから超高火力『ビームサーベル・ラケルタ』に強化。  
対ビーム反射兵装『ヤタノカガミ』使用可。弾幕補助用兵装『シリコンバーン・オロチ』  
使用可。高威力プラズマ収束ビーム砲『<sup>トランザム</sup>アムフォルタス』使用可。  
単一使用能力『圧縮粒子解放使用可。』」

「拡張領域何個あるんだよ。まあかなり強く（チートに）なったな。」

セシリアを見ると、驚きでフリーズしている。「おい！！いくぞ！！」

俺の声にセシリアは我に帰り、「くっ！！」残ったビットを飛ばしてくる、

しかし完全に一体化した俺達にかなう者などいなーい！！

「よし、決めるぞバーミリオン（・・・）」「ひらり、ひらりとビットを切り飛ばす。

三機のGNドライブの出力、スピードは尋常ではない。

イグニッション・ブースト  
瞬時加速には届かないものの、普通のスピードでは到底太刀打ちできない。それほどにこの機体のスピードは速かった。

GNドライブは大量の翠の粒子を噴き出し、機体の通った軌跡を流れ星のように彩る。

「綺麗・・・」観客席からそんな声が漏れる。

「さて、そろそろ終わらせよう。」そう呟き、盾をセシリアに向か



って投擲する。

セシリアは必死に左に避ける……が……「バスッ！……」  
「なっ！なにが！？」

既にセシリアのシールドを緑の少し混ざった白のビームが打ち抜いていた。

素早く右に移動した俺がビームを盾に反射させ、的確にセシリアにビームを

当てたのだ。『ルプス』の威力は『汎用型ビームガン』の比ではない。

一気にセシリアのシールド残量をゼロに持っていく。

「試合終了、勝者 高峰紅鷹。」アナウンスが響く。

「そんな……この私が負けるなど……」呆然としているセシリアア、そこに俺が  
近づく。「おい、俺と一夏に謝れ。」「うっ……わかりましたわ。  
お二人とも、

このわたくしの失礼をお許してください。」

ちゃんと謝ってくれたので許してやる。

「よし、分かればいいんだ。」笑顔を浮かべ、セシリアと握手を交わす。

このあとはそのまま一夏とやるのか・・・大変だ・・・

とはいえ、いったん戻ってシールドエネルギーを回復させねば。

戻ってISの補給ケーブルを繋ぎ、回復していると一夏たちがやってきた。

織村先生もいるな。

「す、すごかったなお前・・・」一夏が呟く。「まあ勉強をしてないのは実技に

全ての力を注いでいたからだしな。」

「高峰、あのISは本当になんなんだ？動力装置もまるで違うぞ。」  
「それは前に言いました。」「・・・そうか・・・」お、諦めたか。

「次はお前とだな。一夏。手は抜かないぞ?」「お、おお・・・望む所だ・・・」

（幕も、怪我はさせないけどさ、一夏がやられたからって怒るなよ。）

（分かっている。むしろ思いっきりやってやってくれ。）（分かった。）

「おお、そういえば白式はどうだ?」「ああ、千冬姉のおかげでもう一次移行が済んだ。」「そうか、よし、もう行くぞ。」「ああ!」

アリーナに入り、規定の位置まで飛ぶ。

空中で停止し、一夏にプライベート・チャンネルで話しかける。

「時に一夏、お前はこの力、何のために使う?」

「・・・俺は、千冬姉や篤、仲間を守るためにこの力を使おうと思う。」

「俺もだ。俺には(この世界には)身内も何もいない、それでも「何か」を守りたいんだ。」

「そ、そうだったのか・・・」

「手加減はしないぞ。その力とやら、俺に見せてくれ!」

「望む所だ!!」

そして俺達は互いを見据え、どちらとも無く微笑み、「いくぜえええええ！」

一気にぶつかり合った。

## 第5話〜一次移行（どチート）と「護る」二人〜（後書き）

どうでしたか？皆さんもうお分かりかと思いますが

作者は大の「セイバー」ファンなのです^^

え、だってあれメツチャかっこいいじゃないですか！

しかし改めて「パクリ過ぎだろ・・・」と感じました。

ここからは結構オリジナルの装備とかイベントとかを

積極的に考えたいです。この「セイバー」のもろもろは

どーしても作者がやってみたかったことのひとつです。

そして思ったよりチート化させていただきました。

さて、次は一夏との対戦です。チートすぎて勝負にならんかも・・・

そういえばいつのまにかポイントが増えました。こんな

パクリ万歳な駄文を読んでもくださって

ありがとうございます（ドゲザー）。私としては読んでくれる方が

一人でもいてくれれば書き続ける元気が出ます。

これからもどうぞよろしく。

では次回もお楽しみに〜



## 第6話〜V S 一夏と過去の暴露〜（前書き）

ども！佐久紗です！

今回、ついに一夏と篤に転生の件をばらしてしまいます。

まあまだ詳しい過去のことは言ってませんが。

ではどしどし。

## 第6話〜VS一夏と過去の暴露〜

「はあっ!」「せえいつ!」

朱と白、二つの機体が空中でぶつかり合い、派手に火花を散らす。観客席は静まり返り、決着がつくのを見守っている。

「うおらあ!」「俺は思いっきり一夏の横腹に蹴りを食らわせ、ふっ飛ばして距離をとる。

「くう〜やっぱつええな〜」一夏が話しかけてくる。「そりゃどうも。「適当に答え、俺は一気に機体を急降下させ、体の後ろのエネルギーシールドを切り、地面に降り立った。」

「え?」一夏が驚いている。「早く、こいよ。「挑発気味に誘う。「上等だ!」

一夏が突っ込んでくる。俺は一夏に合わせて二本の『ラケルタ』だけで闘っていた。



「ちっ！」いったん距離をとる一夏。一夏は少し離れた所で地上十センチに浮いている。

俺が「着地」したのは単純にエネルギーの節約だ。消耗戦になると移動に使う

エネルギーが馬鹿にならないからだ。

「うおおおおお！！！！」一夏と俺が同時にぶつかる。俺は走って」

一夏は「飛んで」

余談だがセシリアが管制塔で一夏のことを熱い目で見ていたのには気づく由もない二人だった。

一夏は剣術が相当上手かったようで剣の振りが鋭い。しかし俺は二刀流、

飛ぶのはまだ慣れてないが地上戦なら喧嘩で相当鍛えている。結果、互角に見えていた

戦局は徐々にこちらに傾きつつあった。しかし一夏もさるもの、なかなか本命の攻撃が入らない。

「うっ・・・もうシールドエネルギーがほとんど無い・・・」

「俺もそろそろきつくなってきたぜ・・・」二人同時に呟く。

(くそ・・・もうこの一発で一気に終わらせるしかねえか・・・)  
俺はこっそり

「ある作戦」を立てた。この作戦はまさに一撃必殺だが同時に諸刃の剣でもある。

「まあやるっきゃないでしょ!」そういい上空に舞い上がり、

自分の前方に展開していたエネルギーシールドを今度は真後ろに展開、

前をがら空きにする。「なっ、どついうことだ!」一夏が慌てた声を出す。が

それを無視して俺は一夏に告げる。

「まさかここまでやるとはな、見直したぜ一夏。だが、これで終わりにする!」

「望む所だ!」一夏も答える。「ならいくぜ!食らえやあああ  
!」

前方がら空きのまま一夏に突っ込む。一夏も同じく突撃してくる。

「うおおおおお!」一夏が『雪片二型』を大上段から振り下

るす。だが

「待つてたぜ！！」そう、バーミリオンにはエネルギーシールドとは別に

右手に盾を持っている。その盾で一夏のエネルギー刃を受け止める。

『バリア無効化能力』も意味を成さない。なぜなら既に俺の前にエネルギーシールドは展開されてないからだ。

「ギヤギギギギギギン！！」「なにいつ！」

一夏が驚く一瞬の隙に余った左手で右腰の『ラケルタ』を引き抜き、抜き打ちで『白式』の胴を薙ぐ！密着していたこととエネルギーの消費もあって

「叩き切る」とは到底いかなかった。・・・が・・・

『ビームサーベル』の使い方は「切断」ではない。「溶断」だ。

そしてその重い一撃は容赦なく『白式』のエネルギーシールドを「溶かし切る。」

「試合終了、勝者 高峰紅鷹。」会場のブザーとアナウンスが終わりを告げた。

〜試合終了後〜

「いや〜・・・やっぱり負けちゃったよ。」「でも初めてでああま  
でいくとは。」「

「お前もほとんど初めてだろ・・・」「まね〜」「

試合が終わり、俺と一夏は談笑していた。「じゃあクラス代表はお  
前だな!」「

「げっっ!!」「忘れてましたー(汗)

汗をかきながら一夏に言ってみる。

「ねえ一夏くうくん?やっぱりクラス代表は「お前な(笑)」「

「(笑)うな!!」「ひでえ!

「おお、ここにいたのか。」「お、箒。」「俺達を見つけた箒が  
歩いてくる。」

「なあなああ、俺どうだっ」「負け犬が」「ひどい！」「こいつもたいがいひどいな。」

「駄目だろ、やさしくしてやらないと（ニタア）」

「か、からかうな！！」「顔を真っ赤にする筈。それじゃあ本心がバレバレだよ……」

しばらく筈も加えて三人で話していた俺達だったが……

「さて、一夏……」「おう……」「なんだ？急に真剣な顔になったぞ？」

「どした？」 「ええと……その、だな……」「一夏が戸惑いながら言った。

「お前が前言ってた『俺は別の世界から来た』って……どういうことだ？」

「！！！！」

バレてた！？ああ……あの会話……

「聞いてたのか……」「ごめん！！」「す、すまない！！」

だからたまに二人でこそこそ話してたのか・・・俺はなんだか難しいパズルを

解いた気分になった。・・・でも・・・話していいもんか？・・・

・・・ええいつもどうにでもなれ!!

「わかった、全部話そう。お前なら信頼できるしな。」( )ゴクリ・・・( )

「ただし、今から話すことはぜったい誰にも言うな。織村先生にもだ。

「わかったか?」「・・・分かった。」「じゃあこれからおれの部屋に来てくれ。」

こうして俺は転生のことをこいつらに全て言うことになった。まあこいつらならな・・・

（紅鷹の部屋）

三人で俺の部屋に入る。

俺の部屋は一人部屋で一夏と篝の部屋とは「近くなく、遠くなく」だった。

ちよつと前まではすげーうるさかったんだが今はそうでもない。

「さてひとつ言っとくが俺が今から話すことは全部ほんとの事だかな。」

「ああ、分かってる。」「よし」

「最初に俺はこの世界の人間じゃない。俺は・・・待てよ・・・ここ日本だよな。」

「そつだが？」

「やっぱな。俺は相当過去の日本から来たらしい。ほら俺日本人だし?。」

「言われてみればな。」

「あるとき前世で俺は喧嘩しててナイフで刺されて死んだんだがその後

このバーミリオンと一緒にこの世界に来た。」

「え？じゃあ紅鷹は一回死んだのか？」

「そつだ、で神様と会ってな、転生させてもらったんだ。で、空から落ちてきたわけだ。」

「そ、そんな訳があったのか・・・」

「そつだ、話は変わるが俺は前世で両親を亡くしてな。十三位の時だったかな。」「！！！！」

「知り合いもぜんぜん引き取ってくれなかった。手元には何一つ残っちゃいなかった。」

「結果泊り込みのバイトみたいな形で何とか知り合いの料理屋に引き取られた。」

「だから料理が得意なんだよ。」

「そ、そんな・・・」

「父さんと母さんが死んでから俺は何かを守りたくて必死だった。」



たぶん

あの時の俺は血眼だったと思う。」

「……………」

「両親が死んでからは親友と呼べる奴もいなかった。……だからさ、一夏、箒、

お前らと友達になれた時、俺すげーうれしかったんだぜ……」

「紅鷹……………」

「ありがとな、友達になってくれて。水臭いけどここは素直に感謝してる。」

「…………おう、俺らはこれからお前のもとだかな。」

「そうだ。私たちにとっても紅鷹はいい友達だ。……そ、それに応援してくれるし／＼／」

「ははっ！そーだな！いいかげん一夏にも気づかせないとな！」  
「……何をだよ……」

「さて、俺から話すことはこんぐらいか。後は俺があんま話したくないことだしな。」

「そうか・・・話してくれてありがとな。」

「ああ、他の奴には言つなよ、へんに同情されたくない。」

「分かつてる。・・・じゃあ・・・紅鷹、改めてよろしくな！」

「!!!・・・おう!こつちこそな！」

なんだか俺は心が少し軽くなった気がした。

そして俺ら三人は握手を交わし、絆を深めたのだった。

～一夏、篝サイド、廊下にて～

「・・・まさか紅鷹にあんな秘密があったとはな。」

「ああ、驚きだな・・・だからバーミリオンも見たこと無い構造だったのか。」

「そうだな・・・でも・・・」「なんだ一夏？」

「あいつってさ、すごいしっかりしてて大人っぽくて意志を突き通すような

性格なんだけど。」「そうだな、それで?」

「・・・気づかなかったか?あいつ、一緒にいるとき、ふとしたときに

スゲー悲しそうと言うか寂しそうな顔するんだよ。」「

「!そうだったのか。」「

「たぶんあいつの両親の死に関係あると思うんだけど・・・ただ病気で亡くなっただけじゃあんな顔はしない。と思う。」「

「まあそうだが本人が詮索するなど言っているんだ。いつもどおりに接してやるのが一番だろう。」「

「そうだよな。あいつがなんであろうとあいつは『友達』だもんな。」「

そんな話をしつつ、二人は愛の巢(第一視点)に帰ってゆくのだった。

第6話〜VS一夏と過去の暴露〜（後書き）

さて、どうでしたか？

紅鷹はやはりかなり深い心の傷を負っているようですね。

これからをお楽しみに、

余談ですが・・・評価を入れてくださいっ！

どんな点でもよいので、と言つかむしろそっちの方が燃えますので。

ぜひぜひよろしく願います！！

第7話〜楽しい授業（実技だけね）〜（前書き）

どもども〜

今回は授業風景だけです

バーミリオンの武装の説明もちょうつとだけあります

ではども・ぞ

第7話〜楽しい授業（実技だけね）〜

〜翌日 朝のSHR〜

「ではクラス代表は高峰紅鷹で異論ないな。」織村先生の声が響く。

「異議あり!」「黙れ。」・・・はい・・・

はあ・・・なんでこんなにめんどくさい役になってしまったんだろう・・・か・・・

なんでだよ、何でクラスがこんな盛り上がりを見せてるんだよ!

「まあ、これで私たちも貴重な経験を積めるし、他クラスに情報も売れるし!

一度で二度美味しいね!」

「誰だよ俺を商売に使おうとしてんのは!」ちょ、まじでやめて!

そこで俺はあることに気づいた。

「・・・・・・・・・・」

セシリアと箒がなぜかにらみ合っている。というか二人とも凄い剣幕だな。

見るよ、間に挟まれた女子が青ざめてるよ。第六感の優れた子だな。

「そ、それはそうと一夏さん？高峰さんに負けてなんだか悔しそうでしたわね。」

そんなに悔しいのであればこの優秀にしてエレガント、全てにおいてパーフェクトなこのセシリア・オルコットがISの操縦について教えてあげましてよ？」

何だいきなり？・・・ああそうか、セシリアも一夏に惚れるんだっ  
たな。

でもそれじゃ箒が黙っていないだろうな。

「生憎だが、一夏に教えるのはこの私だ私が一夏に『頼まれた』の  
だからな。(ギン!)」  
・・・なにその視線俺今ハートを撃ち抜かれそうになったぞ(恐怖  
的な意味で)。

おお、セシリアも退かないのか。すごいな。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何か





「いいだろ！」

「ああ、そういう手があった。」頷く一夏。

「しかし、しかし……」不満げな二人。

「しかし何も無い。嫌なら俺が教えるぞ？」「ほ、ほんとか紅鷹  
！！」

「……うわ、なにその目、すげえ輝いてんぞ……ああ二人の視線が  
痛い！」

「まあそういうことでいいだろう。（ですわ）」（バチチチチチチ  
チイ！！）」

二人の間に火花が散っているのは目の錯覚か？

「こ、これでSHRを終わります。」ちなみに俺達は山田先生に普  
通に無視されて

気づけばもうSHRが終わっていた。

～授業中～

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。高峰、織村、オルコット、  
ために飛んで見せる。」

言われて俺達はISを展開する。俺はもうバーミリオンを呼び出すのは一瞬でできる。

なぜかって？勉強もせずにアリーナで毎日飛び回っていたからさ。  
三人の監視も兼ねて。

空から一夏達の練習風景を見ていたが二人とも教えるのが果てしなく下手だった。

筈は意味不明な擬音だらけ、セシリアは角度とか詳しくすぎて俺にも理解できん。

ちなみに俺は一夏を介してセシリアとも仲良くなっていた。

『友達の友達は友達』の式だ。発案者は俺。

「ほう、高峰はやはり速いな。・・織村、遅いぞ。」「は、はい・・  
ようやく一夏も『白式』を纏う。」

「飛べ。(ドシュン！)」「言われた瞬間俺はもう『いなかった。俺のいたところには翠色の粒子が光っているだけだ。』」

「す、すごい・・・」女子の内の一人が呟く。  
そう、バーミリオンの出力はおそらく、いや間違いなくトップ。まあGNドライブ  
三機も付いていればそれもそうだが。

「まったく、バーミリオンの機体情報が漏れれば世界は大混乱だぞ・・・」  
織村先生が呟いている。

後方を見ると「待ってください紅鷹さん！」セシリアが必死に追いつこうとしていた。

待ってやるとセシリアは俺に追いつき「・・・いつ見てもその機体のスペックは  
規格外ですわね・・・」といつてきた。「どーも。」  
返す言葉が無いので適当に返す。「ま、待ってくれよ・・・」お、  
やっと一夏もきたな。

「では降りてみる。地上十センチだ。」「はい」「一夏を除く全員が答える。

(ズドッ!!) 弾丸のような音を立て、俺は一気に急降下、言われたとおり  
地上十センチで粒子とともにピタリと停止する。「おお～」と周り

がどよめく。

また続けてセシリア、遅れて一夏・・・あれ！？あれもうアウトじゃねー！？

「ドガアアアアン！！！」

言ったとおりアウトな速度で一夏がグラウンドにめり込んだ。

起き上がった一夏が織村先生にモロに怒られている。

・・・「なんか俺が最初にこの世界に来た時とよく似てるな」・・・

「「そうだな、「うお、織村先生と筈だ。」

「篠ノ之と一夏に話したそうだな。「はい。「まあこいつらは信用できるしな。」

「そうですね。俺のことを詳しく知りたいのならこいつらに聞いて下さい。」

前と言ったことが違いますが、もうなんかどうでもよくなったのだ。

「ああ、もう少し聞いた。」速いな先生エ・・・

「さて三人は武装を展開してみる。高峰、お前は呼び出し出来る装備などはあるか？」

あ・・・そうだ。もうバーミリオンの装備は全て織村先生に見せよう。

「一応。でももうこの際ですから武器類だけを全部公開しようと思います。」

「そ、それは本当か!!」わお、織村先生の目が光った。やはり興味があるのだろう

「バーミリオンはこっちでデータ解析が出来ないのだ。武装だけでも見せてくれると助かる。よし、全員高峰から離れる!!」やけに楽しそうな織村先生、

その横で山田先生も記録用紙を持ち、わくわくしている。・・・そんなにか?・・・で、周りを見ると・・・

「うおっなんじゃその目は!」皆の目が言い表せないほどきらめいていた。

セシリア、箒、一夏も含めて。

「お前等もか!!」思わず突っ込む。

「……だって!(よ!) 未知の機体の性能が見れるん(のだぞ!!)  
(ですわ!!)」「」「」

「わあーったよ。そこまで言われちゃあな・・・じゃあ現時点の兵装  
を見せるぜ。」

先生、上になら撃つていいです『いいぞ!』『速っ!』

皆のテンションがおかしい・・・

「え〜つとまず『ビームライフル・ルプス』これは見たはずですよ。  
これは

『ビームサーベル・ラケルタ』二本あります。・・・で次は・・・

「ふむ・・・次はあるのか?」「ええ」そう言い、俺は翼について  
いた二つの透明な円錐

状の物体のうち一つを射出、自分の前に持ってきた。

「これはピットと同じようなものですわね。どうやって使ってます  
の?」

セシリアの問いに

「こーやんの。」俺が支持を飛ばすと円錐がパラソルのように開いた。

自分の前に展開された『それ』にむかって『ルプス』を内側から放つ。

するとビームは『それ』の中で複雑に屈折し、八本の光に分かれて『それ』から放射状に広がっていった。そう、まるで神話に出る『ヤマタノオロチ』のように。

「『シリコンバーン・オロチ』と言います。まあ簡単に言えば弾幕を作る物ですね。」

「ほうほう……後は？」織村先生が期待のまなざしを向けてくる。

「後はこのくらいです『アムフォルタス』、破壊力重視のビーム砲です。」

「お、お前それ武器だったのか！？翼かと思ってた。」一夏が驚い

ている。

「ああ、ちょっと撃ってみる。みんな離れる！！」皆を避けさせ、背中の一对のビーム砲を両脇の上に構える。そして、使うようバ―ミリオンに指示を出す。

すると、砲口に白い光がたまっていき、（ドオオオオオオウ！！）

赤と白の混ざった巨大な光条が発射され、雲をぶち抜いていった。

その太さはもう人間の胴回りぐらいある。

皆を見ると織村先生までもがフリーズしていた。

撃つのを止め、「武装はこんなもんです」と話しかけると気がついたようで、

「あ、ああ ご苦労。・・・全く、化け物じみた火力だな・・・」と言ってきた。



「大丈夫です。『アムフォルタスは普通は使いませんから。』」

「そうしろ。しかしよくやってくれた。これで貴重なデータが取れた。」

「政府には言わないで下さいよ?」

「分かっているさ。」「ならよし!」

すると一夏達がやってきて「おまえ! 凄すぎるだろ!」「と言ってきた。

「ありがとう。」「と言っておじい。」

「わたくしと対戦した時の本気ではなかったんですのね・・・」  
セシリアが落ち込んでいる。

「ちげーよ。『アムフォルタス』はエネルギーを食いすぎるから使わなかったんだ。」

もうシールドエネルギー9しか残ってねえよ。」「

「流石異世界の『言うなっ!!』」すまん・・・」「まあいーよ・・・」

「こうしてなんやかんやで楽しい授業（実技のみ）は過ぎてゆく・・・

第7話〜楽しい授業（実技だけね）〜（後書き）

どうでしたか？

装備は「シリコンバーン・オロチ」がオリジナルです。

後から地味に増やしていきます。

ではまた〜

第8話〜紅鷹と睡魔と鈴サン登場！〜（前書き）

ども、作者です。いきなりですが申し訳ない！

そろそろ試験なもので更新が遅れます」「」

では本編をどうぞ。鈴登場です。

## 第8話〜紅鷹と睡魔と鈴サン登場！〜

「と、いうわけです！高峰くんクラス代表決定おめでとう！！」

「……………」ありがとう。「ばん……………」ばんばん……………」

クラッカーの音が鳴る。クラッカーって一斉に鳴らさないと返って  
気まずいよね……………」

どうやら俺のパーティーをすつのは口実で皆で騒ぎたかった  
だけのようだ。

始まってすぐ勝手に皆で盛り上がっている。

……………」待ってくれ。就任パーティーって……………」

一夏も一夏で自分がクラス代表から逃れられてほつとしてい  
る。なんだよその安心感に満ちた目は……………」

ちなみに現在午後九時半、俺らのほかには誰もいない。  
タフだなおまつら……………」

「はあ……眠くなってきた……」

意外かもしれないが俺はかなり規則的な生活を送るほうなのだ。

十時を過ぎると起きていられないのだ。

「はいはい、新聞部です、話題の新生、織村一夏さんと高峰紅鷹君に

特別インタビューをしに来ました〜!」「おお〜!」「」

なんでそっちが盛り上がるんですか。ぜんぜん嬉しくねーよ・

「あ、私は二年の黛まゆみかおる薫子、よろしくね!」

「よろしく……」「一夏もめんどそーだ。ザマーミロ(笑)

「では、ずばり高峰君!クラス代表になった感想を!」

「めんどいです。」「え〜、もっと面白いコメントくださいよお〜」

「ゼツタイユウショウシマス」「なんで棒読み!?!」

「っでは織村一夏君！彼は本当に優勝すると思いますか？」

「思います！！」なんで強調！？

「ほうほう、まあ後は勝手に捏造しておきますね。」

「なんのために来たんだあんたは！！」え！？インタビューいらんかったじゃねーか！？

「では最後に写真頂戴？高峰君オンリーで、はい35×51÷24は？？」

「74.375っ！（パシャ）」「わあ、凄いねえっ！一発正解はこれで最初だよ」

驚く薫子さん。この頭ならこんぐらい赤子の手をひねる（結構グロイ）ようなもんだ。

「紅鷹は頭がいいのか悪いのかわからないな。」ずっと黙っていた筈が言ってきた。

「いいに決まってるんだろ（グッ!）」「グーサインで返す。」

「でも前のテストでも酷かったじゃんか。」

「一夏、俺は興味があることしかしないの。操縦系統のテストはオール満点だったぞ?」

「そ、そうか・・・ほんとは頭良いんだな・・・」「そのとおり!」

「ではでは」ぴゅゅ　と効果音が聞こえそうなスピードで走り去る薫子さん。

そんな中夜は更けていき・・・いかん、ガチで眠くなってきた・・・

必死に抵抗するが結局睡魔に勝てずテーブルのど真ん中の席で俺の意識は沈んでいく。

「あれ?高峰君寝ちゃったよ・・・わあ!寝顔かわいい!」

クラスの女子が騒ぐが一向に紅鷹は起きない。ちなみに前世の中学



校でも

紅鷹は寝顔のかわいさに定評があった・・・  
紅鷹はひよんな所で幼いのであった。

「んん？・・・はっ！いかん！・・・てうわあ！！何してたんだお前ら！」

驚いた。目を開けたら一夏と篝を含む全員が俺の顔を覗き込んでいた。

・・・誰でも驚くか。

「紅鷹君寝顔かわいい」 「しっかり堪能させてもらいましたww」  
「えへえへ・・・(じゅる)」

口々に好き放題言ってくる女子達。つか最後の誰だよ！身の危険を感じたぞ！？

「寝顔幼いなお前・・・っておい紅鷹！お前目が！！目に光がなくなってるぞ！？」

あ、いちかがなんかさげんでるよ・・・しらね・・・

ちなみにこのときの紅鷹の表情は半開きの何の光ももってない目

で、

正直何も知らない人から見ればラリッてるみたいだった。

「おう・・・一夏・・・悪い・・・もう帰って寝るわ・・・俺十時回  
つたら

もう行動不能だから・・・」

「わかった！わかったから！！正気を保て！紅鷹ッ！」

「ああ・・・分かっている・・・rdzggfgfzzzvdffgs  
f.nkあbj、hmうhg・・・だろ??」

「紅鷹ーーーーー！！！」

その後ありとあらゆる手段を用いられて何とか覚醒した俺はぶらつきながら自室へと戻って  
いった・・・

「もう、なにもしたくない・・・(zzz)」俺はすぐ制服のまま  
ベッドに潜り、  
そのまま朝まで爆睡した。

～翌日、朝～

俺はかなり朝が早い。昨日何もしてなかったのでシャワーを浴び、朝食をとり（自炊）

虚ろだった目に光を灯し、教室へと向かう。

「まさかお前があんなに夜が弱かったなんてな・・・驚いたぜ・・・」

「・・・まあな、そのかわり朝は完璧だぜ！」そんなたわいも無い話をしていると

「ねえねえ二人とも、転入生の噂は聞いた？」一人の女子が話しかけてきた。

「「え？」」「なんでも二組に転入生が来るんだって」

「何で転入生？入学して来いよ。」「それに転入は国家の推薦が無いとできないから」

「中国の代表候補生なんだって」」「やっぱりな・・・」

「クラス対抗戦も少しは面白くなるようだな」」「あ、箒。」「です

わね。」

「お、セシリアも。」

「まあ紅鷹さんなら余裕でしょうけど。」「ふっふーん。もうかなり練習したからな！」

「いまのこの専用機持ちは一組と四組だけだから余裕だね。」「とその時

「その情報、古いよ。」「お？なんだ・・・あいつは・・・たしか鈴か。」

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には優勝出れないから。」

「鈴、お前・・・鈴か？」

「そう、中国の代表候補生、鳳・鈴音よ。今日は宣戦布告に来たって訳。」

「一夏、覚悟しなさいよね。」「手を腰に当ててそう言いはなつ・・・あれ？・・・」

「鈴、クラス代表は俺じゃなくてこいつ、高峰紅鷹だ。」

「よろしくな。」とりあえず無難にいこう・・・

「へえ、そうなの・・・まあいいわ。どっちにしろ覚悟しなさいよ一夏、」

「なぜに一夏!？」反射的に突っ込みが出た。

「・・・あなた、なかなか言うわね。気に入ったわ。鈴って呼んでいいわ。」

「どーも、高峰紅鷹だ。紅鷹って呼んでくれ。」

「分かったわ、でもあなたも覚悟してなさいよ、ゼツタイ私が勝つんだから。」

「ふふ、望む所だ、」

「というか鈴なんだそれ、すっげえ似合わないぞ。」

「んなっ！なんてこと言うのよあなたは!!!／＼／」

あ、口調が変わった。ってか顔赤くなったな、あ、そうか。

「はは〜ん、なるほどね〜。(ニヤニヤ)」

「な、なににやけてんのよあんたも!!」

実は自分以外の恋愛沙汰にはすぐ気づく紅鷹であった・・・

「べつつにイ〜箒も大変だあ〜(笑)」

箒はず〜つと鈴を睨み付けている。

「おい・・・どうしたんだ?・・・」「一夏・・・お前は・・・

「一夏・・・だれs」席に着け。鳳は二組に帰れ。』

「ち、千冬さん」(バツン!!)織村先生と呼べ。『~~~~!!  
一夏、それから紅鷹!逃げんじやないわよ!!」「鳳。」

「い、ごめんなさあ〜い!!」顔が青ざめてんぞ・・・

「一夏、あいつは?」「ああ、俺の幼馴染その二だ。」「なっ!」  
箒が

衝撃的な顔をしている。

「お前らも席に着け。SHRを始める。」「」「はい・・・」「」

今日もこうして一日ISの訓練と授業が始まる。

第8話〜紅鷹と睡魔と鈴サン登場！〜（後書き）

はい、紅鷹は他人の恋愛沙汰には敏感です（笑）

あと紅鷹は高校生にはまれに見る健康優良児だということも判明しました。

次は第9話の悩みとクラス対抗戦もちよつと書きたいです。



第9話〜新ライバル加入と幕たちの心情〜（前書き）

ども！

今回は鈴の加わった日常です！

箒とセシリアの心情も複雑ですね・・・

ではどひげど！

## 第9話〜新ライバル加入と幕たちの心情〜

〜幕サイド〜

（さっきの女子はなんなのだ・・・一夏とずいぶん親しそうに見えるが・・・）

朝の一件が気になって、なかなか授業に集中できない。

（それに、一夏はまるで・・・）

まるで、幼馴染と再会したかのような反応だった。・・・（カチン。）

（幼馴染は私だろう・・・！）

怒りがこみ上げてくる。ふと振り向けばセシリアも同じように悩んでいた。

あの顔はどう見ても教科書の内容に悩んでいるとは思えない。とすると・・・

(やはりセシリアもなのか・・・)もう分かっていたが改めてその事実を認識し、  
もやもやした気持ちで心がいっぱいになる。

(・・・ああ！何でお前はそんなに集中しているんだ！！)

一夏は昨日の授業での失敗からか、随分授業を熱心に聞いていた。

紅鷹はいつものように聞いている(ふりをしている)と、不意にセシリアと私の方を  
向き、やれやれと言った感じで苦笑いする。

(一夏も紅鷹ぐらい敏感になってくれればいいのだが・・・)そんなことを思ったが  
一夏はずっとあんな性格だったということも幼少期から知っていた。

そこで改めて心の中でつぶやく。

そう、今一夏には両親がいない。そして、両親を除けば、自分が一夏の事を  
一番よく知っている。自信がある。

（今は部屋まで同じなのだ・・・なんだ、今の所たいしたことは無いではないか。）

そう思う、自分には十分すぎるほどのアドバンテージがあるのだ。

（だから大丈夫、だから・・・）そう思っているが  
心の中にどうしても不安になる自分がいる事もまた事実だった。

（はあ・・・どうしたらいいのだ私は・・・）そう思いながら何気なくあたりを見渡すと

・・・紅鷹の黒髪が目に入った。側頭部に原因不明のアホ毛が揺れている。

（紅鷹に相談してみると言う手もあるな。）  
紅鷹はいいやつだ。いつでも相談に乗ってくれるだろう。

（しかし、紅鷹は一夏の言う通り確かに時々悲しい顔をする事があるな、  
なぜだろう。）紅鷹は一見すると何のストレスも持ってなさそうな顔をしているが  
あれで結構苦労してきたのかもしれない。いや、間違いなくしてきたのだろう。

（『前世』で両親が死んだと言っていたからな。）しかし詳しい事は自分も

聞いていない、本人がどうしても話したがらないのだ。

（機会があれば相談してみるか。）にしても、一夏の唯一の男友達が自分の味方だということもかなり心強い。

（まあ、これならば他に遅れをとる事はあるまい・・・）

思わず笑みがこぼれる。と、

「篠ノ之、答えは？」 織村先生の声が飛んでくる。

「は、はいっ!？」 思わず素っ頓狂な声が出てしまう。

「答えは？」 「き、聞いていませんでした。」

ばしーん!と小気味よい音が響く。思わず涙目になってしまった。相変わらず頑丈な出席簿だ。

うじうじ考えるのをやめ、授業に集中しようとしていると後ろのほ

うでまた

ばしーんと出席簿の音が響いた。

一夏のほづをみると、なにか珍しいものを見るような目で自分を見ていた。

(・・・お前のせいだぞ一夏！・・・ああ！なんでこんなにいららするんだ！)

結果、授業が終わるまでに三発以上叩かれた筈とセシリアであった。

↓授業後↓

「お前のせいだ！」「あなたのせいですわよ！」

一夏が筈とセシリアに責められている。

「ま、まあ話なら飯食いながら聞くから、とりあえず学食行こうぜ。紅鷹も行くだろ？」 「おお、行くわ。」

「む・・・まあお前がそういうのなら、いいだろう。」

「そ、そうですね。行って差し上げないことも無くってよ」

結局四人で食堂へと向かう。俺達はそれぞれ食券を買う。俺は例によってざるそば

四枚だ。実はおれは蕎麦好きなのだ。

「また蕎麦か紅鷹……しかも四枚……」一夏が呆れているがそんなこと知らんな。

そうこうしていると……「待ってたわよ一夏!!」「あ、鈴だ。また一夏の前に  
仁王立ちしている。そんな鈴を見て箒とセシリアの目がスツと細くなる。

「まあ、とりあえずそこどいてくれ。俺が食券出せないだらう？」

「う、うるさいわね分かってるわよ。」お、鈴はラーメンか。流石中国人。

「そーだぞ。俺の麺が伸びちまうだらうが。」

「あんた蕎麦じゃない!つて多っ!」鈴が（も驚いている）

まあこの四段重ねを見ればしょーがないか、まるでおせちだからな。

「だいたいあんたを待ってたんでしょーが！もうちょっと早く来なさいよ！」

いや、だったら教室に来いよ。

「おい、さつさと席を探そうぜ。」「ああ。」

それから俺達は奇跡的にすぐテーブルを見つけ、食事を始めた。

「鈴、いつ日本に帰ってきた？おばさん元気か？いつ代表候補生になっただんだ？」

(……………)

(……………)

(ズルズルズルズル！！) 箒とセシリアが怖い。

「質問ばっかしないでよ。あんたこそなにIS使ってるのよ。」



びっくり（ズルズルズルズル！）ってうるさいわね紅鷹！」

「おお、わりい。」ふと横を見ると箒とセシリアがグーサインをしている。

鈴の邪魔をしたからかな？

「そういえば紅鷹、あんたもIS動かせたわよね、いつISに触ったの？」

「機密事項だ。知りたければ一夏か箒に聞きなさい。」

「わかったわ、でもそれじゃ機密とは言わないわよ？」

「あ……でもいいよ。他のに黙っといってくれるならな。」

「ふーん、訳ありなのね。まあいいわ。それでね一夏……」

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが。いやしろ。」

箒が殺気を放ちながら一夏に聞いてくる。セシリアも

「そうですね！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってたっしやるのー!？」

と詰め寄る。

「そっだぞ?」「えっ……」

「「な、なに言っただよ(るのよ)紅鷹!」「「わりい、ちょっとからかっただけだ」

(ほっ……)( )

箒とセシリアが心底ほっとしている。よかつたな……

一夏と鈴は綺麗に拒絶したが鈴の方は一夏をにらんでいる。

「?どうした」「なんでもないわよっ!」

「そっだぞ一夏、本人が『なんでもない』と言っているのだ。『なんでもない』のだから。」

「そうですね『なんでもない』のですわ!」

「（パン）ごちそうさまっ！！」

「『『『速っ！！』『『『おお、なんて綺麗なハモリ！

「篠ノ之 箒だ、遅くなったが、よろしく頼む。」

「こちらこそよろしくね。」顔の表面に笑顔を貼り付けてやり取りする二人、  
間で火花が散っている。

「あんたも、よろしくね。」

「え、ええ。よろしくお願いしますわ。」こっちも以下同文。

「で、名前は？」

がたっ！！鈴の言い分にずっこけるセシリア。

「わ、わたくしはイギリス代表候補生セシリア・オルコットですわ！  
ご存じないのですか！？？」

「うん、あたし他の国とか興味ないから。」素で鈴が言い放つ。

「な、な、なっ!!」セシリアが怒りで真っ赤になっている。

「い、言っておきますけどわたくしはあなたのような方には負けませんわ!!」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つわよ。悪いけど強いもん。」

「い、言ってくれますわね・・・」篝も結構キてるようで無言で箸を止める。

セシリアは怒りに震えている。

「事実よ、悪いけどあたしは実力はこの学園で最強の自信があるわ。」

「」「!!」「へえ、言うじゃん。」

「それはど〜かなあ〜やってみないと分かんないぞお〜」

「・・・そういえばあんたクラス代表だったわね、でもクラス代表

になつたぐらいじゃ  
私には勝てないわよ。」

「鈴、紅鷹の実力は本物だ。下手したら学園最強は紅鷹だぞ。」

「へえ、あんた、なかなかやるのね。まあ決着はクラス対抗戦  
でつけようじゃない！」

「望む所だ。」

突然の宣戦布告に食堂は（主に周りが）大いに沸き、

その後は誰が一夏の教官になるかで鈴も加わり揉め、  
終始三人をなだめるのに必死な紅鷹と一夏であった。

～放課後、アリーナにて～

「え？」俺がアリーナの更衣室、（急遽作ってもらった）で着替え  
していると一夏のそんな声が聞こえた。

・・・どうしたんだろ？（・・・！！・・・斬る！！・・・）  
も聞こえる。  
なんか物騒なセリフが聞こえましたが？・・・

着替え終わり、アリーナに入ると・・・あれ？  
『訓練用IS』打鉄』を  
展開している、でもってセシリアと殺りあってる！？  
そんな表現が似合うほど

二人とも表情が鬼気迫っていた・・・

一夏が呆然としていると一夏に声がかげられた。そして・・・

「うわ！！二対一！一夏死ぬんじゃない？」「これはやりすぎだ。ってか  
箒上手いな。」

流石にやりすぎだと思ったので一夏を庇う。

「はあっ！！」「えいつ！！」「ちょ、うわあああ！！！」  
箒が一夏に切りかかりセシリアが反対方向からビームで狙撃する。

一夏が悲痛な声を上げた。「ふっ！！！」一夏を突き飛ばし、まずセシリアからのビームを

シールドで防ぐ、次に剣を振り下ろす箒の手首をつかみ、「っせい  
！」

受け流すように背負い投げ（？）を決める。地面に叩きつけた箒に  
『ルプス』を突きつけ、

セシリアにそのまま翼の『アムフォルタス』の片方を向ける。

「「「っっ！！」」

「おまえら……やりすぎ……」とりあえず二人から照準を外す。

「……そうですわね、失礼をいたしました……」「……ちょっとやりすぎだな……」

「わかりやいいんだ。一夏にあったメニューにしてやれよ。」

「分かった……」ならよし。

「しかし凄いですわね……二人ともを一気に拘束できるなんて」

「そっだよ！！やっばすげーな紅鷹！！」「一夏がきらきらした目で俺を見てくる。

「まあずっと練習してたからな。ま、あとはぐっくくり〜」(笑)

「な、なにを／＼」二人とも真つ赤だぞ。てか

(一夏もいい加減気づけよ!!)

こうして俺とは違う所で二人の優しい(?) 訓練を見ながら

「はあ・・・なんか一夏が羨ましいな・・・」

いや、恋人が欲しいとかではなくてだね!

そう・・・なにか足りないような、寂しいような感じがする。

ふと一夏達を見ていると『あの日』の光景がフラッシュバックした。

(父さん・・・母さん・・・いや、忘れる! もうあの日のことは!  
!)

そう自分を叱咤し、俺はただがむしゃらに『ルプス』を撃ちまくった。

こうして今度は俺ももやもやした感情を抱きつつ、訓練を終えた。

そして一夏たちは・・・「あ、紅鷹がまた悲しそうな顔してる・・・」

「ほんとですわね・・・彼に何があったのでしょうか・・・」

「そうだな・・・いつたいなにが・・・」



悲しそうな紅鷹を心配していたのだった・・・

こうして彼らの放課後は過ぎていく。

第9話〜新ライバル加入と幕たちの心情〜（後書き）

どうでしたか！

最後は紅鷹の気持ちも書かれています。

紅鷹は「あの日」のことに両親のことでかなり悩んでいるようです。

これからの展開にご期待を！

ではでは。

第10話 恋愛相談とバトルと乱入！〜（前書き）

ども佐久紗です。

今回は鈴の話が多いです。

ではどうぞ。っと！最後に大事なお話がありますので  
後書きも飛ばさないで！

第10話 恋愛相談とバトルと乱入！！

〜訓練終了後〜

「しゃ、しゃ、シャワー!?」いつも『い、い、一夏! あんたあの  
ことどういづ  
関係なのよ!?!?」

訓練を終え、寮へ急いでいるとそんな鈴の声が響いた。

「……………。」……………!?!?」

おれはかなり一夏達と離れて帰っているのでよく聞き取れないので  
分からないがあれは箒の事で揉めているようだ。箒も箒だ。  
さっさと告っちゃえよ。他のに横取りされちまうぞ?

〜自室〜

俺は自室に戻り、夕飯の準備をする。俺は基本的には自炊なのだ。

「……………!?! (バシン!)」……………、……………。」

「・・・・・・・・・・」

ました、一夏の部屋がうるさいのにはもう慣れたが今日は鈴も加わっている。

(なんでここまで聞こえんだよ・・・) そんなことを思っていると

「・・・・・・・・・・!!! (ボタン)」お、どうやら決着がついたよう  
だ。

なんとなく外に出てみると、お、あれは・・・鈴だ。  
見ると、んん!?目が真っ赤だ。泣いてるのか。

「おいどーした!?!・・・・はあ・・・・一夏だな・・・まあ入れや、相  
談に乗るぞ?。」

「うん・・・・ありがと・・・・言わせて貰っわ。」

部屋に上がる鈴、「とりあえずなんか飲め。」麦茶を差し出す俺。

「ありがと・・・・」とそれを受け取り一気に胃に流し込む鈴。

「さて……どーせまた一夏がやらかしたんだろ。」とりあえず聞いてみる。

「ええ、そーよ……あいつっ！私の！約束を！！」もうめちやくちやに

切れている鈴。

「オーケー落ち着け、いったいなにがあつた簡潔に説明してくれ。」

「ふう……えつとね、簡単に言つとね、昔、中国に戻る前一夏と約束をしててね、」

「ほお、どんな約束だ？」

「っ！……」一夏、私の料理の腕が上がつたら毎日私の作る酢豚を食べてくれる？  
『つて言ったの。』

「ああ、『毎日味噌汁を……』的なやつね。」

「ち、ちがつ『わねーんだろ？』……そつよー！！」なんで俺に切れるー！？

そしてもう大体分かった。

「なるほど、さてはそのとき一夏は『いいよ』って言ってたから  
意気揚々と蒸し返してみたら意味が分かってなかったというパター  
ンと見た。」

「まさにそのとおりよ。あいつ、『俺に飯をご馳走してくれるって  
約束だろ?』

って言いやがったのよ!・・・」

「ええ〜・・・」もう突っ込むしかないな。おっと、もうこんな  
時間!

「わりい、ちと夕飯作る。作りながらにさせてくれ。」

「ええ、ありがとね。」

「一夏は一回生まれ変わるべきだな。」「激しく同意するわ。・・・  
はあ・・・」

俺は野菜を切りながら話をしている。急に酢豚が食べたくなったの  
でメニューを変更する。

「それでだめならもうなにやっても駄目な気がするな・・・」

「そうですね・・・」二人同時にため息を吐く。

「っていうかあんたも料理上手いのね。包丁の音が凄いリズムカルよ。」

「料理はリズムだ。」このセリフだけ聞くと訳が分からないだろう。

しかし俺はずっと母さんにこう教えられてきた。現に俺の包丁はかなりリズムカルに野菜を切っている。比喻とかではなく、

本当にリズムカルなのだ。

「(タタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタタ！)  
つとできた。」

これを次はこーしてあーしてこれちよつと加えて」

いくつもの作業を同時にこなしながら流れるように料理を作っ  
ていく。

十分後、完璧な『酢豚』が出来上がった。



「わりい、待たせた。」皿を持ってテーブルに向かう。

「いや大して待ってはってすごー！あんたも料理上手いのね。」

「ああ、料理では大抵のやつに勝つ自信がある。まあ一口食べてみる。」

そついい俺は鈴に別の箸を渡す。食べさせる？ハハッ、冗談。

「じゃあ遠慮なく）ぱくつ（もぐもぐ……………」

「おーい……………どうしましたか？」

「美味いっつ！！」「はっはーそうだろそうだろ（ドヤッ）」

見事にドヤ顔を決める俺。

「待って待って！えー！ほんとに美味しいんだけど！？」鈴が絶賛してくる。

あざっす！

「ありがとうございます」

「紅鷹！！お願い！！」え？

「なんででしょうか？」

「あたしに料理を教え」いいよ』はやっ！！」「そつくと思ってたよ。」

「だから酢豚にしたんだ。この味なら一夏も満足だろ。」「！！！」

「ただし！俺は必要とあらば筈やセシリアにも教えるぞ？後教えるのは俺の気が向いたとき、以上！！」

「……………！十分よ！！それじゃ頼むわね！」「おう。じゃまずはこの酢豚だな。」

こうして俺はしばらく鈴に料理の基本と酢豚の作り方を叩き込んだのだった。

しばらく後

「ありがと、何から何まで。」「いいってことよ。」「俺は部屋の入  
り口付近で  
鈴を見送る。

最初へこんでいた鈴も今では元気を取り戻している。えかったえか  
った。

「後な、最初の相談の答え。一夏は確かにキモイぐらいの鈍感だ。  
だけどな、お前はその一夏の事で涙を流してたる。お前はそんだけ  
本気だつて事だ。  
気持ちが本物なら後は行動、そんだけだ。」

「!!!・・・そうね・・・うん、ありがとっ!!!じゃーね!!!」

鈴が元気な笑みを浮かべる。

よし。これでまた鈴は自信をつけるだろう。よかったな。

「・・・これでまた『何か』を『守れた』のかな?・・・」  
一人呟き、俺は部屋へと戻っていくのだった。

〜数週間後〜

「クラス対抗戦は〜っと・・・明日か。しかも一回戦から鈴とですか。」

橙色の空を眺めながらいつもの第三アリーナへと向かう。

おそらくは先に一夏達が行っているはずだ。

手早く着替えてアリーナ内に入る。と、

「あ、高峰くんだ、お〜い!!」皆の声が響く。なんでまた満員御礼?

「お〜い紅鷹〜!」お、一夏。等にセシリアに・・・おお、鈴までいる。

全員集合だな。・・・ん?・・・なんか言い争ってるな?

一夏達の所に走っていく。

「どうした?」「こ、紅鷹!ちょ、助けてっ!!」「え?・・・うわあああ!!」

見れば鈴が腕の部分にISを展開させて壁にクレーターを作った所だった。

「ど、どうしたんだよー!!」あまりにも鈴が怖くてちよつと声が震える……

「こ、こ、こいつ……約束は覚えてないし謝らないし拳句の果てには

ひ、ひ、貧乳つて……!!!!!!」

半分泣きそつな声で鈴が怒鳴る。一夏お前馬鹿か……

「いゝちゝかくゝん!………ほわたあ!!(バキイ!)」「ぐべっ!!」

思いつきり一夏に回し蹴りを決める。ちよつとこれは制裁&矯正が必要だな。

「な、なにすんだ紅鷹!」「この……女たらしがあ!!(笑)」

「(笑)てなんだ!!」「はあ……鈴に謝れ……明らかに  
お前が悪い……」

「う……確かにな……」「やゝつと気づいたか……」

「すまん鈴……俺が悪かった。」「よし。鈴も許してやれ。」

「……いいわ。許してあげる。」「鈴……お前根は優しいのな……」

「あとぶっちゃけて言つと箒にも謝れ。」「え!?!」「いいから。」

「……??!」「めん箒も……??!」

「……い、いいぞ。気にするな……」「そこで俺は一夏の耳元で囁く。」

「いいか一夏、これからはな、お前の周りの女子を注意して見る。そしたらきつとなんか分かるだろ。」

「お、おう……気をつけてみる……」「ならよし」

見れば鈴と箒が凄い感謝の視線を向けてくる。聞こえてたのか、なんて地獄耳なんだ。モモンガか!あれ?ムササビだっけ?あれ?あれ違う種類だっけ?  
……まいーや。

(よかったな。これで少しは一夏も気づけばいいけどな。)

そう呟き、皆に話しかける。

「よし！はじめよーぜ！今日も俺は皆を監視するからな！」一夏が死なないようにな」

「あ、ああ・・・」「はい・・・」「わかったわ・・・」  
急にへこむ三人。どうした？

(そんなに酷く見えるかな・・・？)( )

「ほら、紅鷹謝らないと(笑)」「(笑)うな！くそく根に持つてやがった・・・」  
三人ともごめんなさい・・・」

「「「・・・いい(です(わよ(ぞ(別に・・・」「「「

こうしてなんだかなごな空気のまま俺達は訓練を始めた・・・

～試合当日～

俺と鈴はISを展開させお互いに向き合う。

「へえ・・・あなたのIS面白いわね。主に粒子の量が。」  
「でも。確かにこんなISは世界に一つだろうからな。」

鈴の『シエンロン甲龍』は前世で小説にあったとおりかなり攻撃的ではっきり  
いって  
いかつい。鈴にぴったりだ。

「・・・なんか失礼なこと考えたでしょ。」「イエ微塵モ（汗）」  
こいつらには実はかなりの潜在能力があるのかもしれない・・・

「さて、始めようぜ、本気で来い!!」

「・・・後悔しないでよね!!」「冗談!!」

『それでは両者、試合を開始して下さい。』アナウンスとブザーが  
響く。

刹那、一気に鈴が清竜刀・・・もどき・・・を振り、攻め込んでき  
た。



俺はとりあえず左腰の『ラケルタ』一本を両手で持ち思いっきり鈴とぶつかる。

『ガアン！！』と激しい音と火花が散る。

「ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。けどー」

「今のはジャブだからね。」

「・・・来る！！」俺はいったん距離を取ろうとしていたが

『特別』な感覚に突き動かされ横に回避する。と、俺のいたところがいきなり「爆発」

した。だが、俺は今までバーミリオンと共に訓練し、ずっと一緒にいた。

その反応速度はセシリアと戦った時の比ではない！！

「へえ、あたしあんたのこと舐めてたわ。こっからガチでいくからねっ！！」

「最初からやってくれよ・・・っと！」鈴の衝撃砲を舞うようにかわす。

「よくかわすわね。衝撃砲『龍砲』は銃身も砲弾も見えないのが特長なのに。」

「ふははははは！…こっからだぜえ！…」  
「…いかん。アドレナリンが出ている。  
冷静になれ俺。」

（さうて、そろそろ作戦開始といきますか！…）  
（こっそりとほくそ笑む。）

「くっ…あんた速いわね。どうやってたらそんな出力出せんのかな！」

「実はな、これかゝなりエネルギー食うんだよね。」

嘘である。これでまず布石を打ったぞ。「へえ、じゃあ消耗戦になればきついわね！」

「うち！」  
「あえて忌々しそくに舌打ちをする俺。」「凶星ね！」「ちげーよばーかwww」

そこで十分間近く消耗戦をして鈴のエネルギーを多少減らした所で、

いきなり持っている一本の『ラケルタ』の出力を0にし、GNドライブの粒子生産を止める。シュウン・・・と柄だけになる『ラケルタ』しかし俺はもう片方を最大出力にしてある。

落ちていく俺。何とか地面に降りる（ふりをする）。

「貰ったわよ!!!」鈴が『龍咆』を連射してくる。それを俺は流れるような足裁きでかわす。そして一発だけ『ラケルタ』の柄に当てさせ、『ラケルタ』を手放す。

「しぶといっ!!!」鈴が痺れを切らして清竜刀もどきで突っ込んでくる。

かかった!!!

「くっ!」大上段から振り下ろしてくる清竜刀もどきを盾で受け止める。

「もう勝負は付いたようね」鈴が得意げに清竜刀もどきを押しつけてくる。

このまま押し切るつもりか。

「そうだな……」俺は観念したように言う。しかし、次の瞬間

「だ・け・ど！今のお前には欠点が一つ！！」嬉しそうに言い放ち、

左手で右腰のもう一本の『ラケルタ』を抜き、居合いの要領で鈴のシールドを

一気にえぐる！！

「なっ！！」とつさに後ろに飛ぶ鈴、しかし時既に遅し、鈴のシールドエネルギーはごっそり削り取られていた。

そして俺は全ての装備を稼動状態に戻す。GNドライブは待ちかねたように大量の粒子を周りに振りまく。

「あ、あんた！騙したわね！！」鈴が何か言ってくる。なに？知らんわ（笑）

（なあバーミリオン、悪戯って楽しいな！）（……）（やっぱなっ！！）

「ハッハア〜ドッキリ大成功！！じゃ、いくぜ……」

最大出力の『ラケルタ』二本で一気に切りかかる!!

「終わりにさせてもらっぜえ~~~~!!!!」

「~~~~っつ!!」

鈴の『甲龍』を一刀両断!!と、その刹那、

『ズドドドオオン!!』なんだ!?

アリーナに大穴が空いている。『ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定した、ロックされている。』

なんだと!つてかバーミリオン!タメ口になってるって!!

(まあそっちゃんがパートナーっぽくていいけどな!!)(.....  
ou!)

今確かに会話出来たぞ。.....うわあ!きたあ!突然ピンクっぽい

ビームが飛んできた。

『紅鷹、試合は中止！すぐにピットに戻って！！』っはあ？

「やだ。お前こそ戻れや。もうエネルギーねーだろ。」

「はあ？やだ。」「俺もやだ。」「あたしもやだ。」「俺のほうはやだ。」

「いやあたし……」「俺……」「言い争っていると織村先生の声が聞こえてきた。

「なにをやっているか！！速く二人ともピットに！！」やだっ！！！！』  
(ピシ) ほう……いい度胸だ……」

「ひいいい！！！！」

サアッツと青くなる俺と鈴。やっちゃまった！！！！とりあえず俺と鈴の死が決定した。  
生還しても死んだぞこれは……

「お、終わった！！……(ガクッ)」「

『ドシュッ！！』と敵のビームが飛んてくる。

『ピキーン！』『ブツン！』二人の間で何かがそれぞれ割れ、切れた。

「お前のせいだ！！」「あんたのせいよ！！」二人して所属不明機に八つ当たりする。

こうして完全に切れた（覚醒した）俺と鈴は所属不明機に突撃していった。





## 第10話 恋愛相談とバトルと乱入！〜（後書き）

どうでしたか？ けっこう紅鷹と鈴が仲良くなりましたね。

さて、大事なお話というのはですね。

実はネタバレしますがキーワードにもあるとおりヒロイン（紅鷹の恋人フラグ）はラウラにしようと思っていました。

しかし、この話を書いていて、だんだん鈴をヒロインに

したくもなってきたああ〜と悩み中なのです。

そこで皆さんにアンケートをとらせていただきたいのです。

感想が書ける人は感想の一言スペースに

鈴とラウラ、どっちに紅鷹との恋愛フラグを立てるべきかを

書き込んで欲しいのです。なお同数の場合はもういちど、

0の場合は作者の独断と偏見で決めさせてもらいます。

ぜひぜひよろしく願います！！！！

第11話 お仕置きと紅鷹と迫り来る睡魔！〜（前書き）

ども、作者です。

ラウラか鈴かの投票ありがとうございました！！

今の所三対一でラウラ×紅鷹ルートがリード！と感想を書いてくれた方

には返信しましたが今は三対一じゃありません。

今は三対三です。見事に互角ですね……

そのあなた！この物語を大きく変えることになるのは

あなたの一票かもしれません！！（キリッ）

はは・・・期間は明後日の十二時まで！長めに取らせてもらいます。

ユーザ限定になっていたので制限をなくしました。

なお、一人一票ですのであしからず……

そして、決まらなかった方はごめんなさい！

ほんとはどっちもやってみたいのですが

そこまでの技能は作者にはありません……

まあこの話はこんぐらいにして本編をどうぞ！！



第11話 お仕置きと紅鷹と迫り来る睡魔！

「うおらあああ！」「」

俺と鈴は一気に正体不明のIS目掛けて突撃する。っていつか鈴さんその掛け声は  
女の子としてどうなんですか……

俺達が相手をしているのは黒に近いグレーの異様に手足が長いISだった。しかも

首が無い。サワムラーみてーなやつだな……え？知らないの！？

(てっきりガンダム関係のだと思ってたんだが……こっちのISだ……)

なんとなくそう思う。なぜって？俺を飛ばす時のあの筋肉神の目だよ。

あれは明らかに『試練的なもんも用意しといたから』(笑)『って目だった……』

いつか何かやってくるんだろうが今回は違ったようだ。

「鈴、あれたぶん無人機だわ。フルボッコにしてやローゼ(黒笑)」

「あなた・・・めちやくちゃ怖いわよ・・・」そりゃね、あれのせいで織村先生の  
『楽しいO・H A・N A・S H I（処刑）』ですからね・・・許さん！！

かなり一方的かつ理不尽な切れ方だが全く気にしない紅鷹。

例のグレーがビームを放つ。が、俺にはそれがどこに来るか、どうすればいいかが  
もう分かっている。まるで導かれている感じだ。

（SEED割れても気持ち悪くなるだけだな・・・）怒りで不用意に切れた己を  
反省する。確かにただでさえクリアな視界はさらに磨きをかけられ、もはや相手の次の動作まで見える状態だったが自分の方が操られているような気がして  
なかなか気持ち悪かった。

「もう決めるぜ。覚悟しろメカ巨大サワムラーがああああ！！」  
皆にはもう気づかれていたがネーミングセンスが皆無の紅鷹であつた・・・

「うおおおおお！！『ヤタノカガミ』展開！！」バーミリオンに念を

送ると

バーミリオンのボディが神々しい金色に輝き始め、シールドが突如として『消えた』。

「とりゃあああ！」叫びながら『ラケルタ』二本で突撃する。

「ちょ！なにやってんのよあんたは！？」鈴がなんか言っているが気にしない。

敵はビームを大量に撃ってくるがバーミリオンに当たった瞬間全て反射し、

敵の腕のビーム砲口に全く変わらず吸い込まれ……。事は無かったがシールドに全弾ブチ当たり、敵のエネルギーを削り取る。

「はああああ！！」ちなみにただいま絶賛凸り中でございます！

敵機は高出力のスラスターを使い、離脱しようとするが俺の方が速い！

『ズシャッ！』と変な音が出てヤツのシールドが見事に溶断される。

俺はもうヤツが無人機だと分かっているので余ったもう一本の（さつき拾った）

『ラケルタ』で両腕を一瞬で同じく溶断、隙が出来たヤツを蹴ってバツク転で距離を取り、

逆さまのまま『アムフォルタス』を両脇にかまえてヤツの両足を鮮やかにブチ抜く!!

『ボツ!!』と音がしてヤツの両足は完全に溶けて無くなっていた。

もうヤツは完全に機能を停止している。

「はあ・・・はあ・・・やったぜえーい!!」ガッツポーズをする俺。

「あんたほんとに凄いわね・・・あたしなんもやってないわよ・・・」

「で、でもやったな(汗)!!」「え、ええ(大汗)!!」現実逃避を始める鈴と俺。

「.....」

と、『さあ〜て高峰と鳳、ピットに戻ってこおい?』(魔).....  
そこには

声からして激怒している織村大魔神の声が.....「い、い、.....」

「「いやあああああああ！！！！」

アリーナに二人分の絶叫が響き渡った。

ピンポーン……しばらくお待ちください……

しばらくお待ちくださった後

「い、生きてるぞ俺達……」「ええ。生きてるって素晴らしいわね……」

織村先生の説教（処刑）を何とか耐え抜いた後、俺達二人は

アリーナの休憩室でぶっ倒れていた……あの先生ほんとに容赦しないな！！

「なあ、鈴？」「な、何？……」「こうなった結論を鈴に言ってみる。

「今回ってさ、明らかに俺達が悪いよな……」

「誰がどう見てもそうね……」「傷は一つも付いてないが俺達は



精神面肉体面両面でズタボロだった。

「帰ろう……家に……」もはや何かを悟れた鈴と俺。  
何を悟ったって?……あの人には二度と逆らうまいと『悟った』  
のさ……

『決めた』ではなく『悟った』である。それほどに織村先生のO・  
H A・N A・S Iは

怖かった。何をされたかはもう言いたくない。言わせないでくれ!!

一夏達によれば織村先生は「あいつらにやらせてみてもいいだろう。」  
「と言いつつ

コーヒーに塩を入れ、山田先生に迫るといふなんてやねんな行動を取っていたらしいが

『やだっ!!』という俺達の声を聞いた瞬間カップの取っ手を  
『ベキイ!!』と握りつぶしたそうだ。しかも二本指である。( )  
ガクガクブルブル)

もう辺りは真っ暗だ。

「もう何もしたくない……」「寝よう……」「それぞれ同じようなことを呟きながら

『僕らのお家（寮）』へとほとほと歩を進める俺達だった……

（第三者サイドー学園地下にて）

このIS学園には地下空間が存在している。そこは地下50メートル、

レベル4権限を持つものしか入れない『裏』の空間であった。

そこで、現在所属不明のISの解析が行われている。……いや、  
『いた』。

さつきまで謎のISの戦闘映像をずっと険しい顔で見ていた千冬は  
現在、真耶から解析の結果を聞いている。その顔は『教師』ではな  
く『戦士』の顔に  
近かった。

「それで結果ですが、まあ高峰君が四肢を切断したのでお分かりだ  
と思いますか  
……無人機です。」

「やはりな。」

ISのまだ完成していない技術。遠隔操作と独立稼働。そのどちらかか両方が

『あのIS』に使われている。その事實は、すぐさま学園関係者全員に緘口令が

敷かれるほどのものだった。

「どのように動いていたかは不明です。高峰君は中枢を狙わずに止めを刺してくれたのですが中枢機能は溶け切っていました。どうやら機能停止と同時に中枢機関に濃硫酸が流れ出すようになっていたようです。」

「!・・・ふむ・・・相手も馬鹿ではないということか・・・」  
少し驚く千冬。

「それで、コアは?」「・・・それが・・・登録されていないコアでした・・・」

「やはりな・・・紅鷹のと同じような状況だな・・・」

その答えに真耶は怪訝そうにする

「心当たりがあるんですか?」

「いや、『今は』無い。」真耶の問いにそう答える千冬はまた戦闘映像を

険しい目で睨み続けた。

（寮にて）

「しぬ……まじで……しぬ……」部屋に入り、ベッドに転がる俺。

すぐに睡魔が襲ってくる。がしかし！ここで眠ってしまったら全てが台無しだ！！

「だから……そう……まどろむのならいいんだよ……はあ……」

まどろみは睡眠の一手手前だと分かってはいるが起きられない。だつてめっちゃ

気持ちいいもん！！分かる人いるよな！？

そんな風にうとうとしていると突如、一夏の部屋が騒がしくなった。その大声で俺は完全に覚醒してしまう。

「いいいいいいいあああ……!!」

俺は思いっきり叫び一夏の部屋に突撃する。

「あいつっ！俺の！黄金のまどろみを！！ゴールデンランバーをおおおお……!!」

あ、『ゴールデンランバー』は俺の名作映画ベスト3に入ってます！

最初こそずんずんと進軍していたがしだいに再び睡魔が襲撃、

『ズンズン！』から結局一夏の部屋の前に着くころには完全に『ヨロヨロ……』に

なっていた。竜頭蛇尾とはまさにこのことだ。

『バンバンバン……!!』と最後の力を振り絞ってドアを叩く。

「な、なんだ!？」一夏が焦って戸を開けてくる。「紅鷹!？」

「た、頼む。頼むから俺を寝かせるおおおおお……!!」「」「す、

スマン紅鷹!!」

「夏と筭が謝ってくる。ん?・・・」山田先生?なぜ・・・ここに  
い・・・」

「た、高峰君!?大丈夫ですか!?!」「ええ・・・どうしたんです  
か?」

「ああ、筭が別室に移動になった。」一夏さんが説明してきます・  
・

「そうか、ざんねんだったなほつき、いちかといっしょじゃいら  
れなくなつて」

「な、だ、黙れ!!」／／／／「ほつきがくびをしめてくる。」え、  
なんてつた?」

いちか・・・ほんとにおまえってやつは・・・

もはやろれつがうまくまわらないおれ・・・

「あ、もうむりだわ・・・いちかすまん・・・(ボタン!)」

「……紅……鷹!!」 「……高……峰……  
くん!!」

三人の声を同時に聞きながら俺は安らかな眠りへと落ちていくのだ  
った……

第11話 お仕置きと紅鷹と迫り来る睡魔！〜（後書き）

•  
どうでしたか？織村先生の OHANASI が気になりますね・

最初らへんにあったとおり紅鷹の前には神の用意した『試練』が  
立ちはだかることになる・・・と思います・・・

あ、後始めて評価がつかしました！メツチャ嬉しいです！！

付けてくれた人ありがとうございます！！

それに二回投票してくれた人もありがとうございます！

『愛』が伺えました！！

あ、あとこれは皆さんに言っておきますがこの投票で

選ばれなかった方は一夏ハーレムのメンバーになり紅鷹とは

恋愛フラグはたたない・・・と思います。ごめんなさい。

では次回もお楽しみに〜



第12話〜新たな転校生・・・をとこ!?〜（前書き）

どうもお久しぶり佐久紗です。

更新遅れました。申し訳ない。（――；）（――；）

ペコペコ

なんせ試験中なもんですので・・・月曜までです・・・（――；）

さてたくさん投票ありがとうございました!!  
肝心の投票結果は!!・・・

・・・鈴の勝利でした!!がしかし!!

なんと「シャルロットがいい」「シャルロットが無視できないほど多く来まして・・・で、やりなおしもめんどいので

「シャルロットがいい」「シャルロットでいい」という方はこっから数日の間でガンガン感想で一言伝えてください。  
ユーザ意外でもぜひよろしくお願いします。

今は鈴ルートで進める事にしていますが

要望の数が鈴の票を超えた所でシャルロットルートにします。

ほんとにお手数をかけてすいません・・・

あとこっから結構忙しくなりますので一日ごとの更新にならないと

きも

あるかもしれませんが。  
では本編をどうぞ。

第12話 新たな転校生・・・をとこ!??

「ん・・・ん?・・・」

目を覚ますとそこはまたしても真っ白の本の漂う空間・・・

・・・のはずも無くあるのは自室の天井だけだ。

「何があっただんだっけか・・・」・・・あ、そーか。一夏の部屋で  
睡魔に・・・

「山田先生すみません・・・」おそらく迷惑をかけたであろう山  
田先生に心の中で  
謝っておく。

時計を見てみると・・・「げ・・・三時半だ・・・」  
最悪なタイミングだ。しかももう目がさえて眠れない。

いつもは完璧な生活リズムが自慢な俺だが今日は完全にリズムが狂  
っている。

「ああーどーしよー（暇）。」「ベッドの上に寝そべりゴロゴロして  
みても

もうまどろむ事すら出来無い。

「暇だー暇だー暇だ暇だ暇だ暇だあーーー。」

と愚痴ってみても当然何も変わらない。ので適当に今日（昨日）あ  
ったことを

思い返してみた。

「なんかなー・・・あれでたぶんもうクラス代表戦中止だろーしな  
あー」

結局セシリアに絡まれたときから貧乏くじしか引いてねーよ俺・・・

「しかしなー・・・絶対ガンダムの機体が出てくると思っただよなー、  
どっかで。」

神のあの時のあの目を見れば誰でも気づくよ？

明らかに『ドッキリ仕掛けたけど顔に全部出てて気づかれた』って  
感じだったもん。

そこでふと思った。「俺なんでここにいるんだっけ」と。

「確か神に気に入られて・・・だったよな・・・」

はつきり言つとそんないい生き方した記憶は全く無い。『守るために生きてた』って  
聞こえは凄いいいけど俺の場合なんかんやで結局殴り合ってたからね？

でもその時らへんからなんとなく分かった。

「『守る』って、難しいんだよなあ。」そう、とても難しい。なぜなら

守るために何かを壊さなければならぬことがほとんどだからだ。喧嘩然り、昨日の乱入騒ぎ然り。結局何かを壊さなければ何も出来ない。

まるで某ガンダムシリーズに出てくるような考え方だが自分のしてきたことは  
突き詰めればそうなってしまう。

「なんだろう、この・・・なんか・・・寂しいというか・・・空しい  
というか・・・」  
上手く言い表せられないがそんな感じだ。お前は何をやってきたんだ、と

問いかけられれば『何かを守ってきた』と即答するが・・・

「具体的に何も無いな・・・『守って』きたものって・・・」

そう、見つからないのだ。あつたとすれば死に際のあの女の子か？  
・・・しかし

あの子の何を俺は守った？そこからまったく進めない。『女の子』を守った！

と言ってしまうえばそれまでだが・・・

「『守る』もんって案外あるようでないし、無いようであるんだよな。」

そこなのだ。守るものが明確にされて無い以上『守って』いるのか  
さえ怪しい。

俺は・・・

・・・俺の行動の裏にはなにがあるんだろう。なんのためにこんなことをしていた（いる）  
のだろう。命とまで引き換えて・・・

「うん。詰んだ。」

思考が完全にいき止まった俺はまた長い夜（朝？）を持って余しながら  
ベッドの上で（・・・）暇（な）感じで過ごすのだ  
った・・・

（数日後 S H R）

……あの日の朝から今日の今までガチで何も起きなかった。  
ただ起床 授業 昼食 授業 トレーニング 帰宅 就寝の流れだ。

「完全にマンネリ化してる……」朝の教室で一人ごちる。頼む  
からなんか起これよ。

知らないうちに一夏は『五反田 弾』のうちに行ったって言っ  
たし……

そっぴや箒が一夏に告ったっけ。大ニュースだがぶっちゃ俺には  
何の関係も無い。

箒をからかうのにもいい加減飽きたしな……退屈……

俺は暇なのが嫌いだ。というか俺でなくてもこんな均一な生活し  
てたら

やんなるよ？……でも今日はなんか女子達が騒がしい。……何？  
っと、山田先生が入ってきた。

「はいはい。では皆さん席についてください。SHRを始めま  
す。」

ガタガタとみんな自分の席に着いていく。

「今日はなんと！転入生の紹介があります！しかも二名です！！」

「ええええええツ！！！！」

「なにいい！（嬉）」俺も声を上げる。キタ（。。。）！ついに流れが変わったー！！

一刻も早くこのマンネリ状態をぶち殺してくれ！退屈死しそつだよ！！

でもなんで一組に二人？分散させるだろ普通。

そうこうしていると『失礼します。』教室のドアが開き転校生が入ってきた。

ふーん、前世じゃ一巻しか読んでないからもう分かんないな。

わお、すげえ美少年・・・少年！！？

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、

ですが、皆さん宜しくお願いします。」

転校生の一人・・・シャルル・デュノアはにこやかな笑みをたたえてそう告げ、一礼した。

クラスは全員黙ったままだ。いや、（俺も含めて）あっけに取られているのか。

「お、おとこ？・・・」誰かがそう呟く。



「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を  
「  
凄いな。人懐っこそうな顔、中性的な顔で髪はまじりっけの無い金  
髪。  
振る舞いもまさに『貴公子』という呼び名がぴったりくるような行  
儀のよさだ。

「きゃ……」「はい？」

「……きゃああああ……」「……つつるせっ……！衝撃波じみた声が  
広がる。

「男子！三人目の男子……」「うちのクラスに……」「美形！守って  
あげたくなるタイプの……！」

「……地球に生まれてよかった……」「……やれやれ。俺や  
第、一夏以外の女子らが  
めっさ盛り上がっている。みんな キタ 。 + ・ 〵 ） ノ  
+ 。 ツ ！ ！ ！ な  
顔をしている。……おいおいそのそいつなんか昇天しそうだぞ  
……

そして、「みなさんしずかにい……まだ自己紹介が終わってませんか

「らあ」

そう、そうなのだ。……だれあいつ!! 全くさっきから微動だにしないんだけど!?!  
あの人誰なの!? ねえ!!

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」ふーん……ってそんだけかい!?

「あ、あの、以上、ですか? 『以上だ』……そ、そうですか……」

なんと言う無慈悲な回答……山田先生がもろに困っている。スゲーおろおろしてんぞ……

『! 貴様が』 そんな中ラウラさんはつかつかと一夏のもとに歩いていき……  
……バシンッ!!

一夏の頬を思いっきり平手で殴った。え? え? こいつ今度は何やったの??

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど認めるものか。」  
教室中が再び啞然とする。織村先生関係だったのか……

「いきなり何しやがる!!」一夏が抗議の声を上げる。うん。もっともですね。

「ふん……」取り付く島も無い……そのまますたと去って  
いった……

そんな微妙な空気の中、俺はというと

「やった……やったぜ……これで退屈じゃなくなるぞ〜」  
（ニヤリ）」

こんな顔をしていた……

「あゝ……ゴホンゴホン！ではこれでHRを終わる。各人はすぐ  
に着替えて

第二グラウンドに集合。今日は二組と合同で模擬戦闘を行う。解散

！！」

一夏は相当腹を立てていたようだったがそれも致し方ないな……

こうして俺達の生活はまた騒がしくなるようだった。……ヤツタ  
ノ（、ー、）ノ



第12話〈新たな転校生・・・をとこ!?!〉 (後書き)

はい。シャルたちが転校してきました。

それと紅鷹はまだ悩んでいるようです。

・皆さんお気づきと思いますが絵文字を多用してみました。  
そのほうが書いて楽しいですからねー(・・)

ではまた。感想よろしくお願いします。いろいろ変えてすみませ  
ん。

第13話 合同訓練、前編（前書き）

おはこんばんちわ。佐久紗です。

はい。投票の件ですがシャルルルートに決まりました！

一瞬で大量の感想が……ころころ変えてほんとにすみません……

主人公の閉ざされた心を開くのはシャルル……否、シャルロットさんです！！

まあ感想は返信した後全て消していますので私のページの感想はいつも

0件なんですけどね。

……え？なぜ消すのかって？……それは私の性分なのです……

いつも私のメールのフォルダや『ゴミ箱』、ネットの視聴履歴などは常に0になっております。……つい癖でね……え、だって普通そうしませんか？そうしないとまあもやします……

まあ話はこの辺で……本編をどうぞ。ペース遅し……

第13話 合同訓練、前編

～授業前～

「俺は織村一夏。よろしくな。」「同じく高峰紅鷹だ。紅鷹って呼んでくれ。」

「うん、二人ともよろしく。シャルルって呼んでね。」

俺達は今更衣室に走りながら自己紹介的なことをしていた。

「いたぞー、出会え出会えーい！」

何故か迫りくる人の波から逃げながら。

「「やつべー!!」「来たあああああ!!めちゃくちゃ怖えええええええ!!」

戦慄する俺達に向けて次々と声が飛んでくる。

「織村君や高峰君の黒髪もいいけど金髪もいい!」「しかも瞳はエメラルド!」

「きゃあ！みてみて！高峰君と手繋いでる！」

「日本に生まれてよかった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外の物をあげるからね！」

現在俺はシャルルの手を握って走っていた。その間シャルルがずっと下を向いていたのが  
気になったが今はそれどころじゃねえ！  
そして最後。なんでやねん。親への感謝ぐらいちゃんとしなさい。

「な、なに？なんであんなにみんな騒いでるの??」

「そりゃこの学園に男子はお前込みで三人しかいないからな。そりゃ話題にもなるわ。」

でもこれは正直無いと思う。転んだやつを踏み越えてまで追っかけている。

『友の屍を超えて』みたいな感じだ。なに？俺らを討ちに来てんのこれ？

「はあ、まるでウーパールーパーみたいな扱いだ。どんなんかは知らんが。」

「一夏、ウーパールーパーってのはイモリ的な両生類で真っ白なヤツだ。かわいいぞ。」

まあどんな生き物もかわいいと思うけどね。

「うー・・・何??」 「二十世紀の珍獣だ。すっげえ流行ったらし



い。」

「おう、確かにあれは凄いブームだった。」

「え・・・ああそうか・・・お前は・・・」「?????」

そんなことを話しながら全速力で走り、なんとか校舎を出た。

更衣室に飛び込む。「やっべ！もうこんな時間だ！急ぐぞ一夏！！」

「ああ！」

と言いつつも実は俺は上半身のISスーツはもう着てきていた。

下半身は・・・動きづらいから着てない。上だけ着てきた訳は言いたくない。

「あつ！紅鷹コノヤロー裏切ったな！！」

「ふん、何のことだか（´・`）」「うわ！その顔うぜえ！！」

そんなことを言いながら下半身も着替えようとズボンに手をかけると

「こ、紅鷹！／＼／＼何してるの！」「え？シャルル??」

「何って・・・着替えようとしてるんだが？」

「あ、あつち向いて着替えてよ！！」「お、おう・・・すまん・・・

え？なんで??」

シャルルは頬を赤らめて気まずそうにあつちを向いた。

(何だこの態度……まるで女じゃねえか……女!?、まさか!!)

頭の中で『ピキーン』と音がした……様な気がした。

(えー、でもなあー大体どこに男のフリをする理由があるんだ?)  
とりあえず一つの仮説としておいておこう。

そしてなんとか着替え終え、ダツシュで外に出る。ひい!全員いるんじゃない!!

「遅い!! さつさと並べ!!」そして織村先生に怒鳴られる。

「す、スイマスイーン!! 『ベコン!!』……痛ー!!」

「なめているのか貴様は。」

「いえ、ちょっと舌が回らなかつただけです!」

ホントですって!! つーか『ベコン!!』て! 何で俺だけいっつも鈍い音!?

殴られた頭をさすっていると『バシーン!!』……あ、セシリアと鈴も殴られてる。

何であんなにいい音なんだろう。

しかし俺は今日の訓練をかなり楽しみにしていた。この手の実習授業は大好きだ。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦形式の訓練を始める。」  
「はい!」

「・・・嬉しそうだな高峰。」いえ?決してそんなことはありませんですわよ?

・・・明らかに浮かれていた。

人数もいつもの倍だ。なんせ合同だからな。

「くっつ・・・。。何かと言うとすぐにポンポンと人の頭を・・・」

「一夏のせい一夏のせい一夏のせい・・・」  
ちよつと待った。鈴にいつたい何があつたんだ!・・・あ!一夏を思い切り蹴った。

「ほんとに何があつた?・・・。」そんなことを呟いていると

「今日は戦闘を実演してもらつ。ちよつと活力が溢れんばかりの十代女子も

いることだしな。 鳳、オルコット、それに紅鷹。」  
お、お呼び出しか。

「な、なぜわたくしまで!?!」おおう・・・諦める。完全にとばっちりだ。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る。」

「だからといってどうしてわたくしが・・・」

「一夏のせいなのになんであたしが・・・」そういいなや。

「お前ら少しはやる気を出せ。・・・アイツにいい所を見せられるぞ?」

ほう、そうきましたか・・・

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコックの出番ですわね!」

「まあ実力を見せるいい機会よね!専用機持ちの!」

・・・懐柔はやつ!こいつらちよろいな。織村先生を見るとやつぱり『こいつらちよろいわ』みたいな顔をしている。・・・策士だ・・・

「それで、相手はどちらに?わたくしは鈴さんとも構いませんが。

「

「ふふん。こっちのセリフ。返り討ちよ！」

「じゃあ俺と・・・『やだ』『いやですわ』Oh・・・」

Orz こんなポーズで落ち込む俺。なんだよ。そんなに嫌なんかよ!!

( ) (だって勝てる気しないもん・・・) (二人の心中に紅鷹は気づかない。)

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は」 「ん？何か音が聞こえるぞ？あれか？つてあれ!？あれ!？

「ああああーっ!ど、どいてくださいっ!」

「え、俺!？」 「夏が声を上げ、白式をなんとか展開する。と、そこに

ISで山田先生が突っ込んできた。二人はゴロゴロと地面を転がっている。

・ つてか山田先生エ・・・ISの制御ぐらいちゃんとしよっ?・・・

そして一夏の状況は

立っていた ISが凸ってくる 巻き込まれる 先生の胸を揉む  
ということになっていた。何このカオス・・・

「あ、あのう・・・織村君・・・ひゃん!!」おーおー。うらやま  
けしからん。

『そ、そのですね・・・私と・・・』でもそんなことしてたらさあ・・・

「ハッ!?!」一夏がとっさに離れるとそこを青いレーザー光が貫いた。

「ホホホホ・・・残念です。外してしまいましたわ。」  
そう呟くセシリアのブルーティーズの周りに蒼炎が立ち上っている・・・こえ。

『ガシン』と何かを連結する音が聞こえる。あれ?・・・あ・・・  
鈴がああ清竜刀もどき  
(名前は知らん。)を繋げて思いっきり投擲した(汗)・・・つ  
てか・・・

・・・二人とも怖ええよ!目に艶が無い。ああ、どうせなら鉈持  
てよお前ら・・・  
狙いたがわず首を狙ってくる清竜刀もどき。ガチで殺りにきてます  
ね。はい。

ちなみに鈴のそれは投擲するとブーメランのように戻ってくる使用になっている。

あ、あれはかわせんわ・・・『ドンツドンツ!!』・・・お!

見ると山田先生が回転している清流刀もどきの両端を的確に狙撃していた。

へえ・・・すごい技術だな・・・

「山田先生はああ見えて代表候補生だったからな。あれぐらいの射撃は造作も無い。」

織村先生が固まっている皆に説明する。・・・ってかさらっとひどい事言ってますんか?

ああ見えてって何さ。ああ見えてって。

「む、昔のことですよ・・・それに代表候補止まりでしたし。」あ、戻った。

「さて小娘共いつまで呆けている。さっさと始めるぞ。」

「え・・・三対一ですか??」「いや。まずはオルコットと鈴の二人。その後紅鷹とだ。」

安心しろ。今のお前ら二人ならすぐ負ける。」

「なっ」

お、スイッチ入ったな。「手加減はしませんわ!」「さっきの本  
気じゃ無かったしね!」

さいですか・・・でも実際山田先生はすごい強いと思うぞ。  
二人と一人は一気に飛翔し上空の同じ高度に並ぶ。

「い、いきます!」お、山田先生も目が変わった。

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい、デュノア、山田  
先生の使っているIS  
の解説を見せて見せる。」

「あつはい。山田先生が使用されているISはデュノア社製『ラフ  
アール・リヴァイブ』」

です。第二世代開発最後期の期待ですが、そのスペックは・・・  
シャルルが解説しているが俺は全く聞いていない。期待の動きとか  
武装をみれば  
大体スペックはつかめる。

「そうだよな?なあ、バーミリオン?・・・バーミリオン??」  
あれ?どした?

(・・・呼んでくれなかった。)

。「おい!拗ねんなって!」ああ・・・明らかにこれは『拗ねている』  
。しばらく呼び出してなかったからな。

「なあ。機嫌直してくれよ・・・これからは出来るだけ毎日呼ぶか  
らさあ。」



(・・・・・・・・・・本当か?)

「おう、ほんとだ。」(・・・・・・・・・・了解。)

最近俺は完全に近い形でバーミリオンと意思疎通が図れるようになっていた。いつつとも一緒にいたからか?

『ズドオオオオン!』!・・・・・・・・・・あ、終わったのか。・・・・・・・・・・すげえ。全く傷ついてねえぞ  
先生・・・・・・・・・・

「次!紅鷹だ。行け。・・・・・・・・・・もう着いてたのか・・・・・・・・・・」織村先生が俺のいたところを  
向いた時にはもう翠色の粒子が漂っているだけだった。

「!!!!」そこでシャルルが驚き、何かを隠して書いていたのに誰も気づかなかった。

そしてラウラは無表情で紅鷹を睨んでいた・・・・・・・・・・

「さて、と。行きますよ先生。」山田先生に向かって言い放つ。

「こ、こちらこそ!行きます!!!」山田先生も負けじと言い返す。

二人とも同時に動き出した。俺と先生は一気にお互いの距離を取る。

俺と先生とのガチバトルが幕を開けた……

くしばらくして

「……紅鷹もよく持つな。山田先生の射撃の腕も相当なものだが……」

織村先生がそんな声を呟く。そんな俺達はというと……

「フツ!!」「せえい!」同時に射撃をかます。当たらなかつたがしかし!

「オロチ!行け!!」おれは『シリコンバーン・オロチ』を自身のまん前に  
二機とも展開、そこから射撃を始める。

「くつ!」山田先生が声を上げる。『オロチ』一機で作り出せる弾幕は8発。

威力も分散してしまうデメリットもあるがかなり避けづらいのだ。現に山田先生にも二発当たったしな……それに……

「こいつには……こんな使い方もあるんだよねえ!!」そう叫び、

前面に並べておいた『オロチ』のもう片方を一枚目のに重ねるように配置、

二枚重ねの状態で「そこだあ!!」と一発『ルプス』を放つ。

さつき俺は『オロチ一機で出来る弾幕は8発』といった。

しかし、二機でならどうだ。出来る弾幕は単純計算8×8で64発に跳ね上がる。

「きゃっ!」64発ほとんどのビームが山田先生に直撃する。

そして俺がこれを使った真の目的は・・・そう、『目くらまし』だ。細いビームを至近距離で64発も食らえば一瞬こっちの姿は見えなくなる。

それこそが狙い目なのだ。

218

「なっ!?!」山田先生が驚愕の声を上げる。ビームの嵐が晴れた時、俺は

山田先生の視界から消えていた。一瞬戸惑う先生。それが決定的な隙になる!

俺はもう既に先生の真上を取り、『アムフォルタス』の片方を構えている。

そして出力を抑えて真上からビームを浴びせる!!

『ドシューウウン!!』『きゃああっ!!』『真上からもろに凶太いビーム照射を食らい、』

一気に山田先生のシールドエネルギーは0になった。落ちていく山田先生。

・・・落ちていく!? やばっ!

「やべええええ!!」急降下し山田先生を肩に担いで地面に降りた。そこでは・・・

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

つてえええ!?!何この沈黙!視線が痛いんですけど!?!ちよっ!やめ!見んなつて!!

「」「」「こ、紅鷹さか・・・」「」「」一夏ハーレムが固まっている。なに?なんなのさ!?

「・・・まさか本当に勝ってしまうとはな・・・その機体性能にお前の技量・・・絶対に他国に漏らさんようにせんとな・・・」。

ああ、そうゆうことですか・・・」「・・・負けちゃいました・・・(涙)」

隣で山田先生がorzなポーズで落ち込んでいる・・・

「ま、まあそうゆう時もありますって！  
現に俺のワールドエネルギーも18しか残ってませんから！！」  
事実である。なんで『アムフォルタス』はこんなにエネルギー食うんだよ……

(ま、まあやったなバーミリオン！先生に勝てたぜ？)(……  
……)  
あ、やっぱり嬉しいみたいだな。

「紅鷹って凄いなだね」 「お、ありがとうシャルル。」  
シャルルに言われると何か嬉しい。

しかし、このときの俺はシャルルがノートのような何かを隠し持っていることに  
全く気づかなかった。

「さ、さて……これで諸君にも教師の実力は分かっただろう……  
紅鷹のは無しで。」  
「さいですか。」

「さて、専用機持ちは高峰、織村、オルコット、デユノア、ボーデ  
ヴィツヒ、鳳だな。」  
各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれる。  
」

織村先生が手を叩いて（山田先生を含む）皆の気持ちを切り替える。  
・・・と、

「」「」「高峰君！！よろしくね！！」」「」「何だこの数は！」  
明らかに比率がおかしいぞ！？一夏やシャルルさえ差し置いて俺の  
所に  
圧倒的な数の女子が詰め寄ってきた。・・・先生っ！！

織村先生にアイコンタクトで救援を要請する。

「この馬鹿者共が・・・。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！  
順番はさっき言った通り。次もたつくようなら今日はISを背負っ  
てグラウンド  
百周させるからな！」

・・・できるやついるんだろーか・・・はっ！ISを使ってだな？  
うん、きつとそうに違いない（汗）・・・おお！お前ら速いな！な  
んと言っ迅速な行動！！

「初めからそうしろ、馬鹿者共が。」溜息をつく織村先生。全くで  
す。

「やったあ。織村君だあ 苗字のおかげねっ・・・。」

「うー・・・セシリアかあ・・・さっきボロ負けしてたしなあ・・・」  
「鳳さんよろしく！後で織村君のお話聞かせてよ！！・・・」  
「デユノア君！分からない事があったらなんでも聞いてね！ちなみに私はフリー・・・」

「きゃーやったあ！！高峰君だ　！ISの操縦チヨー上手いし！！カッコいいし！！」

さいごのかたあざっす　後四番目のは立場が逆だと俺は思います・・・

「ええと、いいですかーみなさん！これから訓練機を一斑一体とりにきてくださーい！！」

『打鉄』と『リヴァイブ』があります。早い者勝ちですからね」

おお・・・山田先生がすっかりして・・・ない！？

見るとすっかりしていたのは声だけで明らかに落ち込んでいる。そこまでされると俺も罪悪感が・・・

「さあて。まあ俺もやりますか・・・『打鉄』でいいや・・・」  
『打鉄』のカートを  
運び、実習の準備をする。

しかしなー・・・訓練機ってなんかやりにくいよなあ・・・一回

乗ってみただけ

あれはちよつときこちなさ過ぎて素人には逆に違和感あるよーな  
・  
・

．．．．．！そうだ！いい考えがある！！

俺達の實習はまだまだ続く．．．



第13話 合同訓練、前編（後書き）

・・・はい。まだ訓練は終わってません・・・  
長・・・

そして原作と違う所が、シャルルさんがバーミリオンの情報を盗もうとしています。実際に・・・さて、そこんとこ  
どうなっていくんでしょうか。ではでは～～～

第14話〈合同訓練、後編〉（前書き）

ども、作者です。

試験終わりました！！

今回はどちらかといえばバーミリオン主体です。

バーミリオンの秘密がだいぶ明らかに！ではどうぞ。

第14話 合同訓練、後編

・・・そうだ！いい考えがある！！

(なあバーミリオン。)(・・・何)

(訓練機ってさ、何か重くて逆にやりづらんだよ。

お前さ。皆を乗せて『教えて』やれないか？武装とかはロックして  
)

(・・・(分かった)・・・)ありや？なぜ残念そうにする??

声が少し沈んだぞ。

(まあ操作するのは半分俺のアシストだけだな)(・・・分かった)

・・・なぜに??

そう、俺とバーミリオンにしか出来ないこと。それは

「そのスペックのまま他人を乗せられる」ことだ。もっとも俺が許さない限りできないが。

ちなみに俺が遠くからでも意志を送れば戻ってくる。

ってかバーミリオンって何者だろ?『意志』を持つてるとしか思え

ないんだが……

『独立稼働』とか『遠隔操作』ってヤツなんだろうか？ちょっと違うな……

以心伝心？……そういうことにしておこう。

(しかし……改めて見たらバーミリオンって超チートだよな……)

こんなことまでやれるなんてな。

「高峰君？どうかしたの？」「呼びかけられたので」「いや、なんでもない」と答え、講習(？)を始める。

「さて。ここにいるので全員かな？じゃあ一番からだな。一番って誰？？」

「はいはいはーいっ！！」「おい、何でそんなに元気？

「出席番号一番！相川清香！ハンドボール部！趣味はスポーツ観戦とジョギングだよ！」

！……なして自己紹介！？そしてテンションがやけに高い……

「よろしくお願います！！」「手を差し出してくる相川さん。

でも礼儀として無視はよくないので「おう。よろしく。」と手を握り返す俺。

「きゃー！やったあ」「むっちゃ喜んでんな。まあ男子はここでは

人気者だからな。

「ああっ！ずるい！！」「私も！！」「第一印象から決めてました  
！」

「「「よろしくお願いします！！」「「「そういつて全員俺に手を差  
し出し頭を下げてきた。  
ああもう！めんどくせっ！！」

みれば一夏とかの男子は全員おんなじ状況に見舞われていた。

「分かった。自分の順番に一人ずつな。……さて、相川さん。  
君はラッキーだったな。俺の考えた講習法の生徒（？）第一号だ。」

「???・・・訓練機を動かすんじゃないの??」

「最終的にはそうだが訓練機は思ったよりぎこちないから難しい。  
と、思う。」

「・・・そう思うよな?そこで、だ。まず慣れる事が大事だから・・・  
」

そういつて俺は『歩ける』だけのバーミリオンを展開する。でもっ  
て・・・

バーミリオンを跪かせ、『降りる』。

「えっ！どういうこと！？そんな・・・専用機は・・・」

「聞くな。めんどくさい。・・・さて。このグループは講師は俺とバーミリオンだ。」

ISに慣れるためにまずバーミリオンに教えてもらえ。」

「ええええ！？・・・チョーラッキー！！」

まさか高峰君のISに乗せてもらえるなんて！しかも最初に！！」  
マズイ。相川さんが昇天しそうだ・・・。

「良いか皆。こっからはぜったいに俺に話しかけるな！良いか？絶対だぞー！！」

「っわ、分かりました・・・」「っ」少きつめに言ったので驚く皆。

（さて。バーミリオン、始めようぜ『<sup>リンク</sup>一体化』だ。っっっっても意識だけだ。

体まで一体化したら怖すぎる。

（・・・）・・・そしてなぜお前はそんな嬉しそうなんだ・・・

「・・・」

俺は雑音やら雑念をとっ払い、バーミリオンに意識を集中した。とにかくした。

集中しまくった。すると……

バーミリオンがひとりで膝を上げ、立ち上がった。胸部装甲とかは『浮いた』状態だ。

そして「きゃあ！勝手に動いた!？」と啞然としていた相川さんを幼児によくやる

『高い高い』のように持ち上げ、自分の操縦者のあるべき所……つまり自分の

『中』に入れる。すると相川さんとバーミリオンが擬似的にフィッシュ、

相川さんの頭の中に俺の声が直接響く。

( ) おっす。じゃあ始めるぜ。歩いてみる。( )

「た、高峰君!？」といいつつもおずおずと歩いてみる相川さん。……すると……

「す、すごい！自分の体みたい!!」俺とバーミリオンのアシストもあり、

相川さんの歩きは極限まで滑らかになっていた。既存の専用機でも少ない滑らかさだ。

まさに『人間』の動きだ。

(今は歩くことしか設定してない。飛ぶのとかは駄目だぞ。)

「う、うん！十分だよー！！」緊張しまくっている相川さん。

(さて。だいぶ慣れたな。今日はここまで！)「うん！」

そういつて俺はバーミリオンを跪かせ、『リンク』をとく。

「っ……ふう……結構疲れんな……」俺は何もしてないのに汗をかいていた。

「でもってだ。相川さんバーミリオンに慣れたら次は打鉄でやるよ  
うに。」

バーミリオンほど性能は良くないがさつき慣れたから少しは上手くなってると思うぞ？」

「う、うん！ありがとう！！」キラキラした笑顔を浮かべて『打鉄』のところに

駆けていった。……やべえ……俺教師の才能あるかも……

「」「高峰君！」「」「のわっ！……あーはいはい……



次！二番！！」

その遠くで織村先生と・ラウラ・シャルル……っつーか皆が唾然とした

様子で紅鷹のチームを凝視していたのだった。

↳ 『リンク』直後↳

俺はバーミリオンと『リンク』し、バーミリオンの内部にいた。  
内部は

だだっ広い空間で完全に薄い朱色で染まっている。

「……初めての試みだったけど上手く行ったな。」

そんなことを呟いていると……「あの……」……

ん？声をかけられて振り向くとそこには……

………そこには、『女性』がいた。

『女性』としか言いようが無い。薄い朱色のロングヘアで女性らしい体つき。

決してエロいとかでは無く………なんっーか………言いようが無

い。  
慈愛に満ち溢れた、優しい顔をしている。

「……一文字で表すと……『霧』だろうか。そんなはかなげな  
感じも

持ち合わせている。」

「あなたがバーミリオンか？……なんつーか……機体とか  
武装とかと

ぜんぜんイメージ違う……。」

「そうですね……」とどこと無く残念そうな表情をする。  
そしてバーミリオンは次の瞬間、聞き捨てならない言葉を紡いだ。

「しかし、私のこの外見は……あなたの心の底にある感情も関  
与しているのですよ？」

「……え??」「え??」

「貴方は私の……パートナーですからノノ貴方の感情など手に取  
るように分かります。」

貴方は心の底で私の外見のように切ない、寂しい、何をすれば良い  
のか分からない、  
といった感情を抱いているようですね。」

初め少し恥ずかしかがって顔を伏せ、しかし最後ははつきりと言った  
バーミリオン。

思いっきり動揺した自分がいた。

俺の気持ちはバーミリオンには分かったのか……自分でもよく分かってないのに。

「でもさっ！いつつも機体の時では思いっきりタメだし口調違っし……」

「ふふっ……それも貴方の感情なのですよ？貴方はなかなか好戦的なようですね？」

楽しそうに笑うバーミリオン。……そうか……あの声は俺の心境そのものだっただ……

そしてふと思ったことを聞いてみる。

「だったらお前……バーミリオンはさ……なんなんだ？誰なんだ？？」

「私は『バーミリオン』です。貴方の専用機です。それ以外に例えられません。

私は貴方であり貴方は私なのです。

………違いますよ！そういう意味ではありませんからね！

? / / /

パートナー的なほうの意味ですよ!？」

得意げに言ってから結構恥ずかしいセリフだったと気づき、赤くなるバーミリオンの。

なんか・・・普通に可愛かった・・・

「そういえば・・・なぜに女性??」

「ISは基本女性にしか使えませんからね。それに貴方の心のよりどころも

一人の女性と私のようですし・・・ / / /」

・・・母さんだ。そうか、俺は今でも母さんに頼ってんのか・・・

本人はもういないというのに。情けない限りだ・・・

「バーミリオンは頷けるな。ここに来た時から一緒だったからずっと頼りにしてる

『パートナー』だし。」

「あ、ありがとうございます・・・ / / /」うつむくバーミリオン。

そんなに嬉しかったか?そーかそーか。

「さて・・・そろそろ相川さんのサポートをしないと・・・」

「はい。」

「あ、あと!」「なんですか?」「これだけは言っておこう。」

「バーミリオン、これからもよろしくな。頼りにさせてもらっぜ!」「はいっ!」

そして俺達は二人で相川さんや他の全員のサポートを全力でこなすのだった。

第14話〈合同訓練、後編〉（後書き）

バーミリオンがどんどんチートになっていく……

あとバーミリオンは紅鷹に恋愛感情を抱いているわけではありません。  
ん。

紅鷹自身と言う一面もありましたしね。

……が、まあほとんど似たようなもんです。

「パートナー」としては大好きなんです。

「好き」ではなく「頼りたい、頼って欲しい。いつも一緒」

……もう恋愛感情ですねこれは……

……訂正します……紅鷹のことが好きなようです……

ではまた。

## 第15話「昼休みのひととき」(前書き)

ども、いつものよーに作者です。

今回は昼休み、屋上での昼食ですね。

つてか更新遅れました(´・`・)(´・`・)(´・`・)ペコペコ  
・・・なんせ・・・

一回四千字まで書き終えてからふと

「あれ？CTRL+Aってなんだっけ？」ってなってやってみた後に

そのままなぜかスペースキーを・・・

なぜ一回保存してなかったんだ俺！！！！いつもやってんのに！！！！

となって心が折れかけたわけです・・・

まあそんな二倍分(?)の努力が詰まった本編をどうぞ(´・`・)

## 第15話 昼休みのひととき

～授業後～

では今日の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備をするので、各人

格納庫前に班別で集合すること、以上!!」

俺達は何とか時間いっぱいまで起動テストを終え、格納庫に訓練機を戻し、

(俺はこっそりバーミリオンを使った。ばれなきゃいいんだよ  
(。ー^))

まあ時間もマジでギリギリだったのでいいとしたい。

でもって全力疾走でまたグラウンドに集合していた。

起動テストで、俺の班が圧倒的に高得点だったのが何気に嬉しい。

でもって集合した俺達に連絡事項を手短に告げて先生達はさっさと引き上げていきやがった。・・・ひど過ぎね??

「ったく・・・まあいいや。おーいー夏、シャルル～着替えに行こーぜ～」





余談だが昼休みの間に作って昼休みの間に食べる弁当は弁当と呼べ  
えるのだろうか。

「くく……つと、出来ましたつと！」

十分足らずで弁当箱に全てのおかずが詰め込まれる。

料理なんて一気に二つ三品作れるほどの腕前があればあつという間  
に終了だ。

「じゃあ行きますか。」弁当箱に蓋をし、一夏達（箒は二人きりを  
想定していたようだったが）の待つ屋上へと急ぐのだった。

そして階段を駆け上がり、屋上のドアを開けると……やっぱり  
か……

そこには期待が外れて不機嫌そうな箒と鈴とセシリア、そして居心  
地が悪そうな

シャルルがいた。なんだ、全員いるじゃん。

そして「」「……」「」「……箒たちの視線が  
痛い……

明らかに『何で邪魔しに来るんだ』といった目だ……。

「ま、まあせつかく来たんだから俺もここで食わせてくれよ。」

「まあいいが……」箒さん、言ってることと表情が全く違います  
けど……

「よつと。」屋上に座り、弁当をあける。

「あれ？紅鷹今日は弁当は無いって言って無かったか？」「一夏が尋ねてくる。

「おう、だから帰って作ってきた。」

「えっ」「なんだと!？」「ほんとに!？」皆が驚いている。

まあ授業が終わったのが二十分前だかな・・・そりゃそうだね。

「はい一夏、あんたの分。」

「鈴は酢豚か、腕上げたな？酢豚・・・酢豚ねえ(ニヤツ)」

「な、何よその顔は!!」「いや別に。」俺はまだ時々鈴に料理を教えている。

腕が上がってるのもそのせいかな?・・・て、

「鳳さん、紅鷹さんに教えてもらっておりますの?・・・」

「・・・」

余計に(二人の)恨みを買ってしまった。篝さん目力パネエっす・・・

「セシリアのは・・・おお!すごい美味しそうな見た目だな!」

てつきりお嬢様っばいから料理とか壊滅的だと思ったんだが・・・

「ほんとに美味しそうだな、一個くれよ。」

「ふふん、そうでしょうとも。いいですわよ。」

セシリアからBLTサンドを受け取る。

「……………」

ん？何か一夏が『こいつ地雷踏んだわ(笑)』みたいな視線を向けてくる。

まいーや、いただきます。

「はむ…………(ドゴンツ!!)…………!!…………うん。美味いんじゃないか?」

んな訳あるか!!前言撤回!!やっぱり壊滅的だった…………これもう

『殺傷力』じゃね?…………まさしく『地雷』だわこれ…………

「ふふ、当然ですわ!」…………。

「時にさ、お前レシピ見てる?」「はい、レシピの写真を見て作っており……………」

原因判明。コノモンダイノカイケツニゼンリヨクヲツクス。

じゃないといろいろと危険が…………

「だったらさ、材料とか分量とかもレシピを見て作ってみろよ。そ

―すれば

―夏ももつと喜ぶ味になると思っぞ。」

「!!!・・・分かりましたわ!」

誘導に成功。嘘はついてません。ほら、一夏が既に感謝の視線を向けてくる。

「・・・・・・・・ええと・・・ほんとに僕が同席してよかったのかな?」

シャルルが呟いている。皆には聞こえなかったようだ。ってかシャルル、

遠慮ばっかしてたらこの先持たねーぞ。特にこいつら相手だと・・・

「何言つてんだよシャルル。男同士だろ(だよな?そっだよな?)仲良くしてこーぜ。」

何か分かんないことがあつたら遠慮なく聞いてくれよな。」

「ありがとう、紅鷹って優しいね。」「ッ・・・・・・・・!!」

突然無防備な笑顔を向けられてついドキッとしてしまった。

「紅鷹、何照れてんのよ。」

「照れてねーし!!」 スンマセン!照れてました!モロに!!!

「ま、まあ部屋割りも一夏か俺のどっちかだろーしな。」とりあえず場を取り繕う。

「さっきから端が進んで無いぞ。喋っても無いし。」

「どうしたんだ筈？」別にもどうもしてない。「??」

「ところで筈、そろそろ俺の分の弁当をくると嬉しいんだが……」

「……無言で自分の弁当を差し出す筈。何か気まずい……」

でもってシャルルは思いつきり困っている。残念だが俺にもこの空気を打開する策は見つからない。

そんな中、一夏は筈の作った空揚げを口に入れ……

「んぐんぐ……おお、美味しい!!」

「そうかそうか！ならよかった！」笑顔になる筈。食べてくれる人に『美味しい』って言うてもらえるのが確かに一番だよな……

「ふんふん……（筈さ、これメツチャ失敗作作ってやっと出来たやつだろ?）」

よかったな、喜んでもらえて。（ニヤニヤ）「筈に囁いてみると……」



な……

一夏はフラグの乱立をもうちょっと自重するべきだな……

そんなことを思っていると

「な、何を言う紅鷹！」 「何言ってるのよあんた!!」……  
あれ??

「ひょっとして俺口に出してた??」

「はい……バツチリ聞こえてましたわ……」マジでか……

自重すべきはこっちでした!てへ

「ん?紅鷹、フラグがなんだって?」……お前はまた聞いてな  
かったのかよ!もう!!

「一夏ヴァカツ!もうこのヴァカ!!逆になんで『フラグ』だけ聞  
き取れてるんだよ!!」

「ちょ、紅鷹?どうしたんだよ??」

「気づけよオオオおお!!!!!!」めんどくせーよこいつー  
!!!!

見れば女子陣も各自頷いている。ほら!!



「そうだな、一夏は馬鹿だな。」 「馬鹿ね。」 「馬鹿ですわね。」

「お馬鹿さんだね。」

「馬鹿だな。と言っかもうヴァカだな。」

「……ひでえ!!!……もういーよ馬鹿で……」

こうして昼休みをワイワイと騒がしく過ごす俺達だった。

第15話〈昼休みのひととき〉（後書き）

はい、ここからはヒロインがシャルロットになっていきます。

紅鷹のルームメイトがシャルロットになると思われます。

ではまた。次回もお楽しみに〜（・）（・）ノ

第16話〱ルームメイトは秘密の貴公子(ジェントル)〱(前書き)

どもども〱佐久紗っす！

今回から少しづつシナリオが変わっていきます。

あ、今回は少し短めで

第16話　～ルームメイトは秘密の貴公子（ジェントル）～

～自室～

「じゃ、改めてよろしくな！」

「うん。よろしくね紅鷹。」

シャルルはどうやら俺の部屋に決まったようだ。一夏の部屋だと思っ  
ていたんだが。

今俺達は夕食を済ませ、部屋でくつろいでいた。例によって迫りく  
る女子達から逃げながら。

現在午後九時、もうだんだん眠くなってきた・・・

「そうだな・・・シャワーは俺が先に遣ってもいい？」

「うん、僕はある汗をかかないほうだからシャワーは後でもい  
いよ？」

「スマン。」ちなみに俺は眠くなれば食事中だろうが入浴中である  
うが

余裕で爆睡出来る人だ。

と、そこで机の上においてあったシャルルのノートが目に入った。

「ん？何だこのノート??」 俺が中身を見ようとすると……

「あつ！それはやめて!!」 シャルルがすごい速さでそのノートを俺から奪い取った。

日記でも書いていたんだろーか……まあ誰にでも秘密ぐらいはあるか。

「す、スマン。」 「うん、いいよ……でも絶対見ないでね。」  
「分かった。」

ああああ気になるううううー!!

「そ、そういえばさ!!紅鷹って放課後は毎日ISの特訓をしてるんだって?」

「おう。ほぼ毎日やってるぞ。」

「……だからあんなに強いんだね。」 「あざっす。」

「専用機……名前はバーミリオンって言うんだって?」

「『ヴァーミリオン・コメント』だ。」 「へえ。どんな機体なの?」

「意志を持つてる。」 「何とはなしにそう言った。言ってしまった。事実だし。」

「ほ、ほんとに!!!?それってすごいよ!革新的だよ!!」『独立稼動』もやっつてたし!!」

「あれは『独立稼動』じゃないぞ。あのときはおれの『意識』はバ―ミリオンの中にあつたからな。」

「へえ!でさでさあれ動力は!?武装は!?どれをとつても普通じゃないよね!!」

「お、おう……」

なにこの食いつき具合……こわ。

「武装は主にビーム兵器だ。動力は『太陽炉（GNドライブ）』って言うんだが……これは絶対言えない。ほんとは今までに話したことは全部国家機密だけだな。」

「そ、そうなんだ……」　そういうシャルルの顔はなんだか悲しそうだった。

どうしたんだろ???

「ね、ねえ……次からは僕も訓練に参加させてくれないかな。」

「いいけど……。」　「なんでそんなに凹んでんの??まあ深く言

及するものな……

……ねむ……

「ふわあ……もう眠くなってきた……寝よう。いや、寝る）  
断定）。

おやすm……（zzz……）「

全部言い切れずに俺の意識は落ちた。

「は、速いね……おやすみ……。」「シャルルはフツと笑みを浮かべ……

「紅鷹……ごめんね……でも」

そついい、シャルルはノートを開いた。

それは……シャルルの日記だった。

しかし……

「月 日 ISを操縦可能な『高峰紅鷹』との接触により  
機密機体

『ヴァーミリオン・コメット』の情報を入手。そのスペックは  
おそらく現存する全てのISをはるかに凌駕するものであり、日本

は現在軍事力に

おいては最強の戦力を所持していると思われる。また、

『わがデュノア社が開発中の独立稼働』も完全に可能であり、兵器類も目を疑うようなスペックである。このまま自分はレポートを書き。毎日提出する。。。。。。。

。。。。。。。。内容はとんでもない日記だった。。。。。。。。

シャルルはそのページを切り取り、封筒に入れ、切手を貼り、

「ごめんね。。。紅鷹。。。。」と、もう一度紅鷹の方をすまなさそうに見たのだった。

「zzzz。。。。。。。」安らかな顔で眠る紅鷹はこのことに気づく由も無い。。。。。。。。



第16話　ルームメイトは秘密の貴公子（ジェントル）（後書き）

はい。

原作と違い、

シャルルはデュノア社からの命令で実際にバーミリオンの秘密

を着々と盗んでっていることになってます。紅鷹エ……気づくんだ！

国家機密……というか政府にも知られていないことが

他国に漏れる……これからの混乱とバトルをおたのしみに！！

まあ次はV S ラウラらへんかなあ？……

第17話〈アリーナでの衝突〉（前書き）

どもども、佐久紗っす！

今回はアリーナでのVSラウラです……  
しかし戦闘シーンは一切ありません……「くらー！」「えーーー」とか  
言わない……！  
では本編をどうぞ

## 第17話　アリーナでの衝突

「アリーナ」

今日は土曜なので午後は放課だ。しかしアリーナが全面開放されるのでほとんどの生徒はアリーナで実習を行う。俺とシャルルもそんな中にいた。ちなみに今模擬戦を終えたところだ。

「はあー。バーミリオンもすごいけど紅鷹の技量もすごいねー。……手も足も出なかったよ……シャルルが感心したように呟いてきた。」

「はは、そりゃどーも。しかしシャルルの『リヴァイブ』って武装たくさんあるんだな。」

十五……二十ぐらいあったんじゃないだろうか。

「うん、拡張領域をいじくってあるからね。紅鷹のは？」

「バーミリオンの拡張領域は……十ぐらいだったっけな……うん。十分じゃねーか」

「そうだね。『白式』なんて拡張領域無いもんね。」確かに……

「ま、でも白式は一撃必殺使用だからいいだろ。」 「そだね。」  
そんなことを話していると……

「一夏！あんたってほんとに馬鹿ね！！」

「なんでこの私の説明が理解できないのです！」

「こんなに親切に教えてやっていると言つのに！！」  
ぐちぐち言っている筈たちと

「………だつてさあ………」 どこか不満そうな一夏の声が耳に入った。

うん。あれは完全に説明が悪いと思うよ？誰が分かるかあんなもん！

「おう一夏。」 「面白そうだったのでシャルルと一緒に一夏のところに行ってみる。」

「……紅鷹、シャルル！！ちょっといろいろと教えてくれよ！こいつらの説明じゃ分かんなくつてよ………」

「……おい、そういう事はストレートに、しかも本人達の前で言うことじゃありません。」

「」「なっ！！」「……ほらね？まためんどくさい………」

「何よ！せっかく教えてあげてるのに!!！」

「もう知りませんわ!!！」

「一人でやってる!!！」

三人はそんな捨て台詞を吐いてアリーナから出て行ってしまった。

しょうがないので二人で一夏に基本操縦を教えることにした。

「一夏は剣しか使えねーんだよな……ん……ちよつと待てよ？」

なあシャルル。俺達の武器を一回使わせてやったらどうだ？

訓練はまず広く浅くってなんか参考書に書いてあったよーな気がせんことも無いことも無いことも無いこと無いんだが？」

シャルルに聞いてみる。

「……それ結局書いて無かったってことだよ……でもそれは正論だと思う。」

あれ……そうだけ……??

「と、言っわけで一夏。まずシャルルの銃でも貸してもらえ。」

「ええ！いいのか!?でも……」

「アンロック使用許諾すればいいだろ。シャルル、貸してやれよ。」

後ついでに俺教えるの下手だから（めんどいから）教えてやってくれよ。」

「聞こえた！いや聴こえた！心の声が聴こえたぞ今！！」なんだと  
う！？」

「やはり兄弟だということか・・・」

「まあそーゆー訳で頼んだわ。」 てきとーに言うておく。

「否定すらしねえ！！」突っ込み上手いな一夏・・・

「・・・分かったよ。じゃあ一夏、僕が教えるね・・・」

「・・・おう・・・」

こうしてなんだか分からない空気（元凶オレーww）のまま

一夏の基礎訓練が始まった。

~~~~~

「それでね・・・もつと脇を締めて・・・そうそうそんな感じ・・・」

な　ん　と　い　う　こ　と　で

あの、あの一夏君の射撃の技術が見る見るうちに上がっていくではありませんか！

流石は知識の匠、デュノアです。自身の柔軟な頭とその優しさで

『織村君の頭』と言う最難関項目を華麗にクリアしました。 . . . \*

。 \* : : 。 三

これぞ匠のわざ . . . . .

「 . . . . . なんか馬鹿にしてないか？ . . . . . 」 . . . . . ギクツ。

「 し、してたいって！ ! ! ! 」

「 そうか。それなら . . . . . って『してたい』 ! ? やっぱしてたんじゃないかねーか ! ! ! 」

. . . . . ギクギクツ。

「 や、冗談だって。でもほんとに上手くなったぞ？ 」

「 そうか ! サンキュー ! ! ! 」 「 いや。 」

「礼ならシャルルに言えつてーの。俺は何もして無いからさ（キラッ）。」

「結構かつこよく聞こえるけど実際ほんとに何もして無いよなお前！」

「何言つてんだ。ちゃんと『突っ込みの技術』を鍛えてやっただろーが。」

「んなもんいらねえ！……はっ！また突っ込みを入れてしまっている！！」

「いや、お前にボケは似合わねえつて。」

「今はボケじゃねえよ！つてまた入れてしまったっ！！……ループしそうなのでこの辺にしておこう。」

「いいからシャルルに礼を………ん？………??」

「何書いてるんだシャルル??」俺が聞くと

「……！こ、紅鷹！？ななななんでもないよ!？」

シャルルがこれでもかという位に動揺した。

……流石に怪しい……

「なんだよ、何隠してんだよ。」

「な、なんでもないよ!！」目が泳ぎまくってんぞ。

「……まあいいよ。」そんなことを話して居ると……



「ねえ、ちょっとアレ……」 「ドイツの第三世代だ……」

にわかにアリーナ内が騒がしくなった。

……と！あいつはラウラ・ボーデヴィツヒとか言ったな……  
一夏目当てか？

ラウラは俺達の姿を見つけると真っ直ぐ向かって来て

「貴様も専用機持ちだそうだな。だったら話が早い。私と闘え。」  
と言った。

「嫌だ。理由がねえよ。」一夏が反論する。そうだな。

「そうだぞ。いくら一夏が馬鹿だからって一方的な暴力は良くねえ。」

「俺も一夏をフォローしてやる。」

「お前は優しさが時に人をより傷つけることを知るべきだ！……」  
……ありゃ？一夏が（#。）。 って顔で反論してきた……  
おかしーな……

「貴様には無くても私にはある。」

さて、こっからは冗談は抜きだな。一夏も何か思い出している。心当たりがあるようだ。

「……貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成しえた  
だろう事は容易に想像  
できる。だから、私は貴様を　貴様の存在を認めない。」

「一夏、なんだ。なにがあつた。言つて見る。  
一夏に問いかける。」

「……第二回IS世界大会、『モンド・グロツソ』の決勝の直  
前、

……俺は誘拐されたんだ。その時俺を助けたせいで千冬姉は決  
勝を棄権。

大会二連覇を果たせなかつたんだ。」

……そう言うことが。読めたぞ。

「おい。」　バーミリオンを展開したままラウラに問いかける。説  
得してやる。

「確かにはたから見たら『何でそんなことを』って思つたろう。俺  
も思つたろうな。

だけどな。それは織村先生が決めたことだ。後悔はしてないだろ  
う、

それをお前に蒸し返されるのは迷惑でしかないぞ。」

「黙れ。教官は強さをひたすら求めていた。それが・・・こんなやつのためにっ!!」  
感情をむき出しにするラウラ。・・・

「アホか。もし織村先生が一夏を見捨てて二回目の優勝を果たしたとしたら

織村先生はもっともっと『弱い人間』になっていただろう。おそらくIS関係

の事とは一切無縁の生活を送っていただろうな。二回目の優勝なんて快拳を

かなぐり捨ててまで自分の『大好き』な弟を守った。そしてなお後悔は一切しない。

そんな意志の強さにこそ・・・

・・・あの人の『強さ』はある。そんな中に何も知らない土足で踏み込んで

自分の見方だけで理解したような気になるんじゃない。」

そう言い放つ。「こ、紅鷹・・・」一夏が驚いているようだ。ラウラは一步も退かない。

さらに声を荒らげて怒鳴ってきた。

「黙れッ!!お前なんか教官の何が分かる!!!!」

(プツッ)!!!!

その言葉を聞いたとき、『感情』が体を一気に包んだ。

「……………分かるに決まってるんだろ。」

「なんだと?」

「ああそうさ!…よく分かるさ!…お前なんかよりもずっとなあ!」

一気に感情が流れ出す。そして口から空気を震わす怒鳴り声となつてあたりに響く。

「な……………」俺の気迫にラウラが思わず後ずさる。

「俺は間違えた! 『あの時』 ああしていればっ!…いつも後悔してるさ!…!」

だから分かるんだよ。誰よりも分かる。誰かを『守る』こと。それこそが『強さ』

だつて事が!…!

織村先生は一夏が好きなんだろう。全てを捨てても守りたいほどに!それが『強さ』だ!…!

お前は『強さ』の意味を間違えている! 『強さ』は……………」

「孤独の中で手に入れるものなんかじゃないっつ！！！！！」

今ならよく分かる。取り返しのつかないことになってしまった『今』なら。

「……………退けよ。もう一回じっくり考えて見やがれ。」

「……………ッ！黙れっ！！ならば闘わざるを得ないようにしてやる！！！！」

ラウラが漆黒のISを戦闘状態にする。刹那、左肩に装備された実弾砲が俺に向かって火を噴く。

「シユン……………ドガアアアアアン！！！！」

……………はずだった。

しかし、大口径の実弾砲はバミリオンの装甲を抉るような事は無かった。何故か。その前に俺の放った『ルプス』のビームが砲口に達せず

吸い込まれ、爆音と共に実弾砲が爆散して『無くなった』からだ。

「……………！！！！」ラウラとシャルル、一夏が驚愕する。

・・・それは、常人に出来る反応速度ではなかった。

「そ、そんな・・・」 ラウラがまだ驚愕の色を浮かべている。  
そんなラウラを睨み。

俺は告げる。

「下がれって・・・言ってるんだッ！！」

『その生徒！何をやっている！学年と組、出席番号を言え！』

そこにちょうど良くスピーカーから声が響く。

「・・・ふん、今日は退く。」 ラウラはそっぴつとあっさり  
とISを解除し、

アリーナを去っていった。

「・・・」 『守る』 『強さ』 か・・・

俺はその後自分が言ったことについて考えていた。すると、

「紅鷹、大丈夫？」 シャルルが心配していた。

「ああ……ありがとな、大丈夫だ。」 と返す。

「紅鷹……いつもは冷静なお前がこんなに声を荒らげるなんて……

過去になにがあったんだ？」 一夏も聞いてきた。

「聞くな。言わせないでくれ。」

全力で拒否しておく。

「そうか……」 不審に思いつつも納得してくれたようだ。

「もう何もやりたくないな……帰ろう……」

とほとほとアリーナを出て行く俺。

「一体何があったんだろうね……」 「そうだな……」

一夏とシャルルは、そんな紅鷹を見て、お互いに顔を見合わせるのだった。





第17話「アリーナでの衝突」(後書き)

はい！紅鷹とラウラの口喧嘩(?)でしたね……

言い争う時の紅鷹の口調っつーか雰囲気は

アスンさんのな感じですよ……では次回もお楽しみに

第18話〜二つの真実〜（前書き）

こんばんは。作者です。

今回はいろんなシャルルの秘密が明らかになりました！！まあ次回に続きますがね。

ではではどうぞ。

あ、更新遅れました。楽しみにしてくれた人すみません・・・

## 第18話〜二つの真実〜

〜自室〜

「……………はあ……………熱くなりすぎちまったな……………」

自室のドアを閉めてポフツ！とベッドに転がる……………

「もう……………なんつーかなあ……………なんもしたくねえー！」

一瞬二トの気持ちがあった……………気がした。

そんな感じでしたらしく一人、ボケーーっとしていると。

(コンコン)……………ん？誰？

「ほーい。」 ドアを開けると、そこには山田先生が立っていた。

「あ、高峰君だけですか？」 「??シャルルに用だったんですか。」

山田先生は首を振り、

「あ、たいした用でも無いんで高峰君からも伝えておいてください。」

「はい……………で？」

「えっとですね……………今月下旬から大浴場が使えるようになりますま

す。

結局時間帯別にすると色々問題が起きそうなので男子は週二回の使用日を

設けることになりました。」

(。 。 )

「・・・・・・・・・・・・・・・・キタ

(。 。 )

!!!!!!」

「マジですか先生!!」

思わず先生の手を握ってしまう。

今の俺の瞳は綺麗な マークになっているだろう。

だって!風呂だぜ!? シャワーじゃなくて『風呂』なんだぜ!!!?

「ありがとうございます先生ありがとうございます  
ありがとうございます先生ありがとうございます先生ありがとうございます先生  
ありがとうございます先生!!!!!!!!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、あはは・・・・・・・・」

ひたすらに感謝の言葉を述べたらちよつと引かれた。

と、ここでふと自分の状況を見してみる。

『自室で二人きりになった女教師の手を握り、(お礼の言いすぎで)

若干息が荒くなっている  
高校生。』

・・・完全に逮捕レベルの表現になった。

「何してるの紅鷹？・・・」 「げっ・・・何だシャルルか・・・」  
「あぶね。」  
他の女子だったらアウトだった。

「で？何で紅鷹は先生の手を握ってるの？」

・・・なんだろう。シャルルの言葉に若干棘があるぞ？・・・  
「！！あ、いいえ！なんでもありません！」 山田先生は赤くなって  
俺の手を解くと  
そっぽを向いてしまった。

「そ、そうだ！しゃるる、今週から大浴場が使えるようになるらしいぞー！」

「あつそ。」・・・機嫌直せよ・・・(;。)(・・・

「あ、後高峰君はちょっと用事がありますので一緒に職員室まで来てもらえますか？」

「・・・はい。分かりました。」

俺は山田先生に連れられるがまま、職員室へと向かっていった……

（職員室）

「……で？織村先生、用事ってのは??」

「ああ、その用事なのだが……。」「??珍しく齒切れが悪いな。」

「なんですか、はっきり言ってくださいよ。」

「……じゃあはっきり言っ。」「?」

「日本政府がお前とバーミリオンのデータを取るために研究施設に出頭しろ、と要請してきている。」

「!?!」

「ッチ!そういうことですか!」……どーしよ……

「お前の存在を隠し通すのもこれが限界だ今回はかりは抗えん。下

手をすれば

この学園が潰されてしまう。」

……上等だな。

「分かりました、行きましょう。」　　「そっいい、続けて

「しかし、バーミリオンの情報を掌握されれば戦争の火種になりかねません。

特に『篠ノ之 束』さんとかに。」

「分かっている！しかし、ではなぜ行くといったのだ？」

……ちげーよ。

「誰が『データを渡しに行く』って言いました??俺は『断りに行くんですよ。』

最悪脅しをかけときます。『関んな』って。」

「なるほど……そういう手もあるな……しかし、リスクが重過ぎるのではないか？」

「だーいじょうぶですって!?!で?何時です??」

「明日だ。」　　「速っ!?!?!」

「速っ!!」 「まあ一日二日程度だろっからな。」

「……………分かりましたよ。」 と、最後に織村先生が

「いいか? 『最悪の事態になったら』遠慮なくやれ(ニヤツ)。奴等は戦争の道具を作りたがっているんだからな。」

「分かってます(ニヤツ)。後先生、顔がにやけてますよ? 『お前もな。』 え……………」

ま、まあデータは絶対に渡しませんよ!」

「ならいい。部屋に戻れ。」

「ハイ。失礼します。」

こうして俺は意気揚々と職員室を出た……………

〜自室に戻って〜

「……………ふふうふうふうふうふうふうふうふうふう……………」

自分でも分かるくらいアブナイ笑みが浮かぶ。……………いかんいかん。

まあでもバーミリオンを戦争の道具なんかにしよつとする奴はぶっ



潰すけどな。

コイツは『大事』なやつだし……

「なーバーミリオン？」（……………／／／）

「だよな！……っと。シャルルはシャワーに入ってるのか。」

あ、

「ボディソープ切らしてたんじゃない……持ってつとくか。」

そう思い、特に何も考えずに脱衣所に入り……（ガチャ）

……………ガチャ???あ、シャルルか。

「ああ、ちょうど良かった……って……え”っ……………」

『女子』がそこにいた。

状況とブロンドの髪からしてシャルルに間違いないだろう。

「きゃあっ！！」シャルル（女）が慌ててシャワールームに逃げ込んだ。

これまでの全ての違和感が解消した。そして悟った。  
……そうか……おれは……なんて馬鹿だったんだ……

普通……こんなにかわいい男子が居るわけ……ないじゃないか  
ツツ！！！

「あ……えっと……ボディークリーム……置いてくわ……」

「うん……」 シャルルが上がってきたら気まずい空気になる  
のは間違いない。

……なんだよ……ヴァカは俺じゃねーか……

すすすごと部屋に戻る……と、

「なんでシャルルのやつ……男子のフリなんかしてたんだ？……」

そこだけが分からない。……と、そこで俺はあるものを見つけた。

机の上にぼつねんと置いてあったノート。

「そーいやちよくちよく書いてたよな……」

何の気なしにそれを手に取り開いた。開いてしまった・

その中には。

「月 日 ISを操縦可能な『織村一夏』との接触により  
機体

『白式』の情報を入手。そのスペックは……」

……！！！！！！

「なんだこれは……」 どうなってやがる！！？その答えは  
無常にもすぐに

導き出された。

「デュノア……デュノア社……そうか、そういうことかよ！  
！！」

本当に馬鹿だ。

何であんなことをべらべらと喋っちゃまったんだ!!

「……………シャルル……………一回じっくり話を聞かないとな……………」

さっきの気まずさとすまなさはどっへやば。

俺は緊張した面持ちでシャルルが上がるのを待つのだった。

第18話〜二つの真実〜（後書き）

はい。

日本政府に喧嘩を売ることになった紅鷹。大丈夫か??

後次回はシャルルの秘密、後編です。

お楽しみに〜〜

第19話「明かされる秘密」(前書き)

ども！今回はシャルルの秘密大暴露です！！

あ、後タイトル変更しました！

これからもよろしく願います！

## 第19話 明かされる秘密

しばらく後

「あ……紅鷹……上がったよ……。」

シャルルが気まずそうに姿を見せる。俺も緊張しまくっている。

別の意味で。

シャルルが女だった事は問題ない。いや、十分問題だがよ。もう一つ。

半端無い危険をはらんだ問題が一件……ええい！さつさと聞いてしまえ！！

「シャルル。」 「な、なに？……」 まだ気まずそうにしているシャルル。

「……すみませんでしたあっ！！」 謝るっ。まず謝るっ。

「ど、どつしたの!？」

「とにかく！色々とー！」

「！！！！／／／／．．．うん．．．気にしないで．．．．．」

赤くなって俯くシャルル。普通ならここで重い空気が舞い降りるとこた。

が、俺はハイテンションのままですっ切る。

「で！！そして！！ シャルル！！このノートは何だ！！」 ノー  
トを取ってシャルルの前に  
突きつける。

「！！！！」 シャルルの顔が青ざめる。

「紅鷹．．．どうしてそれを．．．．．」 「見ちゃったんだよ！だからさつき謝ったべ！」  
もはや変な方言すら出てきている．．．．．

「でだよ！何でこんなこと書いたんだ！ 女子の振りしてたのに関係あんだろ！？」

一気に押し切る！

「．．．．．」 シャルルは黙ったままだ。



「答える！・・・いや、答えてくれよシャルル！」 きつく問い詰める。」

「・・・それは・・・その・・・実家の方からそうしろっ  
つていわれて・・・」

ポツリポツリと喋りだした。

「デュノア社か。」 「うん・・・」

「ったく・・・なんでそんな・・・」 ふと呟くと

「僕はね・・・紅鷹・・・愛人の子なんだよ？・・・」

「!!」 なんだと？

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなった時にね、  
父の部下がやってきて  
色々と検査を受けて、IS適応が高いことが分かってね。非公認で  
デュノア社の  
テストパイロットをやることになったんだ。」

・・・そんな事情が・・・

「父に会ったのは二回ぐらい。会話は数回ぐらいかな。普段は別邸

で生活してるんだけど

一度だけ本低に呼ばれたことがあってね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に

殴られたよ。『泥棒猫の娘が！』ってね。参るよね。母さんもちよつとぐらい教えて

くれたらあんなに戸惑わなかったのにね……。」

愛想笑いをしたシャルル。でもその顔はなんだか乾いていた。

「……でね、しばらくして、デュノア社は経営危機に陥ったの。」

「！デュノア社ってでかいんじゃないか？」

「そうだけど、だって結局『リヴァイブ』って第二世代型なんだよ。ISの開発には

ものすごく時間がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの至急で成り立ってる。

それでフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から

除名されているからね。第三世代の型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、

資本で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと大変なことになるんだよ。」

……ああ、何か前セシリアもそんな事を言ってたな……

「でね、デュノア社も第三世代を開発していたんだけど、もともと

遅れに遅れていたからね、圧倒的にデータも時間も不足してなかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの予算が大幅にカットされたの。

で、次のトライアルで選ばれなかったら予算は全面カット。IS開発許可も剥奪される流れになったの。」

「・・・ふーん。で、だ。」

「何でそれが男装になるんだ？」まあ大体分かってるけどね。

「簡単だよ。注目を浴びるための広告塔。それに・・・。」

「それに？」俺が反芻するとシャルルは思い切ったように

「僕はね、白式とバーミリオンのデータを『盗め』って言われてるんだよ。」

「・・・やっぱな。だから時々そのノートに書いてたのか・・・！！！！って待て！そのノートには百式のデータしか書いてなかったぞ！？」

まさか・・・バーミリオンのデータはもう送っちゃったのか!？」

「・・・ごめんね・・・。」

「!!!」すまなさそうに言うシャルル。ぶつちやけ怒りたいがこんな顔をされちゃあな・・・

シャルルにも事情があるしな・・・

「はあ・・・まだ日本政府にも言っていないつてのによお・・・」  
「  
眩くと

「え！？日本が開発した機体じゃないの！？」 驚くシャルル。

「まあ・・・その辺は・・・な??」・・・ふう。なんとか隠し通  
した。

「まあ、そんなことかな?・・・でももう紅鷹にはばれちゃった  
し、きつと僕は

本国に呼び戻されるだろうね・・・デュノア社は・・・まあ潰れ  
るか企業の傘下に

入るかのどつちかだろうけど僕にはもうどうでもいいことかな・・・  
」

諦めきつた笑みを浮かべるシャルル。

・・・シャルルは、利用されてるままで良いのだろうか。

・・・言い訳が無い。いや、諦めているのか。

・・・お前は・・・そんなままで良いのか！？シャルルっ！！

俺はこんなにも『抗って』いるってのに！！

「ああ、なんだか全部話したら気が楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、  
今まで嘘をついてて・・・ごめん。」

深々と頭を下げるシャルル。

気がつけば、俺はそんなシャルルの肩をつかんで顔を上げさせていた。

「それで？お前はそれで良いってのかよ！？」

「え？」 シャルルが戸惑ったような声を上げる。

「お前はそれで満足してんのかって聞いてんだ！」 思わず声が荒くなる。

「確かに親は大事だよ！それは身にしみてる！だけど！」

「子供が親の道具であっていいはず無いだろ!!」

「!!!・・・ど、どうしたの紅鷹？」

「・・・俺にはもう両親が居ないんだよ。」

「!!!!!・・・ごめん・・・」書類にも載っていたであろうことを察し、  
謝ってくるシャルル。

「いいんだ。で、だ。シャルル、お前はたぶん本国に連れ戻された後は良くて

in the 牢だぞ？」

「しょうがないよ。僕には選ぶ権利が無いからね・・・」

あきらめたように笑うシャルル。ええい!どうして!

・・・あがこうとしない!!

「だったら・・・ここにいろ。」 「え??」 シャルルが間の抜けた声を上げる。

「いいからここにいろ!特記事項・・・何・・・番・・・?・・・あ

あ！！知らん！

『本学園における生徒はありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。本人の同意が無い場合それらの外的介入は原則として許可されていないものとする』

！よっしゃ言えた！ とにかく、後三年間は大丈夫だ！  
そんだけ時間があればなんとかなるって！

「……覚えてるようで覚えてないだね紅鷹……」

「ほつとけ！」

でもこれでシャルルの三年間は保障されたな。

「……ふふっ！」 シャルルが笑う。今度の笑顔は屈託の無い十五歳の笑みだ。

「！！……（やべ、めっちゃどきどきする）」

「?どうしたの紅鷹??」

「な、なんでもない！」 なんとか赤らんだ顔を隠す。

「????ほんとにどーしたの？」 不思議そうに覗き込んでくるシャルル。

ちよ！胸元が……！！

「しゃ、シャルル……そ、その……胸元を隠してくれ！」

「！！……紅鷹、なんか胸ばかり気にしてるけど。シャルルが半目で見てくる……心外だ！！」

「俺が何時胸を気にした!？」

「ふふ……冗談だよ。」 「!」 ったく……

「おっと、もうこんな時間だ。まってる。今日は俺が作ってる。」

「ほんとに!?!?楽しみだなあ!！」

「おお、こつから元気出せ。……俺だっけ戦ってるんだかな……」

「?……何か言った?」

「なんでもない。」 「こつして俺達は夕食の用意を始めた……と。」

ふと思いついた。



(『本学園における生徒はありとあらゆる国家、組織、団体に帰属しない。』

本人の同意が無い場合それらの外的介入は原則として許可されていないものとする』

??・・・って!!これ使えるじゃん!GJ俺!!)

そうだった!これで当てはめれば俺はあと三年は『日本政府』に属さない!!

・・・ラッキー!めんどくさい事が一個消えたぜ!!

一気に上機嫌になり、鼻歌まで歌いながら、俺は料理をするのだった・・・

第19話 明かされる秘密 (後書き)

どうでしたか？

・・・進行度が超絶に遅いですね・・・

ではでは

## 第20話 一波乱 (前書き)

ども、更新遅れました・・・スンマセン・・・

今回はVSラウラ再びです！！ではどーぞ。

## 第20話 一波乱

数日後

「ねえ、紅鷹、今日も模擬戦するよね。」 シャルルが聞いてくる。  
今俺は授業を終え、アリーナへと続く通路を渡っている。

あれからシャルルの『秘密』は誰にも話していない。あ、それと、日本政府の出頭要求はバツサリ斬った。

いや〜・・・法って便利やね〜・・・

「おう、俺は勉強できねえからISは極めておきたいしな。」  
まあ出来ないんじゃないかなってやらないんだけどな。

「うん！じゃあ急ご！今日はアリーナは空いてるはずだから！」  
・・・最近なんかシャルルは生き生きした表情になった。  
と言っかテンションが高くなった・・・

アリーナに入り、iSスーツに着替える。先に着替えるシャルルを外で待っているから、

(ふっ・・・過ちはもう繰り返しませんですよ？・・・)

「べ、別に一緒でもいいのに・・・」 シャルルのそ

んな声が聞こえた。  
？前は嫌がってたじゃん・・・

シャルルと入れ替わるようにして俺も着替え、アリーナに入ろうとした・・・その時、

『ドゴオンッ！！』

「なんだ！？」 なにがあった！？

爆心地を見ると・・・！！鈴とセシリアが飛び出してきた。そして

「・・・・・・・・・・」

黒煙の中には黒いESを駆るラウラがいた。・・・あいつらっ！

しかも鈴とセシリアはかなりのダメージを受けているようだ。

二人がかりなのに、だ、・・・否、二人がかりだからだな。あいつら仲悪いし・・・・・・・・

そうこうしているうちに鈴とラウラは格闘戦を始めた。格闘戦なら鈴のほうに分がある。

・・・思っていたが、ラウラの・・・ビームダガー（腕版？？）  
みたいなのと

ワイヤーブレードで見事に鈴が押されている。

「くっ！」 鈴が衝撃砲のエネルギーを集中させる、が、

「甘いな、この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは。」

鈴の衝撃砲はラウラの実弾砲撃によって爆散した。

「あゝ・・・あいつの実弾砲つてもう直ってたんだなー・・・  
・おっ、何だあれ、

停止限界かなんかか。なかなかやるな・・・」

俺はそんなことを考えながらぼけーっとしていた。が、

「ふん、そんなものか、ならば、私の番だ。」

そこからラウラは口元を愉悦に歪ませ、一方的に鈴とセシリアを殴り、蹴り、いたぶり始めた。

「！！・・・アイツはっ！シャルル、いくぞ！」 「うん！」

俺はバーミリオンを展開させると、ラケルタでアリーナに張られているバリアを

『溶かし』、丸く『くりぬいた』。そこからアリーナ内に進入、三人の間に割ってはいる。

「やめろおおおおお！！！」 ラウラに向かって突っ込む。しかし、

「ふん・・・直線的で感情的、絵に描いたような愚図だな。」

ラケルタを振り下ろす直前で俺の体がピタリと静止した。

「!」

「やはり敵ではないな、この私と『シユヴァルツェア・レーゲン』の前では

貴様も有象無象の一つでしかない、消えろ。」

ラウラが隠し切れない笑みを浮かべる。

だが、

「『消えろ』だア？そんな言葉を、軽率に使うんじゃない！愚図の力を、舐めんなあ!!!」

俺はいったん太陽炉を三機とも停止する。

おそらくあれは『慣性』をなくす兵装だ、だったら。

最初から動かなければ良い。

『慣性』とは、その運動の状態を保とうとする力、だったら、動かなければ良い。

そして、全ての太陽炉を切ったことで『余った』大量のエネルギー

を、

ラケルタの一本に全て集める!!

バーミリオンが、全く浮けなくなると同時、消えかかっていたラケルタの  
ビーム刃が巨大に膨れ上がる。バーミリオンの全長を軽く超えている。

「何!?!」 実弾砲を向けたまま、驚愕の表情に変わるラウラ、  
・・・隙だらけだ!!

「食らえやあああ!!!!」

力づくでラケルタを振り下ろす、巨大に膨れ上がったビーム刃は  
『停止結界』そのものと実弾砲を一気にぶった斬った。

「・・・ちいつ!」 いったん距離を取るラウラ、その顔からは  
まだ驚愕の色が  
抜け切れていない。

「シャルル! 鈴とセシリアは!?!」 「大丈夫! 意識はあるよ!!」  
・・・ふう、と

「鈴! セシリア!!」 今になって一夏がこっちに来た。・・・



遅エ……

「一夏とシャルルは二人を!!!」 「分かった(よ)!!!」

「う……一夏……」 「無様な姿をお見せしてしまいましたわね……」

「もういい、何も喋るな、後は紅鷹に任せよう。シャルル、救護室に連れて行こう!」

「分かった!紅鷹、後は任せたよ!」シャルルの声に

「おk……さて」 答え、ラウラのほうに向き直る。

「面白い、世代差というものを見せてやる。」

「いや、お前のほうが古い機体だかな?」

「!……黙れ。行くぞ!」 「いつでも!」

ラウラが飛び出そうとした瞬間、誰かが俺達の間割り込んできた。

『ガキン!』と鋭い音がして、ラウラは加速をストップさせる。  
そこにいたのは、

「おお、先生。」 「教官!？」 織村先生だった。

「ってかそれISの近接ブレードだよな?あんたを一回スカウターで見たいわ。」

「……模擬戦をやるのにはかまわん、だがアリーナのバリアを破壊するようでは看過できん。この戦いの決着は学年別トーナメントでつける。」

「はい……………」  
「教官がそうおっしゃるなら。」

そういつてラウラはISを解除し、アリーナから去って行った。

「高峰、デユノア、織村もそれで良いな。」  
「……はい……………」

「では、今後一切の私闘を禁止する！解散！！」

織村先生が手を叩くこうして、結構ガチな模擬戦（汗）は幕を閉じた……

第20話 一波乱 (後書き)

はい、と、いうことで！次回はトーナメントかな？

お楽しみに！

## 第21話の気持ち（前書き）

どもども、作者です。

更新遅れました・・・すみません・・・

ここからはこんぐらいの鈍足更新になると思われます・・・

さて、今回はシャルルの気持ち！・・・まあもう分かっていますけど・・・

ではごいせ。

## 第21話 気持ち

保健室

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

はっきり言おう。気まずい。何だこの空気は！

「別に助けられなくて良かったのに。」

「あのまま続けていれば勝ってアホか。」「うううううう。」

現在俺達は保健室にいる。そしてそこには不機嫌な怪我人が二人。

「・・・・・・・・機嫌が悪い怪我人ほど扱いづらい物って無いよね・・・・・・・・反論しにくいし。」

「お前らなあ・・・・・・・・せつかく紅鷹に助けてもらったってのに・・・・・・・・  
まあいいや、たいした怪我が無くて何よりだぜ。」「一夏がほつと  
した声で言う。」

「こんなの怪我のうちに入らな　　痛たたつ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味・・・  
つうつー！」

（…………。馬鹿なんだろうか。）「…………。馬鹿なんだろうか。」

「バカって何よバカって！バカ！」  
「二人のほうが大バカですわ！！！」

「！！…………。読まれただと！？」

「紅鷹・・・思いつきり口に出してたよ……………」  
「まじか。」

「どうやら俺は嘘がつけない人間らしい…………」

「好きな人に格好悪い所を見られたから、恥ずかしいんだよ。」  
「シャルルがそう言っと、」

「ななな何を言ってるのか、全っ然分かんないね！ここここここ」

れだから

欧州人って困るのよねえ!!」

「べべっ、別に私はっ！そういう邪推をっされるといささか気分を害しますわね！」

顔を余計に真っ赤にして怒り始めた。・・・いや。

「鈴・・・お前その言い分だとセシリアのことも馬鹿にしてることになるぞ？」

セシリアも欧州人だっつーの。」

「・・・あ・・・」

「そ、そうですね！さりげなく馬鹿にしないでいただきたいですわ!!」

「ふ、ふん！実際馬鹿にしたし・・・」

「何ですって!?!」

・・・どうやら余計な爆弾を落としてしまったらしい・・・

「さつてと。俺はもう戻るぜ。シャルルはどうするっ？」

「あ、僕もそうするよ、じゃあねー夏。」

「」お幸せに」。」「　　おお、まさかハモるとは。

「なっ！」「ら！紅鷹！！」「なな、何を！？」「・・・どういうことだ??？」

にわかに騒がしくなる保健室を俺達はクスクス笑いながら後にし、廊下を歩く。

「やゝ・・・やっぱあいつらをからかうのは楽しいなあゝ・・・」

「ふふっ・・・そうだね」

「でもシャルルはやめとけよ？お前がああ状況で一夏に見られたら恥ずかしいだろ？」

「えっ!?!・・・ぼ、僕はどっちかという・・・（紅鷹に見られるほづが・・・／＼／）」「ん?・・・」

「???なにを「ご」によ「ご」によ喋ってた。」最初のほづしか聞き取れなかった。

「やっ!?!なんでも無いよ!?!?」「そーか。」「ならいいか。」

「しっかしもう休みを挟んで次は学園別トーナメントかー。速いもんだな。」

「そうだね。」



そんなことを話していると……

『ズドドドドドド……ゴバン!』

「何!?何があつた!?!」

ちよつと引き返してみても……

「うわあ……なにあの人の数……」

保健室に大量の女子がなだれ込んでいた……あぶねえ……  
……(汗)

「一夏……お前の事は忘れるまで忘れないよ……」

「それ結局いつでも忘れられるってことだよ……?」

そんなやり取りをしている内に部屋のドアの前まで来た。

「よし、着いた。今日も夕飯は俺が作るぞ。」

「うん!紅鷹はほんとに料理上手いね!。ぜんぜん飽きないよ。」

「ありがと、じゃ、手伝ってくれ。」「うん!分かったよ!」

何でだろう。．．最近俺と二人の時のシャルルのテンションが高いんだが．．．？  
まいつか。いいことだ

こうして俺とシャルルは今日も夕飯を作る．．．。

く 食後しばらくして．．．

「．．．ふいー．．．眠くなってきた。よって今日はもう寝る。」

俺は唐突にそう切り出した。

「早い！？まだ九時半だよ！？」

「俺は健康優良児なの．．．眠．．．おやすみ．．．あ、電気つけといたままでいいから。」

「う、うん．．．おやすみ．．．」

と、さっさと寝てしまった紅鷹。早くも寝息を立てている。

と、

『ドドドドドドドドドド！』と地響きがこっちに近づいてきた。

「あ…………まさか…………」

シャルルがデジャヴを覚えたと同時に、

『ズバーン！！』とドアが開け放たれ、大量の女子がなだれ込んできた。

「デュノア君！！」 「高峰君！！…………てあれ？寝てる！！」

紅鷹が目を覚ますようすは全く無い。

「しー！静かに！」 皆を静めるシャルル。

「で…………どしたの??そんな慌てて。」

「…………これ…………」

女子一同から渡されたのは、

『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行うため、

二人組での参加を必須とする。なお………』

………学園の緊急報告文だった。

「「「「「私と組もう!? デュノア君!!!」」」」

「「「」

紅鷹が熟睡しているために、シャルルに視線が集中した。

( どうしよう……女だつてばれるわけには……それに……  
紅鷹と組みたいしノノノ )

シャルルは、かなり焦っていたが、なんとか

「「ごめんね……僕は……紅鷹と組むことにしてるから……

」

と聞いた。

「まあ、そういふことなら……」とあっさり引き下がってくれる女子。

シャルルはあっという間に誰もいなくなった部屋で嘆息し、

「ごめんね紅鷹・・・勝手に約束しちゃった・・・」と呟いた。

そしてふと紅鷹の寝顔を見ると・・・

「・・・うう・・・その可愛さは反則だよ・・・／＼／＼／」

紅鷹はいつものように寝ているだけだったが、その反則じみた寝顔を見たシャルルは

ベッドの明かりでうす赤い部屋の中、さらに顔を真っ赤にし、ゴロゴロとベッドの上で悶えた。

「ああ！僕ももう寝ちゃおう！それが良いよ！うん！」

シャルルはそう言いベッドのランプの明かりを消そうとした・・・  
・・・が、

紅鷹の寝顔をもう一度見たとき、別の感情が湧き出し、シャルルはスイッチに掛けた手を

下ろした。

胸の鼓動が速くなる。

『ここにいる。』・・・あんなことを言われたのは初めてだった。

・・・居場所が無かった。そしてその状況に慣れてしまっている自分がいた。

もはや何を言われても遠くのほうでしか耳に入らないような感覚になっていた。

ひたすらに無為な日常を過ごし、父からの命令で日本行きが決まっても

「ふーん・・・」といった感触だった。

だけど、この少年、隣で安らかな寝息を立てる少年、『高峰紅鷹』に会って。

・・・日本に来させられたことを感謝しても良いと感じるようになった。

(どうして、紅鷹は……こんなに僕の心を動かすんだろうね……)

時々見せるまるで、自分も運命に抗っているような態度、

それが、とても『強い』物に感じて。

「!?!」

気づくと、あと五センチの距離まで顔を近づけていた。

慌てて顔を離そうとするが……不思議なことに離れない。

そしてシャルルはふつ……と優しい顔になり、

「おやすみ……紅鷹……」

紅鷹の額にさつと唇を触れさせた。

「おやすみ……僕の……」

もう一度、小さな声で弦き、シャルルは眠れぬ夜を過ごすのだった。



第21話「気持ち」(後書き)

はい、割と原作パクリ部分が多かったりします……

次回は……やっとトーナメントだー……

ではまたー。

## 第22話〜一回戦〜（前書き）

ども！お久しぶりです。いつかに一回更新で安定です・・・

あと申し訳ない、前回は24話になっておりました・・・

今回は一夏が闘います！

## 第22話〜一回戦〜

「さて、今日ですな。一夏ちゃん」

「そうですなあ紅鷹さん……………；……………（人）……………  
、……………」

「どうしたの二人とも……………」

今日からというか今日、学年別トーナメントやねん。

今俺と一夏とシャルルはやつと解放された更衣室に居る。

『あー！早く学年別こねーかなー！！』って思ってたよ？昨日までは。

俺達二人は今日になって謎の倦怠感に蝕まれていた。それこそ口調がプチ崩壊する

レベルの。何故だ！……………寝過ぎか？寝過ぎなのか？？

「……………一夏、何この倦怠感。」

「分からん……心当たりが全くねえ……」

「風邪じゃん」『それは違う』『あ、そうなの……』

「そうか……これが憂鬱ってやつだな？ そうだ、これが憂鬱だな？」

例えるなら『月曜日』ですね。はい。

その時、

「しかし……すごいなこりゃ。」一夏がふと呟いた。

観客席には各国政府関係者、研究所員、企業エージェントなど、相  
当な

クライアントが勢ぞろいしている。

……皆目がぎらついている。データを盗みたいと  
言う奴らが

ほとんどなのだろう。

「……見るよ、皆きたねえ目をしてやがるぜ？」

ポツリと呟く。

「ちよ、そういついごと言っの……」 は？別にいいだろ。  
事実だし。

「一夏、あれが正常な目に見えますかー？どー見ても技術欲しさじゃねーか。  
ろくな大人がいねーな。」

「確かにな……」 「そうだね……」 「一夏とシャルルも納得している。シャルルなんか特に分かるだろうなあ……  
と、そうだ。」

「そろそろ大戦表が決まるな……にしても、手作りのくじとはお粗末な。」

「何でも、大戦表のシステムが壊れちゃったらしいよ？」

「はぁー……」

「もう溜息つくな一夏、しかし、一回戦の最初の最初なんて運いいなお前は。」

「誰とペアになっただんだ？」

「ああ、筈だ。鈴もセシリアも出れないしな。  
なるほどな……」

「そう言う紅鷹だって一回戦目じゃねーか。」

「まあな。・・・」

「運がいいって見方もあるよね・・・でも、僕は一番最初に手の内を

さらすことになるから、ちょっと考えがマイナスになってたかも。」

「「そういう見方もあったか（笑）」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

おお、ハモった。

しかし、なんと言うか・・・・・・・・シャルルらしいな・・・・・・・・しばらくの間シャルルと

一緒に演習してみて、改めてシャルルの優しさを知った。

なんと言うか・・・・・・・・シャルルのサポートが半端無く心強いのだ。負ける気がしなくなってくる。

「援護は頼んだぜ？シャルル。」

「うん！任せてー!!」

嬉しそうに笑顔を浮かべるシャルル。テンションの上がりようがすげえぞ？・・・・・・・・

と、

「あ、対戦相手が決まったみたいだぞ……」

一夏の声に、いったん俺達はモニターを凝視した。と、

「お、決まったか……っておい一夏……おま……」

「え？……あ……」

「わあ……すごい偶然だね一夏……」

三人でポカーンとした表情になる。

一夏と篝ペアの最初の対戦相手はなんとラウラのペア（もう一人は普通の生徒のようだ）

だった……。ドンマイ&頑張れ

『一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたと言うものだ。』

『そりゃあ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ？』

試合開始まであと五、四、三、二、一、……。開始。

『『叩きのめす』』

俺は、試合開始と同時にイグニッション・ブーストを使い、ラウラに突っ込んでいく

・・・・・・・・・・・・・・・・一夏を眺めていた。

「ガンバレイチカー（笑）」

「紅鷹・・・・応援する気ないね??」

「あるよ?」

「誰を?」

「ラウラのペアのやつ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ・・・・確かにね・・・・。だつてさ、スゲーかわいそうじゃん！因縁の対決の中に一人だけ無関係。」

・・・・・・・・・・・・・・・・かわいいそうじゃん!?



『ふん……』 ラウラが右手を突き出す。

「……………A I Cか、厄介だな。」

「そうだね。特に一夏も篤さんも同じ接近特化型だから余計につらいね……」

「そうだな……」

俺は、病室での鈴たちとの会話を思い出していた。

『A I C? ……何だそれ?』

『一夏、A I Cはアメリカの諜報機関だ、忘れんな。』

『紅鷹、それはC I Aだよ?』

『……………知ってて言った。』

『シユバルツエア・レーゲンの第三世代型兵器よ。  
アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略。慣性停止能力。』

『『ふーん。』』

『ちなみに一夏さん。P I Cはご存知ですよ?』

『・・・・・・・・知らん。』

『おいおい・・・・・・・・そんなことも知らねえのか一夏・・・・・・・・』

PIC、略してピック。ギターのあれだつて。あれ。』

『ぶふつ・・・・・・・・紅鷹つて結構ユーモアセンスあるよね・・・・・・・・』

『ありがとう^^』

『得意げにすんな! (泣)』

『・・・・・・・・あ、あんた達ねえ・・・・・・・・基本でしようが、き、ほ、ん!!』

全てのISはこのパツシブ・イナーシャル・キャンセラーによって  
浮遊、加速、停止を  
してんの!』

『あ・・・・・・・・残念だが・・・・・・・・俺のISは多分違つ。』

『『!?!?!?!?!?!?』』

『詳しくは言わんが。』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「……………あれ？……………あつれエエエエエエ  
エ！！？！？」

記憶を反芻していた俺は思わず叫んでしまった。

「！？……………どうしたの？」

「いや、なんでもない……………」

思いだせん……………なんでこんなどーでもいい所ばっか覚え  
てんだ俺は……………

最近、記憶力の使い方を誤ってる感が否めない。

教科書とかは覚えれんにすっごい隅のほうにある豆知識みたい  
なところばっか

頭に入ってる……………ずれてる？俺。ねえ、ずれてる？

心の中でorzのポーズをとる。

(……………)

……………ありがとうバーミリオン……………そうだ！俺は！ずれてな  
んか！

「……………紅鷹ってなんだか最近ずれた発言多いよね。」

「!?~~~~~!!!」(涙)

タイミングよくシャルルの言葉が俺の心を抉った……………再び  
orz……………

「ど、どしたの!?もしかして気にしてた!？」

「気にしてナイ……………」 「片言!？」

と、この時点で既にずれた発言をしていた俺……………  
試合中じゃん……………。

モニターに再び目をやる。と、

「おお、だいぶ進んでるな。」

ラウラのペアの女子は箒に倒されていた……………合掌。  
まあ箒も常人よりは出来るっばいからな。

しかし、一夏のほうを見ると、箒も膝を突いている。

「あれ?箒のやつ何時の間に……………」

「……一夏を一回庇って……戦闘不能だよ。」  
「……当の一夏がだいぶ押されているようだ。」

「しかし、箒は一夏思いだなー。俺と一夏だったら迷わず捨てる。」

「……けっこう鬼だね。」ま、一夏はしづむといし。」

……さて、冗談はこんぐらいにして……

「しかし、一対一だとリアルにやばいぞ？どうするつもりなんだろうな。」

「うん……一対一で相手にAIC、しかも一夏は接近特化型……」

……あれ？これ無理ゲじゃね？……声には出さないが。

と、その時、

『うおおおおおおー！』  
一夏が『零落白夜』を手に突撃（もとい特攻）をした。切っ先を前にした突きだ。

「あの馬鹿！無茶なことを」  
思わず叫んでしまった。そして、

『ふん、やけになったか。一対一では私には勝てない。消える。』  
ラウラがA I Cを起動、案の定一夏の身体はガチガチに固まる。

実弾砲を構えるラウラ。

・・・しかし、終わりは訪れなかった。

『紅鷹とまではいなくてもっ！！おおおおおお！！！！』  
一夏が吼える。そして、一夏はP I Cを停止、地に足をつけ、

・・・思いっきり、力技でA I Cを貫いた。

「なんだと!？」ラウラが初めて焦りの表情を見せる。  
・・・とつさに俺の真似をしたか

・・・やるな。いい判断力だ。消耗戦よりずっと良い。

「ぐうっっ!!」

零落百夜がラウラに突き刺さる。

咄嗟にラウラは後ろへ跳んだが、遅い。後退したラウラのシールドエネルギーは、もう0近く、紫電を放ち、強制解除が始まる。

「勝負あつたな。」

「そうだね。」

そう思っていないやつはもうここには居ないだろう。歓声に包まれるアリーナ。

………だが次の瞬間、『異変』が起きた………  
二つの。

第22話〜一回戦〜（後書き）

・・・どうでしたか？ちょーっただけいじってます。

そして次回はラウラの異変ともう一つの異変です！・・・多分・・・  
お楽しみに〜



## 第23話〜二つの異変〜（前書き）

・・・お久しぶりです！

いや〜・・・一ヶ月近くも更新できず・・・すいませんでした・・・

試験やらなんやら色々あったのだよ・・・orz

ここからもぼちぼち更新していきます！

では、本編をどーぞっ！

### 第23話〜二つの異変〜

その時、異変が起こった。異変が。

まずラウラが

『あ……あああああああッ!!!』

突然、割れんばかりの絶叫を放った。そして、シュヴァルツエア・レーゲンから

激しい電流が迸った。

そして、ラウラのISが変形……いや、再……構築? ?  
されていた。

黒い、どろどろの『ISだった何か』がラウラの体を包み込む。

「なんだよ……あれは……」

一夏が呆然と呟いた。俺も、シャルルも、呆気に取られてしまう。

……そして、もう一つの異変。

『ビ』

ッッ……! !』

突如、アリーナ全域に警報が鳴り響いた。

「！！・・・な、なんだッ!？」

「・・・何が起こってるの!？」

そのけたたましい音で我に返った俺達は周りを見渡す。・・・何が!？」

ラウラのISがバグった件という可能性もあるが、・・・皆が見ている前で

起こったことだ。わざわざパニックにする必要は無いはずだ。

現に今、観客席は皆パニックになっているし。

・・・と、言う事は・・・

「シャルル!! ちょっと来い!!」

「え・・・え?・・・ひゃっ!!」

しゃるるの手を握り、引きずるようにして俺は管制室?に飛び込んだ。

「何だ! 織村先生! 何があった!？」

そこでは、織村先生と山田先生が相当切羽詰った様子でなにやら話していた。

そしてこっちを振り返り、

「ツ・・・高峰! デュノア! 何故ここへ来た! 今日はこの場所へは立ち入り禁」

「いいから答える!!」

嫌な予感がした俺は、タメ口で先生に問い詰めた。と、山田先生がガタツツと

立ち上がり、振り返ってこう告げた。

「先生！着弾まで残り五分を切りました！！指示を！！」

「……え？何？……着弾？」

「先生……いいから言ってくれ。ラウラのIS暴走『以外の』  
なんか  
あつたんだろ？」

さらに問い詰めると、先生はようやく話す気になっただらしく……  
「現在のアーリーナをターゲットに所属不明のミサイルが百三十機  
向かってきている。  
以上だ。」

「……あれ？……さらつと爆弾発言ですか！？」

「！？……対処は！？」

シャルルが声を張り上げた。それに対して先生は、

「今このアーリーナ内に待機するよう放送が流れている。アーリーナの  
バリアなら

五分五分で持ちこたえられる。正直賭けだ。」  
「  
としか言わなかった。」

「……そんな！一機でも入れば……」

「撃墜するとか言うのは……」

「それも考えた……だが！生徒を……生徒？……！」

と、そこで織村先生は何かに気づいたようなそぶりを見せた……  
・  
大体読めたが。

「……高峰、頼みがある。分かっています。俺が行くんですね？」  
・  
「……そうだ。」

というかこの展開は最初からわかってたような気がするんだけどね？  
そして、この変に出来過ぎた頭脳は、次にやるべき行動を全て理解  
させてくれる。

「そうと決まれば……時間が無い！シャルルは一夏の援護！」

「……うん……分かったよ。」

シャルルの返事を聞くより先に、俺は管制室を飛び出した。そして  
そのまま

まっすぐアリーナの外へと出る。

『ジ……ジジジジジ……ガン！』

バーミリオンを展開し、生徒を待機させるためにロックされたドアを  
焼き切って蹴破る。

そうして外に出て、空を見上げると、ハイパーセンサーを通して見る  
青空に、ポツポツと黒い点が浮かんでくるのが分かった。

……あれか。

「うし……行くぜっ!!」  
自分自身に掛け声をかけ、俺は迫り来るミサイル群に突っ込んでいった……

ラケルタを片手、ルプスを片手に持ち、最初のミサイルを打ち抜く。打ち抜かれたミサイルは一瞬膨張し、ド派手に爆発した。

「ゴバアアアアン……」

一つ一つを狙っていたらゲームオーバーだ。

そう思った俺はラケルタをしまつて「オロチ」を二枚とも展開させ、ルプすと

「アマフォルタス」の片方を構えて、距離を取り……

……乱射した。

「ドゴオオン!……ズドオオオン!!」  
球形の爆炎がいくつも上がっているのが見える。

赤と緑の光線はオロチを通して拡散し、弾幕として、あつという間にミサイルの数を減らしている。

「バシュツドシュン!バシュンドシュンドシュン!」はは、ちよるいちよろい!!」

片手にルプスを持ち、片手でアマフォルタス(片方)を抱えるという重装備に包まれながら笑う俺、これは思ったより楽に終わりそうだ……

・・・俺はその後もずっとこの戦法でミサイルの数を削っていった。  
そして、

「ゴ、バアアアアン！・・・おっしゃ！これで終わつたる  
！？」

だいぶ押されて近くで爆炎が上がったものの、最後の一機を撃墜し、俺は成功を確信した・・・いや・・・して  
いた。

「高峰君！まだです！」

山田先生の声が飛んだ、その声に気づくと同時に、

『ボヒュッ！』という音と共に、爆炎の中から五機のミサイルが俺  
の横を

通り過ぎて行った。

「しまったッ！！」

・・・また詰めが甘い！

あっという間にミサイルはアリーナのバリアへと向かう。

・・・仕方ない！『アレ』を使う！

「・・・くそッ！・・・『TRANS・AM』  
ッッ！・・・！」

バーミリオンの単一使用能力の名を叫ぶ。

すると、バーミリオンの各部装甲が『開き』、各部に搭載されているGNコンデンサー内部に溜め込まれていた赤色の高濃度圧縮粒子が放出され、

バーミリオンが朱色から真っ赤に輝き始める。

……そして、

俺の中で、時間が止まる。

いや、時間の流れが遅く感じる……ああ……トランザムって、

……

こんな感じなんだ……。そして、俺はそのゆっくりとした時間の中、

ラケルタを両手に持ち替え……

『普通』に近づいて、ゆっくりと進んでいるミサイル五機を『普通』に

切り裂き、『普通』に距離を取った。

そして……『TRANS-AM-SYSTEM』を切る……

どうやら

自分から切れるようだ……と、

「「「「ドガアアアアン!!」「」「」

世界が、一気に動き始めた。そして、



「・・・・・・・・・・うぐ・・・・・・・・ツツ!!」

『ズツ・・・』というような感じで、頭が締め付けられた。相当苦しい。

そうか・・・・・・・・これ・・・・・・・・自分にも影響が出るのか・・・・・・・・。

エネルギーも限界。俺はこの頭痛に耐え切れずふらふらと地面に降り立ち、

ISを解除・・・・・・・・した瞬間。

「エ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぶっ倒れた。

平衡感覚がつかめない。こゝ、ここまで負担になるものだった・・・のか・・・・・・・・。

そんなことを最後に思い、地に伏したまま俺は意識を手放した・・・

第23話 二つの異変 (後書き)

はい・・・久しぶりに書いたので、

多少の違和感は許して欲しいです。

紅鷹君は少し倒れすぎのような気がします・・・

さて、次回は事件終了後ですね。

第24話 事後 (前書き)

どもども！最近更新が滞ってます。忙しい……

まあとにかくどうぞー！一息です。

## 第24話 事後

「ん．．．．．む．．．．．」

視界が薄く開く。目に入ったのはまた白い天井．．．．．最近しょっちゅう倒れてるような気がする．．．．．なんだろう。俺、すごい昏倒率だな．．．．．

『紅．．．．．紅鷹！ 紅鷹！！』

優しい、しかしどこか心配そうな声がかげられる。

そこで、俺の寝ているベッドの周りに多数の気配があることに気づいた。

「んん．．．．？なんだ、お前らか．．．．．グッ！！」

身体を起こそうとした瞬間、全身がきしむような悲鳴を上げた。痛．．．．．

「紅鷹っ！？」

「だ、大丈夫なのアンタは！？」

「そうだぞ！？って何があつたんだよ！？」

「その通りだ！！後あの時はなんだ！？」

「『『『『！！！！』』』』」

「．．．．．ナチュラルに混ざってますね先生．．．．．」  
さつきまで隣のベッドについていた織村先生もずい、と身を乗り出して来ていた。

「．．．．先生、目がキラキラ．．．．．ってかギラギラしてますよ．．．．？」

「ああ……大丈夫だ……一夏、詳しい事は先生から聞いてくれ。

……先生、『あれ』はどこのだったんですか？」

一夏の問いをはぐらかし、先生に核心を聞いておく。

……本当に、アレはどこのだったんだろう。

下手したら戦争を起こすつもりだったのか……？

「いや……まだ……分かってはない……手がかりも無い……

最終的にも分かるのかも五分五分といったところだな……」  
漠然としたことしか話さない先生。

「そうですね……」

と、言う事はどっかが組織で隠蔽してるのかもしれない……

「……で？一夏、そっちは何があったの？」

「ああ……それがな……」

そして、一夏は残らず話してくれた。ラウラが暴走したこと。

そして……そのラウラの暴走は……

……織村先生のことだったということ。そう、『大切な人』のことだった。

ということだ……

「そうか……だからか……」

「……そうか……俺には……分かるかもしれないな。ラウラの、気持ちだ。」

大切に思っている人がいて、その人への想いが強ければ強いほど、その……重い想い（洒落じゃねーからなっ！）は、ふとしたことで暗転して、

嫉妬や他の感情……殺意にすら変貌する。俺はそれを知っている。

何故か……散々味わってきたからだ。俺が。

「……ま、アイツももう大丈夫だな……どーせ一夏がまーたカッケーこと」

「言っただろ？そうだろ？まあただの八つ当たり？かもしれんが……。」

「とりあえず一夏は自重しろ。もうこれしか出てこんぞ……。」

「……そして問題はもう一つ。」

「先生、俺が出てた時の最後、アレが俺の単一仕様能力ワンオフ・アビリティです。名は『圧縮粒子解放』トランザムと言います。正式には

『TRANS-AM-SYSTEM』と言います。説明はめんどいのでしません。」

「以上！」

「し、しかし、もう少し……残像g『以上!!』……分かった。もう聞かない。」

「紅鷹……結構辛辣だね……。」

「……ま、自分で分かっただけのこと一杯あんだよ。」  
織村先生の願いもバツサリ切る。

しかし、実際に使ってみて始めて分かったことがたくさんある。リ  
スクも。  
まず、身体への負担が尋常では無い。発動させたのはあんだけ少な  
い時間。

・・・なのにこのザマだ。関節が取れそう。  
・・・何故だ。IS展開状態でのショックはPICとかで完  
全吸収・・・

・・・し切れてないのか??

どうやらトランザムはISの保身系の基本性能を上回っていた?よ  
うだ。

しかし俺の体が慣性Gで挽肉になる事は無かった。  
ほとんどは吸収(打消?)してくれていたようだ。

後もう一つ。何故にトランザムを切ってから一気に負担分が来た?  
どうやらこのトランザムは、単なる性能上昇(爆増・・・)とい  
うだけでは  
ないようだ。調べるつもりは無いが。めんどいし。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
俺が黙っている間に、一夏達は病室を出て行ってしまった。

「紅鷹・・・・・・・・ゆっくりねー」。  
シャルルも俺に声をかけて出て行った。・・・シャルルは優しいな  
あ・・・・・・・・

『ボタン・・・・・・・・』  
ドアが閉まる。さて・・・・・・・・

……ど う し よ う 。

もう十分寝ていたので眠くも無い。かといってまだ全身が痛いので立てそうに無い……起き上がるだけで激痛がぁ……。

「んむう……」

なんかねーのか、とあたりを見渡した、が当然何も無い。ので、

「よ……と……!!、イデデデ!!!」

リハビリ的なのをやることにした。が、しかし……これはそうそう

使えんぞ?……ふう、OOガンダムの人々は何で圧死しないんだろ。

……にわかファンなので分からん。こっちに来てからもうオタク要素も

抜けてるし。

「うん……痛い!痛い痛いって!」

あ、だんだん良くなってきた……でもってしばらくの後、

「ふう……お、お」

やっとある程度は動けるようになった。なんか筋肉痛と関節痛をこっちャにして

濃くした感じだな……しかし、まあだんだんとほぐれてきた……

床にっていた手を放して立ち上がる……

と、



「!.....」

「ありゃ?.....」

.....隣のズットの、ラウラ。

ラウラ・ボーデヴィツヒと、バツチリ目が合った.....

第24話 事後 (後書き)

どうでしたか？次はラウラとのやり取り。

フラグを立てるかどうかで迷ってます……。

うん……優柔不断でごめんなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0300x/>

---

IS～転生者と『朱』の物語～

2011年12月27日00時45分発行